東方鎮魂歌

ピュゼロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方鎮魂歌

【Ｎコード】
Ｎ６６０５Ｌ

【作者名】
ピュゼロ

【あらすじ】
もしも東方の世界に「彼」が行ったのなら……
そんな感じの東方、ジョジョの二次創作です。
この小説はほのぼのとシリアスで構成されているかもしれない。そうじゃないかもしれない。
とりあえず、お楽しみいただけたら、と思います。

はじめに。

はじめまして、ピュゼロと申します。
小説の執筆自体が初めてなのでいろいろと「うわコイツひでぇ・・・」と言いたくなるようなところもあると思いますが、どうか生暖かい目でみまもっていただければ、と思います。
また、感想は大歓迎です。意見・指摘、どんとこい。

～以下作品について～

・この小説は「東方ｐｒｏｊｅｃｔ」及び「ジョジョの奇妙な冒険」の二次創作です。苦手な方はご遠慮ください。また、作者は東方については紅魔郷をノーマルクリアできません。美鈴は永遠のライバル、レミリアに勝てる気がしない。よって、Ｗｉｋｉなどでも調べてはいますが、ご覧の方によってはキャラ崩壊ととれる表現があるかもしれません。・・・精進します。
・ジョジョからはほぼ登場しません。また、原作のような雰囲気では進行いたしません。ご了承ください。
・両作品とも、能力の解釈が違う場合があります。仕様です。でも仕様じゃないときもあるかも。

一応原作を知らなくても読めるように書いてはいるつもりですが、いかんせん作者の文才では理解しきれない部分もあると思います。そこはご容赦ください。また、拙作で両作品に興味が沸いたわ、なんて方は・・・。
ぜひぜひ、そちらもご覧ください。作者は狂喜乱舞いたします。
この小説がどうでもよくなるぐらいおもしろいです。

注・東方とは「東方ｐｒｏｊｅｃｔ」のこと。「東方～」とつく一

連の作品群。
ジョジョとは「ジョジョの奇妙な冒険」のこと。死ぬまでに一度は読むべき、と作者が思う少年漫画。
なお、両者ともに空を飛ばないものだけを指す。

この小説の表現の一部は、炉心様のサイト「究極スタンド大全」によっています。許可はいただいております。

序章（前書き）

それは世界に排除される宿命と、世界を排除する力を持つ者。
それは邪悪に染まる宿命と、世界を邪悪に染める力を持つ者。
これはそんな、終わってしまった物語。

序章

「あら、どちら様かしら？」
「……」

見る者が陰鬱とした印象を拭えないどこか鬱蒼とした森の中、一組の男女が向かい合っていた。
女性の方は、全身を紫のドレスに包んでいる。同色の瞳と、形容し難い微笑を湛える面貌を縁取った金の髪の上にカロッタにも似た面妖な帽子を乗せ、赤くあしらった日傘を白いドレスグローブのような細腕で支えたその陰影の奥に微笑が浮かぶ。形の良い紅唇からは白い歯がこぼれ、相手を観察するような菫色の眼は眠たげに半眼が閉じられている。どこか『中間』という印象を見るものに与え、いかにも貴婦人といった所作で午後の散策を楽しんでいるかのように、何の気負いも見せずに立っている。
男性を見ると、まずその上半身に目が行く。日差しというものをまったく考慮しないでただ風通しを求めたような網掛け。碧玉色の斑紋の浮いた毛髪は鮮やかな淡い紅色で、「時間」を掴みだし具象化したかのような刺青が伝う上膊は無造作に下げられている。ただ、その双眸には何か強烈な執念のようなものが見て取れ、見かけだけでなくその中身すら常人の枠に収まっていない。
もちろん両者とも服装という観点で見れば場にそぐわないことこの上ないが……ただ、男のその暗い瞳。貪欲なまでの生への渇望が走るその目は、奇しくもこの樹林に息づく生命そのものであるかのようでいて……。

酷く、異質だった。

「いきなりですまないんだが、貴方は『永遠に死に続ける能力』を解く方法を知らないか？」
口火を切ったのは男の方だった。
――彼は気づくとこの森に『いた』。いた目の前に女性がいたから質問をした、彼にとってはその程度の行動だが、もしここに第三者が存在しえたのならひどく困惑しただろう。
男が問いかける、その内容にはさすがに淑女然とした彼女も困惑したらしく返答が遅れる。
「ああ、混乱させてしまったのならすまない。知らないならいいんだ」
「――いえ。そうではなくて……ね？」
場を取り直そうとする男を、女性がさえぎった。何かを言いかけ思案し……まずは、と口を開く。
「初めまして、ね。私、八雲紫（やくもゆかり）と申します」
笑みをこぼして女が名乗りをあげると、ほうという表情を男が浮かべた。
「日本人だったのか？随分イタリア語が上手いな」
「……にほ、ん？　……ああっ、いいえ、それは違うの」
ええっと、どこから説明したらいいかしらね。
――そう呟く彼女は、どこか幻想のようなたたずまいで――。

「まず理解してほしいところは、この状況。……端的に言うわね。あなた、もう死なないわよ」
「何っ？」

男が思わず、といったように驚く声を出した。彼は自分の心臓がドドドドドという鼓動を刻み始めるのを感じた。何が琴線に触れたのか傍からは理解できないが、とにかく顔が驚愕としたものに変わる。しかし、すぐにまた表情を戻してしまった。ちらと男に見えた希望も、猜疑心の下にもぐる。

「その話……もう少し詳しく聞かせてもらえないかな？　何故俺の事を知っているのかも含めて」

「あら、警戒……させてしまったかしらね？　――こういう言い方はあまり好きではないのだけれども……まず一つ言っておくと、貴方を『引っ張ってきた』のは私なのよ？」

「っ！　それは、なんというか」

その女の一言をきっかけに、男の頑なさが瓦解した。一秒も前は、友好的に言葉を交わている裏でも常に警戒心を抱いていたのに、今は彼女の為「死すらも」恐れず死地に飛び込むような。

そんな、幻想を思わせる。

「いいのよ、まあ警戒して当然でしょうしね。それにそのぐらいの方がここでは生きやすいわ」

「……？」

どうも先程から女の話が要領を得ず、少々得心がいかない、という顔だ。先程から――いや、意識を取り戻した瞬間から、周囲への警戒はまったく緩めていなかった。しかしその彼でも彼女が現れたところが把握できない……つまりは、偶然という可能性を除外する限りにおいて、彼女は知っていたことになる。

自分がここに現れて、再び死ぬということを。

理由はわからないが、どうやらこちらの事情は大方知られているようだ。こうして暢気に会話が成立しているということ自体が、刻一刻とそれを証明しつつある。

何より、本当に彼女が救い出してくれたというのなら……。自分

にとっては、当面はそれだけで十分だ。
「貴方がいる此処。名を幻想郷という、妖怪と人間の共存する世界よ」
また、驚愕。
新たな知識――非常識は、つまるところ価値観の否定にも繋がりもする。人は咄嗟に己の手垢のついた常識にしがみつきたくなるのだが……彼はこれでも、ギャングの頂点として君臨していた時がある。見る目、というものに多少の自信があり、そうした昔の経験からか――昔というのもなにか違うが――この男は、少なくとも冗談の類とは受け取らなかったようだ。
――本気、という気配を感じたのか。

「……なんだか私は驚くしか能のないヤツだった気がしてくるな」
「ついでに言うなら、私も妖怪」
「ほう……？　何が違うのか一目見ただけではわからないな」
「――あら、恐れないのかしら。妖怪の定義は知っているのよね？　一応言っておくと、人食いではない妖怪の方が珍しいのよ？　勿論私も」
「いや……八雲、は……私の、恩人……ということになるのだろう？　ならば、それは失礼だ。それに――まだ少し会話をしただけだが、貴方が無闇に殺すような輩ではないことぐらいはわかる。生き物を殺さない生き物、とりわけ人間なんているわけもないしな。――とりあえずはそれだけで、十分だ」
……『生き物を殺さない生き物』あたりのくだりで、男は僅かに顔をしかめた。
そんなふうにも、見えたのだ。
「……紫でいいわ、その代わり私もディアボロと呼ばせてもらうわね」
いいわね、『常識』は十分……と、八雲紫が手に持った扇子の向

こうで、目を伏せて呟く。そして、感情の読み取れない瞳でディアボロを見据えた。
「それにしてもディアボロは、随分――――こういっては何だけど、優しくなったのね？」
「やはり知っている、か」
互いに何か共通見解のようなものを持てたらしく、具体的な言葉を使わずとも意思の疎通が図れている。視線を交わらせたまま、紫が一歩踏み出した。
「ええ。こうして助けた後で何を今更だけれど、貴方が今まで行ってきたことを考えると、ね……。場合によっては見逃すわけにはいかないの」
胡乱気な目つきのまま、ディアボロの過去を糾弾する。乾いた目が、土から湧いて出たミミズを蔑むような光を宿していた。
「……否定も言い訳もするつもりはない。ただ……」
「ただ？」
――ただ、今までを省みる程度には、彼は自分を認めてはいても。ここで言葉にためらうほど彼は自分を認められない――。
「ただ、後悔しているだけだ。あの時の事は」
多くを語るつもりはない、というよりはその一言に尽きる、というような。
彼の瞳の、その『黒さ』は――――果たして、強さなのか。弱さだとしたら、なんだというのか。
「……ねえ。やっぱり辛気臭いのは駄目ね。私の家へ行きましょう。そこでなら、お茶と共にゆっくり話せるわ」
そう言って紫は腕を一振りする。なんだかわからずとも、そこにある種の力の発動を感じたディアボロは反射的に身構えた。
「大丈夫よ、害はないから。……ちょっとだけ辛抱していてね」
そんな言葉と共に、ディアボロは唐突に重力に引かれ『スキマ』へと落ちて行ったのだった。

序章（後書き）

一応、感情が高ぶったときは「俺」、そうでなければ「私」、と一人称は書き分けているつもり、です。

さて。

いきなり原作を知らないとどうしようもない状況じゃねーか、とか一部がキャラ崩壊なんて生易しいものじゃねーぞ！　とか、ご指摘が今にも聞こえてきそうです。

一応、次話で人物紹介を行います。本文中でも説明する予定ですが、章として独立した紹介ページがあるほうがわかりやすいと思うので。

後、序章は謎めいていたほうが好みです。不満は好みの相違なんです、きっと。

設定紹介（前書き）

本文のスタンドとは、ジョジョにおける超能力を視覚的に表現したもの。

・原則一人一体のみ発現し、人型のスタンドの場合手足による戦闘も行える
・同じスタンド使いでなければ見れないうえに、スタンド同士でないと触れもしない（スタンドは一方的に干渉可能）
・本体の意志で自由に動かせるが、スタンドのダメージは本体に跳ね返ってくる（主に同じ部位）。また、本体から離れられる距離には限界がある
・スタンドは、固有の能力を持っている場合もあり、手足による格闘とは別。また、本体の精神力によって能力などを含めてスタンドは成長する
・近距離パワー型・遠隔操作型などがあり、前者は本体からあまり遠くには行けないがスピード・パワーが高い、後者は遠くまで行けるがその分パワーが弱い。スタンド能力に強弱はないが、「殴る」のが条件の能力は近距離パワー型、「弾丸を操作する」能力は遠距離操作型、などの差はある

などの特徴がある

設定紹介

【ディアボロ】
漫画作品「ジョジョの奇妙な冒険」、第五部に登場する。ギャング組織「パッショーネ」のボスであり、第五部最大の敵として主人公達の前に立ちはだかった。
スタンド「キング・クリムゾン」はまさに帝王の名に相応しい能力をほこる。

原作のラストで五部の主人公「ジョルノ・ジョバーナ」のスタンド能力によって、永遠に死に続ける。
具体的には、例えばローマのティベレ河で浮浪者にナイフで刺され死亡するが、気がついたら道路にいて、車に轢かれまた死亡・・・といったことを永遠と繰り返す。
死んでも気がついたらどこかにいる、のはジョルノのスタンド「ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム」の全てをゼロに戻す能力であり、そのパワーで殴られた者は死んだことさえもゼロに戻り、永遠に死に続ける。
作中では「終わりのないのが『終わり』　それが『ゴールド・E・レクイエム』」と描写されている。

本作においてはその死に続けている状況から脱出して始まる。

【キング・クリムゾン】
破壊力　－　A　／　スピード　－　A　／　射程距離　－　E
／　持続力　－　E　／　精密動作性　－　？　／　成長性　－
？
評価は基本的にA（超スゴイ）、B（スゴイ）、C（人間と同じ）

、D（ニガテ）、E（超ニガテ）の5段階。

・ディアボロのスタンドであり、能力は二種類。

一つは、この世の時間を消し飛ばすことができる。使用されると、例えばチョコを食べるという『過程』が認識できず、気がついたら口の中にある、というような『結果』だけが残る。本編中では「空の雲は千切れ飛んだことに気付かず、消えた炎は消えた瞬間を炎自身さえ認識しない」という表現がなされた。

さらに十数秒先の未来を視ることのできる「墓碑銘（エピタフ）」という能力がある。

この二つにより、例えば「エピタフで自分に不利な未来が見えて、その未来ごと時間を消し飛ばす」ことができる。

欠点は連続発動ができないこと。また、発動時間も限られている。

また、キャラの雰囲気は無限に死に続けたことによってかなり違います。丸くなってます。

原作中とは異なり自分の行ってきたことを「罪」だと感じています。

設定紹介（後書き）

スタンド能力評価はＷｉｋｉｐｅｄｉａより抜粋
またディアボロにはトリッシュという娘がいます。彼女も原作では主人公達と共に、彼と敵対しました。

次話からようやく本編へ。感想ください……待ってます……感想

ディアボロ浮上　その？（前書き）

妖怪のはびこる巣窟に落とされる人間は、そこで何を語らい何を得るのか。
時の狭間を垣間見るは、真紅の帝王のみで。

ディアボロ浮上　その？

さて、今私はスキマとか言うものを通って紫の家にいる。
目の前の八雲亭は、これぞまさに日本家屋・・・という雰囲気をかもしだしている。まあ写真でしか見たことはないんだがな。

「別に客間に直接行ってもよかったんだけれど、日本の文化色の強い幻想郷では靴は玄関で脱ぐのよ」
「ああ、大丈夫だ。各国の文化は一通りは精通しているつもりだし、少なくとも黄金の国などとは思っていない」
「ふふ・・・。なら大丈夫ね」

ついてきてねーと言い、奥へと進む背中を私は追いながら、大丈夫の言葉が黄金の国の方を指しているのではないよな・・・と少し考えてしまった。掴みどころのないやつだ、まったく。

「でねー、私の『境界を操る程度の能力』を使ったからあなたは今現在、妙に日本語がうまいイタリア人でしかないのよー」
「能力より、私の特徴が人種しかないということに驚いているよ。そうか、どうりでこの家の佇まいに感じるものがあると思った」
「？私は言語しか弄ってないわよ？」
「えっ」
「えっ？」

たわいない談笑に興じつつ、廊下を歩いていく。

・・・ああ、本当にいいものだな。
死なないというのは。

死なない、ということで逆説的に生を実感していると、角を曲がってきたものがいた。

「あら、藍じゃない」

そこには、鮮やかな金髪に耳を隠している帽子（おそらく・・・狐か？）を乗せた人がいた。よく見なくとも尾が九本ある。

「おや、紫様でしたか。・・・ところで橙（ちぇん）を知りませんか」

そこまで言った後女性はこちらに気づき、会釈をしてくる。

「そちらの人は・・・？まあとりあえず、初めまして。八雲藍（やくもらん）だ。
紫様の式をやっている」
「式と言うのは、要するに眷属みたいなものよ。
藍、彼はディアボロ。見た感じ人間よ」
「私は見た目だけでなく人間だぞ――――ディアボロでいい。よろしくたのむ、藍さん」
「ああ、私のことも藍でいい。こちらからもよろしくお願いします」
「そういえば藍って見た感じ九尾狐じゃない？」
「中身もしっかり九尾狐ですから――――立ち話もなんだな。こちらへどうぞ」

そのまま藍に続く。
・・・実質的な家長を垣間見た気がしてしまった。

「先程言っていたが、橙という人もいるのか？」
「ああ、私の式をやってもらっている。
私が言うのもなんだが、もうな！凄く可愛いんだ！」
だんだん饒舌に、笑顔になりながら話し続ける。
笑顔なんかとても愛くるしくてな、もし手を出すやつがいたりなんかしたら・・・と熱の入った口調で語りながらも、歩みはしっかりしていたようだ。
「まあこの続きは追々、な。ここで待っていてくれ、私はお茶の準備をしてくるから」
「ああ、すまない。
・・・・・・・・なあ、藍」
案内された部屋のふすまに手をかけたまま、声を掛けようか逡巡していたが・・・伝えることにする。
「出会ったばかりの私が言うのもなんなんだが、君が橙を愛しているというのはよくわかった。
逆に言うならそれほど付き合いが浅くてもわかるほど、だ。
それは・・・・・・すごいことだと、思う」
彼女は一瞬呆気にとられたような顔をしていたが、すぐににかっと笑って見せた。
「なに、あたりまえのことだ」
・・・・・・そうか。
私は、娘（トリッシュ）にそれすらできなかったのだな———

さて。
気がついたらいなくなっていた紫はどこだ？などと考えてはいても（おそらくは藍と会ったあたりからだろう）、ふすまを開ける手は止まらない。

「はーい、ディアボロ。遅かったじゃなーい」

――――いや、止めておけばよかった――――

そんなかすかな後悔が胸を過ぎるのは、目の前でぐだっと寝そべっている紫のせいではないと言えるほど私は人間ができていない。

「むっ、今何か失礼なこと考えなかったかしら？」
「いや、気のせいじゃないのか？」

逆にそうでないことを考えるほうが珍しい、なんて反論は精神衛生上よくないだろう。お互いに。

「なんで途中からいなかったんだ？」
「スキマを使った、というのはわかってるわよね？
橙を探していたのよ」

式の式ですもの、と取り出した扇子で口元を隠しながら紫はついっと指を振るう。
先程も見た光景だが、仰向けに寝ている分しまらない。

「ニャッ！」

そして今の動作で開いたスキマから、少女が落下してきた。
式の式、だとすると橙、だったか？本能なのか柔らかく着地していたし、心配は無用か。

「なあ紫、その子は？」

私はとりあえず座布団というヤツに腰を下ろして、そうたずねてみた。
動揺しているらしいあの子に聞くのは忍びない。
無理もないな・・・・・・。俺も通ったときもあれは慣れる気がしなかった。

「今話していたじゃないの」
「ん～・・・・アレ？！紫様？」
「橙、紹介するわね。彼はディアボロ、どうやら人間らしいわ」

毎回紫の紹介に悪意しか感じられない。

「あ、はい。初めまして、ディアボロさん。橙ともうします」
「そんな堅苦しくならないでくれ、ディアボロでいい。その代わり私も橙と呼ばせてもらうぞ？」
「・・・うん！よろしくね、ディアボロ！」

しかし、橙だけなのか？
紫に目で問いかけると、正しく伝わったようで、

「ああ、橙はまだ幼いから八雲を名乗らせていないのよ。

頑張って、一人前の式になるのよ？」

後半は橙の頭を撫で、優しく話す。

・・・これで橙をスキマから落として呼び出したという事実がなければな。

「おお橙、ここにいたのか。一応四人分用意してよかった」

と、そこに盆を手に持った藍が現れた。

・・・。

九本の尾を意に介さず、給仕をする片手間でほら紫様しゃんとしてください、橙は座っていてくれと機敏に働く藍は、すごいんじゃあないのか？

「日本茶もなかなかのものだな」

お茶で一息ついて、皆どこか弛緩した表情を浮かべる。

「紅茶を出そうと思ったんだが、家には日本茶しかなくてな。気に入ってもらえたのなら幸いだ」

「あまりえり好みはしないものでな、旨ければ満足だ。節操がない、とも言うのかもしれんが」

なにせ死の淵に立っていたとはいえカエルを捕食したぐらいだ。

「幻想郷には結界がはってあるわ。その影響で外の世界で忘れ去られたものが流れ着くのだけれど、外の文明も殆ど入ってこないわよ」
「例えば、妖怪・・・か？」
「ええ、そうよ。まあ結界をはっているのは私なんだけどね」
「一人でそんなことができるのか。さすがは大妖怪、といったところかな？
――妖怪のことは、仕方ないだろう。あれだけ文明が進歩しては信じろと言うほうが無茶だ」

私だって目で見るまでは信じていなかった。人間はおいそれとは信じられないだろう。
紫の話に同調すると、ええそうよね・・・とお茶をすすりながらぽつり、と言った。

「いい忘れてたけど・・・。あなたのいた世界と、この世界は違うわよ」
「・・・何？」
「いえ、見た限り文明のレベルや文化に違いは見られなかったからあなたの言ったことはあってるわよ？」

いや、そういうことを言いたいのではなくてな・・・。
思わず顔をしかめて嘆息すると、慌てて藍が取り持ってくる。
・・・・・・苦労人だな。いや、人ではないが。

「い、いやほら！だったらディアボロの前の世界の話とか、聞きたいなーって・・・・・・」

私の顔を見た藍の言葉がどんどんしりすぼみになっていった。そんなに辛気臭い顔をしていたのか？

まったく、と自分に少し呆れて苦笑しながら、彼女に向き合う。

「別に隠し通す、とかじゃあないんだが・・・。俺自身、まだ整理がついていないという感じでな。すまないがそれはまたの機会にしてもらえるとありがたい」

「いや・・・、私の方が無神経だった。すまない」

申し訳ない、と頭を下げる藍とそれを宥める私を、紫はじっと見つめていた。

・・・元凶は誰だったか。

「ねえ、ディアボロ。あなた、住居はどうするの？」

ん？・・・、考えなくてはいけない問題だな、たしかに。

「人はだいたいどこで暮らしているんだ？妖怪も多いらしいから、大方一塊で暮らしてはいると思うが」

「人間なら大体人里に住んでいるぞ。私も食料の買出しによく行くし、妖怪については里の守護者がいるから大丈夫だ」

「人里、なんてものがあるのか」

「んー、でもねぇ・・・・。ディアボロは人里にはあまり長くいない方がいいと思うわ」

「ん？それはなぜだ？」

「えーっと・・・・・・。あっ、そうだわ」

いい事を思いついた、以外の思考が感じられない表情の紫を見れば、素直には教えてくれないのだろうな、ぐらいはわかる。わかってしまう。

「ディアボロ、別に期限は決めないから、その理由を考えてみてくれないかしら？」
「いや、紫様、それは失礼ですよ・・・・」
藍が気を遣ってくれるが・・・・・・、おそらく紫は私を試したいのだろうな。
「藍、気持ちは嬉しいが大丈夫だ。
・・・紫、それは必要なことなんだな？」
問い詰めるような口調と気迫の私の言葉は、言質をとるため・・・というよりは確認に近いもの。誰だって無駄足は避たい。
「ええ、そうよ。詳しいことは、私の意中の人と同じぐらい話せないの・・・。だから信じてもらうしかないのだけれど、ね」
・・・。
「藍様ー、いちゅうのひとって何ですか？」
「あっちょっ橙、そこは突っ込んじゃ駄目だ」
・・・・・・。

ディアボロ浮上　その？（後書き）

書いていて、紫がぽんぽん隙間送還してたら靴とか大変だなーとふと思った。

ディアボロ浮上　その？（前書き）

揃いも揃い、如何する。何かをするなら、ゆかねばならぬ。
―――消し飛ばす時間は、どこといくか。

ディアボロ浮上　その？

「あら、いい匂い・・・、イタリア料理と言うやつかしら？」
「まあ、たしかに俺の郷土料理だ」
そう答えながらも料理を皿に盛る手は止めたりはしない。
「だが、言っておくがイタリア料理なんてモノはないぞ。地方ごとの特色があり過ぎて分けられる物じゃない」
「よくわかんないけど、ヨダレすびっ！な味を期待していいのね？」
「紫様、その表現はないです」

あの後、夕食の準備をするという藍の手伝いを買って出たわけだ。
本音を言うと紫の顔を直視できなかったのもある。
・・・切なくて、な。
何かできることは、と聞くと藍はん、と何かを閃いた顔をしていくつかの食材を出してきた。
「紫様は外に所用で出かけると、よくお土産を持ってきてくれるんだ。
だがこれらは調理法がわからなくてな。もしかして知らないか？」
出されたのはトマトや乾燥させたパスタなど。いずれもイタリアではよく使われるものだ。
「これなら、一品作れるぞ」
「なら頼んでいいか？材料は好きに使ってくれていい」

私は風呂の準備をしてくるよと言って、藍が出て行った厨房を見回す。
深めの鍋や各種調味料、冷蔵庫なんかもしっかりある。技術は隔絶されているんじゃなかったか？

「まあ紫が持ってきたのか。便利だしな」

とりあえず俺が作る物は目新しいだろうから、まずい思いをさせることはないはずだ。

「おいしい！すごくおいしいよ、ディアボロ！！」

結局メインのパスタを始め、一通り作ってしまった。
最後に作ったのはもう前世ぐらい昔なので、どうなるか心配だったが杞憂のようだ。

「そう言ってくれると俺も嬉しいよ。しかし俺もどうして料理なんて覚えているのか不思議なぐらいだ」
「とあるメイドなんかは、料理の腕はナイフ投げの技術に比例するなんて言っていたけどねぇ。
身体に染み付いているのよ、きっと」

・・・・・俺がスタンドを使えば、かなりはなれていても正確に標的を狙えるが、な。
殺人術の腕を誇るメイドってのはどうなんだ？

「それにしても、たしかにかなり美味いぞこれは。トマトか、今度

また食べ方を教えてくれないか？」
「ああ、俺でよければ喜んで。
橙、ほらこぼれているぞ」
「へへっ！ありがとう」

口の周りを拭いてやると、嬉しそうに猫のような目を細くする橙。
いや猫の式だという話だが。
馴れ馴れしい、と言われそうなぐらいだが、なんだか世話を焼きたくなる。
これは藍のことを言えないな。

「なんだかお父さんみたい！」
「そうか、俺にも娘ができたみたいで嬉しいぞ」

・・・ん？でも橙の母親、のようなものはたしか。

「あらあら、じゃあディアボロと藍は夫婦じゃない」

ごはッ！っと、案の定噎せ返始めた藍。・・・・・・いや、そんな反応されるとこちらとしても困るんだが・・・。

「あら藍、嫌なの？」
「い、嫌とかじゃなくて！」

たしかに私は橙を子供のように想っていますけどね、それとこれとは・・・・、と藍と紫が言い争い始める。

「藍様がお母さんで、ディアボロがお父さんだったらいいな！」

食卓を周って、橙がそう言いながら俺に抱きついてきた。

「・・・そうか・・・・・・・・・」

・・・そうか。
不意に、さっき言われた言葉が頭に浮かんだ。

「――――俺にも娘がいてな」

そう言って、橙を抱き返す。

「もう、会えないのか・・・・・・・・」

理解が及んでいなかった。
『世界が違う』その宣告の意味が、『もう戻れない』という事が。
無意識のうちに深く考えることを避けていたのかもしれない。ただ単に戸惑っていて思考が追いついていなかったのかもしれない。

「ディアボロ？」

・・・いかんな。
この俺が、橙に心配されるほど動揺していて涙を堪えるのが精一杯、とは・・・・・・。
俯いている為床しか見えないが、言い争いが聞こえない止んでいるため二人ともこっちを見ていることぐらいはわかる。

「なに、ちょっと感慨深くなっただけだ」

もう、大丈夫だから。
抱くのを止めて、橙を正面から見据える。
「もう、大丈夫だ」

結局はその後も、何事もなかったかのように食事が続いた。
そんな気遣いが、それこそ家族のようで。

食後のお茶（紫は酒がよかったようだが、断った）を飲んでいたときだ。

「考えたのだけど・・・」

パンッ！と紫が扇子で立てた音で、視線が彼女に集まる。

「藍、橙。あなたたちさえよければ、ディアボロにはここで暮らしてもらいたいの」
「紫？」
「悪くないと思うわよ？勿論嫌じゃなかったら、だけど」
「いや、そうではないんだが・・・」

この世界が、私のいた世界ではない・・・と、なるなら。
今の私に、やりたいこと――――やるべきこと――――は、ほぼないと言ってしまっていい。
別に助け出されたことを不満に思っているわけではない。助かった、

それだけで私は十分だ。それに、たしかにここで好意に甘えるのもいいだろう。
だが、それは私のやってきたことを忘れる、ということだ。
・・・いやだから、忘れないといってもやるべきことなどこの世界ではない。
――――だったら。

「ホントッ？一緒に暮らせるの！？」
「・・・私も、そうなら嬉しいぞ、ディアボロ」
「どうかしら？」

――――ここが、こうして俺を求めてくれるのならば。
例えそれが、救い出してくれた紫への、贖罪とすり替えた感謝でも。

「――――ああ。これからも、よろしく頼む、皆」
「ああ、よろしくな」
「他人行儀ねぇ。これからは家族なのよ？」
「今度いっぱい遊ぼうね！」

悪くない。
一度は拒絶したものに、再び巡り合う事。
陳腐な芝居のような筋書きだが、甘受するのも、悪くはない。そんな気分だった。

「しかし、まさか世界を超えていたとは・・・」

まったく、としみじみ呟くディアボロ。ため息から幸せが逃げるのなら、彼は今日でどのくらい逃がしてしまったのだろう。

「同じ世界の中に、ディアボロの世界やここみたいな非常識がいくつもあるほうが不自然・・・なのかもね」

「非常識？紫様、幻想郷はともかくディアボロの世界もそうなのですか？」

「たしか、ディアボロは時間を消し飛ばすことができるんだっけ？こっち風に言うなら『時間を消し飛ばす程度の能力』かしら」

「それはたしかに異能ですけれど・・・。実際に何ができるのかよくわからないな」

よかったら、ちょっと使ってみてくれないか？と問いかける藍。

「ふむ、そうだな・・・。

橙、ちょっとそこの煎餅を食べてみてくれないか？」

「いいよー」

二つ返事で了承し、橙は囲んで座っている食卓の上の煎餅に手を伸ばす。

「いただき・・・あれ？」

だが、橙がその煎餅を食べようとした瞬間、煎餅は半分ほど食べられていた。

「今のがそうだ。橙が『煎餅を食べる』という過程を飛ばし、『食べた』という結果だけがこの世に残る。
消し飛ばされた時間は、私にしか認識できない」

「よくわからないけど、すごいんだね」

パキッと、橙が残った煎餅を齧りながら言う。

「・・・たしかにすごいぞ、それは。どんな相手だろうと、最低でも無傷で逃走が可能だ」

橙もそんな能力だったら安心なのにな、と藍が続ける。

「そこまでいくと過保護かもしれんぞ、藍」

「でも嬉しいです、藍様！」

橙！藍様！と抱き合う二人を尻目に、紫が苦笑するディアボロに話しかける。

「いつの間にかいい時間になったことだし、ディアボロ。
ちょっとあなたみたいな能力の、時間を操る従者が仕える館に行ってもらえない？」

極々自然に問われ、咄嗟にああ、と生返事を返すディアボロに。
何っ、と聞き返す暇もあればこそ。
選択肢は用意されているようで、その実足元に広がったスキマに落ちるより他なかった。

「あれ？紫様、ディアボロは？」
「藍と夫婦扱いされるのが嫌だって・・・」
「いや騙されませんよ」
「いっぱいお話してもらおうと思ったのに・・・。いつ帰ってくるんですか？」
「そうねぇ・・・。もしかしたらしばらくどころか、帰ってこれないかも」

ディアボロ浮上　その？（後書き）

キング・クリムゾンの能力については原作においても曖昧で様々な解釈が可能なので必然作者の解釈が（ｒｙ　まあ一般的な注意書きだね！

でももしかしたらイタリアについては、作中のようにトマトや乾燥パスタは一般的じゃない可能性もなくはない。そこはがまん。

帝王、鬼、その邂逅　その？（前書き）

赤紅朱緋。あか赤アカ。真紅・・・深紅。
純粋とは何色なのか。狂気とは何色なのか。『目』もまた何色をしていたか。
今宵、陽気な原色が王の凱旋を唄う。

帝王、鬼、その邂逅　その？

「まったく・・・。目、目、目、だ」

あのスキマの中の目はいったいなんなんだ？
突然落とされるのには悲しいが早くも耐性がついたようで、そんな疑問が浮かんだ。

「スタンドならば、紫の心象風景ということになるのか？」

まあ会ったら聞けばいいか、と頭を切り替えて傍に落ちていた靴を履く。靴も送るぐらい気を遣ってくれるなら、説明をしてほしいものだが・・・。
そんな私の前には、八雲亭と趣を真逆にする洋館があり、目に鮮やかな真紅に塗られている。

「偶然とはいえ、私のスタンドと同じか。少し親近感が湧くな」

・・・ついでだ、少しだしてみようか。

「キング・クリムゾン」

私がスタンド、キング・クリムゾン。
スタンドは、その者の生命エネルギーの具現化した存在だ。姿も能力も自身の精神に依存しているため、大概は人型だが言葉を話すものや魚を模したものなどその種類は様々だ。まあ元々区別するようなものでもない。
私の身体から徐々に、飛び出るように出現するそれは、真紅（クリムゾン）の名に相応しいその外面を檻（エ）のような紋様が覆い、額にはもう一つの顔墓（ピタフ）

碑銘がある。
スタンド使いでないと見えもしない、さらにスタンドにはスタンドでないと干渉できずすり抜ける、挙句その四肢（があるタイプは）による相手に対する一方的な攻撃が可能、というのがスタンドだ。
さらには、キング・クリムゾンは能力として『時間を消し飛ばす』ことができ、額のエピタフは『未来を映す』。
純粋なパワーも人体を容易に貫くほどだ。

「・・・・・・なんだか、スタンド使い同士で戦うのではなくて、妖怪のような生命としての強者と戦うためのもののような気がしてきたな・・・」

紫の言っていた紅魔館とは、十中八九目の前のそれだろう。
とりあえずは、行くしかないか。

「願わくは、帝王の真紅（私のスタンド）を使う機会がないことを祈ろう」

――――だが彼はのちに知ることになる。
どこまでいっても、赤は吸血鬼の領域であると――――

「止まりなさい」

ディアボロが洋館の方へ歩き出そうとすると、門の横の番小屋から女性が一人出てきた。
スラリとした肢体に、赤と言うにはやや薄い朱に染まった頭髪。
そして、油断のないその構えと侵入者をひたと見る強い視線。

（武芸者・・・。それも俺如き相手にもならないほどの達人、か）
もちろんスタンドを使えばその限りではないが・・・と思いをめぐらす彼に、彼女は詰問する。
「門番として、招かれざる侵入者は追い返さねばなりません。この紅魔館に、何用ですか？・・・・・・それに、先程いたもう一人はどこです？」
もちろんディアボロは最初から一人だ。だから思い当たる節は一つしかない。
彼は下手に刺激をして戦闘にならないように、静かに告げる。
「私は最初から一人だったから、君が言っているのはおそらく私のスタンド能力のことだろう・・・」
ゆっくりと人影が、彼に寄り添うように現れる。
「私の名はディアボロだ。現在は八雲紫のところに厄介になっている、いわゆる外来人というやつらしい」
これは彼が紫から聞かされた事だ。いきなり異世界と言っても、信じる人もなかなかいないでしょう、幻想郷（ここ）なら外来人と言えば見慣れない者でも納得してくれるわ、と。
案の定、多少なりとも警戒心は薄れたようで、彼女は構えを下げる。
「あのスキマ妖怪の所、ですか。まあ外来人なら納得です。
・・・申し遅れましたね、私は美鈴。紅美鈴（ホンメイリン）です。美鈴と呼んでください、ディアボロさん」

「いや、私もディアボロでいい。
それより美鈴、館の主人から何か言われていないか？私はいきなり紫に紅魔館に行ってこい、と落とされたものでな」

「いえ、職務中ですから・・・。
私は何も伺っていませんが―――。・・・・・・・・・八雲さんも、何か考えあってのことでしょうね。
わかりました、メイド長に取り次いでみましょう」

こちらです、と歩き出す彼女にすまない、と返しつつディアボロは付いていく。

「一つ聞いてもいいですか？そのスタンド、というのはなんなんです？」
「スタンド、か・・・。簡単に言うと、人間の生命エネルギーを具現化したものだ。私のような人型ならそれ自体で戦闘を行えるし、大概が何らかの能力を持っている」

そういえば紫たちに見せたときは何のリアクションもなかったな。見えていなかった？いや、現に美鈴は見えた。妖怪には見えるんだろうが・・・。

「私のような、ということはスタンドを使える人は複数いるんですね？
そうですか・・・。人間も、どんどん妖怪に対抗できるようになっているんですね」
「？」

彼女、紅美鈴は元来が穏やかな妖怪で、人間には友好的だ。
人間が好きだからこそ、人間の武術を学んだし、以前主人が起こした異変(ヤンチャ)以来たびたび侵入してくる人間の魔法使いも本気で追い払えないでいる。
そんな彼女は、少なくとも自身の行ったことが原因で人が死ぬのを好まない。彼も、適当に追い払うつもりだったし、八雲紫の働きかけというから渋々通したものの、万が一を思って彼の戦力であるという「スタンド」について聞いたのだ。
一応は安心した、それにいざとなればあの八雲紫も出張るだろう、そんな風に彼女は自分に言い聞かせたのだった。

――――人間より遙かに生きる妖怪の、彼女にすら未来は知りえない。視ることができるのは、彼女の主人であり妖怪として頂点である吸血鬼と――――

「わかりました。こちらですわ」
ディアボロは紅魔館のメイド長である十六夜咲夜（いざよいさくや）に案内され、館の主人のところへ歩を進めている。
美鈴が彼女に案内を任せ、職務に戻る際に言った『また・・・会えますよね？』という一言が彼の胸の中に渦巻いてはいたが。
（門番である彼女が妖怪であるなら、十中八九主人もその類であろ

うな・・・。こちらの戦力を確認したこと、そして今までの態度から考えると・・・彼女は言うなれば人間好き、そしてここは人間にとって危険、か）

沈黙が二人を包む中、ディアボロは紅魔館に対するある程度の結論を胸中で下していた。

「・・・なあ咲夜、君も人間を食べるのか？」

だから、その問いかけにも特に意味はない。

「いいえ、私は人間ですので。・・・・・・お嬢様方の御食事の用意はいたしますが」

「・・・。そうか」

（お嬢様方、な。はたしてどんな意味合いとして取ったものか）

特に意味など、なかった。

「お嬢様、失礼します。ディアボロ様をおつれしました」

窓が異常に少ない館を歩きつめ、一つの部屋に到着した人間二人。歩いている最中ディアボロは、どこもかしこも一面赤いその内装に思うところがないでもなかったが・・・、外装にのみ満足していることにした。

「あら、ようやく来たのね。入って頂戴」

この屋敷の例に漏れずその赤い部屋。
いくつかの家具とテーブルと、対面に設置されているイス。その片方に、彼女は座っていた。

「初めましてね、ディアボロ。貴方のことは八雲から聞いているから結構よ。
私はレミリア・スカーレット。吸血鬼と呼ばれるわ」

――――そうきたか。
ディアボロは示された向かいのイスに座って、そう思った。

「レミリア、と呼んでも？吸血鬼殿」
「構わないわ、人間さん」

レミリア・スカーレット。
本人の弁によれば彼の串刺公ヴラド・ツェペシュの末裔であり、五百年の時を生きるバンパイヤ。
風貌こそ幼いものの、人間が相対すればまず呑まれてしまうだろう。
・・・本能が、生物としての強者（うえ）を前にして喚くのだ。
――――あの紅眼は、自分はエサとしてしか映さない、と――――

既に咲夜は二人分の紅茶の用意を終えて退出し、部屋にはディアボロと笑みを浮かべるレミリアが残っている。

「・・・・・・」
「・・・・・・」

しばらく紅茶を飲んでいたレミリアが、唐突に「ちょっといいかし

ら？」と言った。
そのまま彼の手を取り、目を閉じる。
「・・・」
時間にして五秒程度、彼女は「ありがとう」と言って手を離した。
「今日のところは泊まっていきなさい。
今はもう夜、妖怪の時間よ。迂闊には出歩けないでしょう？」
「・・・感謝する」
呼んだのはこっちなんだしいいのよ、と手をひらひら振って、立ち上がるディアボロを見上げるレミリア。
「あっ、でもまず地下の図書館に行ってくれないかしら？そこを管理している友人にも挨拶して行ってほしいのよ。
そこを出て左に曲がって、階段を降りたらそのまま行けばいいわ。
しばらくしたら咲夜に部屋を案内させるから、夕食でまた会いましょ？」
「ああ、了解した。それではまた夕食に」
扉に手をかけるディアボロに、ゆっくりと語りかける。
「妹によろしくね」
「咲夜」

一人になったレミリアは、自分の従者の名を虚空にささやく。
「お呼びでしょうか？」
次の『時間』彼女の傍らには、完全で瀟洒なメイドが立っていた。
「彼の事は私に任せて、あなたは夕食の準備に専念していていいわ」
「・・・・・・。わかりました」
背を向けたまま命令を下す主に、一礼をして再び部屋から掻き消える紅魔館の従者。
「――――。
まあ、ここで潰れる『運命』ならばそれまで、よ」

「しかし、咲夜以外に働いているメイドはいないのか？」
現在地下への階段を降りているディアボロは、廊下ですれ違ったメイドへの印象としてそう思った。
パタパタと羽をはためかせて遊んでいるようにしか見えなかったんだが・・・、そこまで考えてレミリアにも羽があったな、と思い出した。
「・・・いや、だからどうしたというわけでもないが」
しかし長い階段だな、と呟く。さすがに疲れるものだ。

照明が壁の松明でしかないというのも気が滅入る一因でしかない。図書館の管理者とやらは、一々これを上り下りしているのか？と疑問になってくる。

「しかしこの雰囲気・・・。これこそまさに吸血鬼退治じゃあないか・・・・・・、と」

ようやく降りきった階段の先には、重厚な鉄の扉が控えていた。ディアボロを軽く超える大きさには、さすがの彼も辟易した。もしこれが、少し開いていなかったら図書館などほっぽって上に戻ったかもしれない。

「いやしかし、戻るにもまた階段を登らなくてはならないのか・・・・」

「だったら入ったらどう？少しお話しましょ？」

「！――――君は・・・？」

一瞬身構えたが、すぐにやめる。

――――ここには、家族（ゆかり）に言われて来たのだ。少なくともそうそう危険はないだろう・・・。警戒することは、ひいては紫を疑うということだ――――

・・・そんな風に思って。

「失礼するよ」

ノブを引くと、彼は見た目よりはスムーズに動くとわかった。

あくまで見た目よりは、がポイントだ。

中はまた一面に赤い部屋。広さで言えばかなり広い。

「私はフランドール。フランって呼んでね」

「ディアボロだ。好きに呼んでくれてかまわない。
・・・君のお姉さんに、フランのことをよろしく、と言われたよ」
「ホント？レミリアお姉さまに？」
「ああ」

フラン・・・、フランドール・スカーレット。
姉と同じその紅い目と、姉とは違う七色の宝石のような結晶体がついたその翼。
姉妹揃って同じ淡いピンクの帽子をかぶり、レミリアとは反対の位置にリボンをあしらっている。
そして、肌に感じるその狂気・・・ある種、レミリアよりも吸血鬼然としていた。

「じゃあ私と遊んでくれるの？
お姉さまも咲夜も、全然遊んでくれないの！」

ひどいでしょ？と、彼女は笑みを浮かべて話し続ける。

「最近は霊夢が一回遊んでくれたの。後魔理沙は、その後もたまに遊んでくれるわ。
でもそれはごっこ遊び。それも楽しいけど、何だか違う気がするの」

にっと笑うその笑顔に映える、鋭利な牙。

「ディアボロは今何を考えてるの？私は今、すっごく楽しいわよ。
だって、あなたが遊んでくれるんだもん！」

フランの中では既に彼と遊ぶことは決定しているようだ。ディアボロはここで・・・、覚悟を決めた。

（このことを、おそらく紫は知らないのだろう。
レミリアが俺を呼んだと言っていたし、館を迷ってたどり着いたわけでもない以上、ここまで状況を持ってくることが彼女の目的だろう。
『妹によろしくね』、か・・・・・・。フランをどうこうしてほしいのではなく、あくまで俺を試すようなもの、と見るべきだな。
遊ぶ、の意味は不明だが・・・・。何、古来より人間と吸血鬼のお話の筋書きは、一つしかないものだ）

――ただし、最後に皆幸せになるのが近代的だがな、と。

「・・・・・・・・。
――俺は、後悔している。
きっと、これからも、ずっとこの後悔を抱えて生きていくのだろう」
「ふーん・・・」

彼の答えに、幾分失望したように、無関心にも似た様子で、彼女はそう呟く。

「フランは、ここにどれくらいいるんだ？」
「・・・４９５年間ぐらいかな。出たことがないもの」

それがどうしたの？とフランは訝る。
本音を言えば、早く遊びたいのだ。・・・・・・・・・よくわからないけど、よくわかる。
目の前の人間は、『遊んで』くれる。

「・・・ここから、出たいのか？」
「えっ？」
「姉は、好きか？」

「好きに決まってるじゃない、何言ってるの？」
「だったらどうして・・・」

お前はここにいる？

「ここにはベッドはある。ぬいぐるみはある。なかなか居心地はよさそうだがな、だがそれだけだ」
「・・・・・・・・・煩い。
私は早く遊びたいの」
何故か、聞くごとに胸が苦しくなる戯言なんていらない。

その両の手に、力を込める。

「さっき言ってたよね？苦しいって」

――――壊れちゃえば、もう苦しまないですむよ？

彼女は能力として、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を有している。
手に出現させた破壊の対象の『目』を握りつぶし、発動する絶対の能力。
その能力が――――、まずは左手がディアボロの右目を『破壊』する。

「がッ！」

グチャッ、っと顔の右半分が鮮血に彩られ、飛沫がフランの顔までかかる。
ディアボロはなんとかスタンドを繰り出そうとするが・・・人間は、眼球と共に脳の一部まで損傷したのなら、最早何もできない。
そして、残った右手が握りこまれ、ボンッ！と心臓が潰れるささやかな音が響く。

「ふふ」

心底楽しくて楽しくて、彼女は仕方がなかった。

「コンナニ綺麗ニシテアゲタノニ　オ礼ノヒトツクライ言イナサイ」

心臓を『握られて』ピクリとも動かないディアボロに、歌うように誘う。

――――、一緒に遊びましょう？と。

フランは顔まで飛んだ血を指で拭い、口元へ運んだ。
そしてその瞬間『この世の時間が消え去った』。
――――指の血は消え、口からもその風味の残滓が薄れようとしていたが、彼女はもうそんな事はどうでもよかった。
目の前の玩具（ニンゲン）がまだ遊べるとわかっていたから――――。

あるいは、それは幸いだったのかもしれない。

結局のところ彼女は、目の前の彼をいつも食べている食餌(エサ)とはついぞ思えず。
あくまで、ただの一人の人間として、終わりから始まりまで、自分と対峙したと記憶に刻まれたのだから。

「まったく・・・。
――目、目、目、だ」

帝王、鬼、その邂逅　その？（後書き）

美鈴は敬語ってイメージあるな、と思ったら殆どの人に敬語じゃないか（除・主人公二人）？・・・頑張れ美鈴！しかしこうしてみると紅魔館勢の能力って皆ぶっ飛んでるな。

しかし一番上の書いているうちに厨二とは何か考えさせられた。

帝王、鬼、その邂逅　その？（前書き）

歪んだ鏡に狂った運命。狂った鏡の歪んだ運命。
惰性で刻む時間では、破壊の余韻に浸れもしないのだ。

帝王、鬼、その邂逅　その？

「・・・ゴールド・エクスペリエンス・エクイレムの能力が中途半端に生きている。
紫ではないようだな・・・。いや、よく考えればそもそも彼女の能力ではできない芸当だな」

ゆっくりと立ち上がりながら、自身に起きた現象について推察・・・判断するディアボロ。

「フランのその能力・・・。手に『目』を出現させ、それを潰して対象を破壊するんだな？」
「うん！お姉さまも、すごいって言ってくれたの！」

嬉々と叫び、何の躊躇もなく手を握る。
おもちゃとは、遊んでこそなのだとでも言うかのように。

だが握ろうとした手はいつの間にか『もう握っていて』ディアボロは変わらずに立っている。

まるで時が『ふき飛んだ』かのように。

「先程は君だけを『視て』いて喰らってしまったからな。手を握りこむ動作に注意を払うとはいえ、少し俯瞰して『視る』ことにしよう。
・・・フランには、『これ』が見えるかね？」

彼の傍にはキング・クリムゾンが、彼女を睥睨するかのように存在

している。
額の墓碑銘(エピタフ)で未来を『視つめ』、時間を『消し飛ばす』彼だけのスタンド。
時間を狂わせる、世界で彼のみに許されたスタンド能力。
「これ？何のこと？？？！」
己の異能が平然と受け流されたというのに、実に純粋に嬉しそうに叫ぶフラン。
その目を彩る狂気が今、充たしてくれる存在を前に飢えを曝け出す。
「問答は終い、あとはただ『遊ぶ』だけ、か・・・」

「どーん！」
フランがその華奢な腕を振るうと、彼女を中心とした全方位に光弾が放たれる。
「・・・・・・」
己がスタンドを使わず、ひとまず自身で避けて様子を見るディアボロは、ただ倒すだけではフランの狂気は『消せない』と考える。
(何か決め手のようなもの、それを正面からねじ伏せた上で圧倒する、そんな感じだ)
傍から観ればそれこそ狂気沙汰だ。人間が吸血鬼相手に勝ち方を―

――それも圧倒して、という――――考えているのだ。
だがそれを人間如きに可能とさせるのが、スタンドであり――――キング・クリムゾンであるのだ。

「くっ・・・・」

しだいに弾幕の密度が高くなり、やむを得ずキング・クリムゾンの腕で赤い弾を弾き飛ばす。
しかしエピタフをも使いフラン本体の方にも注意を払わなければならない状況下で、よくもったと賞賛すべきだろう。

「？今のなーに？もしかしてそれがさっき言ってた『これ』？？？」

無邪気に、何の下心も感じさせない声音で問いかけ、『目』を握る。
その行動には別に注意を逸らすだとか、そんな考えはなく「気になったから訊いて、そしてついでに能力で攻撃してみた」という程度のものでしかない。
今度は十数秒、時間一杯消し飛ばすディアボロ。エピタフが、彼女の『弾幕を撃たない』という未来を視た為、場を仕切りなおす意味合いで発動した。
フランの眼前十メートルあたりに、突然現れたかのように立つ彼に彼女も声を弾ませた。

「ディアボロも能力を持っているんだね！傷が治ったのも能力？！」
「私は生命エネルギーを具現化させたスタンドというものを使える。フランの弾幕を弾いたのも我がキング・クリムゾンだ。
能力は『未来を視て』、『時間を消し飛ばせる』。
怪我が治ったのは・・・・・・・・・。何、君と同じで体質のよう

なものだ」

ディアボロの元々いた世界で、彼はギャングのボス・・・「悪」としてジョルノ・ジョバーナ達に殺された。

――――いや、そんな生易しいものではなかったのかも知れないが――――彼はジョルノのスタンドが「進化」した、『ゴールド・E（エクスペリエンス）・レクイエム』のスタンド能力によって永遠に死に続ける運命に落とされた。

（そのときの私は、自分の正体を知っているというだけで娘すら殺そうとしたぐらいだ。仕方あるまい）

そして八雲紫によってこの幻想郷へ助け出されたのだが、そのスタンド能力はどうやら簡単には彼を解放してはくれないようだ。

「よくわかんないけど、じゃあもっといくよー？」

禁忌「フォーオブアカインド」

禁忌「レーヴァテイン」

いったいどういった理屈なのか。

フランの影から湧き出る様にフランが現れ、その二体から更に二人のフラン・・・計四人のフランがディアボロを見つめる。

そして四人が一斉に片手を挙げ宣言をし、紅い魔剣を構える。

「ふふ、これならどう？」

「簡単に壊れないでね？」

「楽しい楽しい」
「遊びの始まり！」

さすがに予想外だった。、とディアボロは痛感する。
無数に飛んで来る紅い弾幕を弾き、避け、時には能力で回避していく。どの攻撃でも、まともに喰らったら人間には一発で致命傷だ。
『G・E・R』の余剰スタンドエネルギーで『戻る』としても、その一瞬の隙から後は攻撃を喰らい続けるだけのサンドバックになるだろう。

前へ走りながら左右の弾をスタンドに弾かせて、前方のフランと距離を詰める。レーヴァテインを横薙ぎに準備しているが、キング・クリムゾンの射程距離は2メートル。ディアボロはスタンドを限界まで遠くに動かしフランを思い切り殴り飛ばす。
そのまま時間を消し飛ばし、少々動いて弾幕が当たらない位置まで移動するとともにスタンドを傍に戻した。
消し飛ばした時間の中では違うフランの魔剣が背後から襲ってきていた。それをエピタフで視たから能力を使い、攻撃後の隙をカバーする。

「しかし厄介なのはその再生能力だな」

どれが分身なのかは分からないが、ダメージを負えば消えるというわけではないようだな・・・、と嘆息交じりにもらす。
壁に激突するほどのパワーで殴られたにも関わらず、そのフランも平然と攻撃に加わってくる。

「楽しいね！」

フランの誰かが叫ぶ。それはもう幸せそうに、嬉しそうに。

――他の誰とも、こんな高揚感に心沸き立つことなどなかった。相手を殺そうとし、殺されそうになる。自分の中の自分が囁いてくる・・・これこそが求めていたモノ、これこそが求めるべきモノ。

「・・・違う」

彼は、違う。

「違う――――！！！！！」

否定をすることで、彼の存在を肯定する。

ただただ純粋に。

「ディアボロは、誰よりもっ！特別！！！」

４９５の幼子は、少しだけその有り様が歪んでいるだけなのだ――――。

フランの撃つ光弾はスタンドで防げるが、紅い魔剣（レーヴァテイン）は下手に対処すると残りの三人が一斉に切りかかるだろう。
・・・大剣を片手で振り回すフランの膂力も大概なのだが。

ディアボロは現在ほとんどスタンドを自身から離していない。走りこむ隙がないためその場で動かず、スタンドの腕で弾幕を弾き足で床を踏みしめ一歩二歩踏み込むだけだ。フランが切りかかってきたら能力で反撃をするが、致命傷を与えられない。

何度も、再生されるだけの傷を与える。
殴りつけて踏み砕いて突き破って抉りぬいて切り裂いて・・・一手、届かない。

しかし、均衡状態も長くは続かないものだ。

「ディアボロばっかり『遊んで』、ズルイ！！！」

ディアボロが二人のフランを正面から相手取っている。片方の持つレーヴァテインの腹をスタンドで殴りつけふっ飛ばし、そのフランをディアボロの蹴りが襲う。蹴った直後の不安定な姿勢をもう一人が襲うが、キング・クリムゾンに対処させる。近接戦闘において見えないというのは大きく有利な点であり、そのフランも顎を殴られ、残りの二人の放つ弾幕の盾にされる。魔剣を手放されたフランは事態にいらついて、そう叫びながら背後にまわり彼の胸を狙った。

グチャ、っと凄まじい勢いで突きだされた右手が心臓を抉り、フランの顔が歓喜に彩られるが、その顔が。
「え？」ゴッ

“あえて喰らい”、ごふッ、と血を吐くディアボロがスタンドに全力で殴らせる。スタンドは本体に近いほどパワーがフルに発揮でき・・・そのときキング・クリムゾンは、彼の肩口から上半身のみを出している状態だった。

（何、死にながら攻撃するなど慣れたものだ。
均衡をこちら側に傾ける、そのためには確実に一撃を叩き込まねばならない・・・！）

裏拳を喰らったフランの頭部はそのまま胴体から「千切れ」て壁に叩きつけられ、パァンッ！っと赤い花を咲かせた。
残った胴体が膝から崩れ落ち、頭とともに一瞬で燃え上がって、後には何も残らない・・・。流れ出た血のみが、この部屋に新しい「赤」を加える。
時間を二秒間消し飛ばし、残りの三人と対峙するディアボロ。身体を戻すためと、位置取り。

「まずは一人、だ」

そして彼は、三人の瞳にちらと走った感情の色を見逃さない。
『恐怖』だ。

弾幕は邪魔になる、と判断したらしく一斉に切りかかる。だがそれは、心に浮かんだ怯えからの行動。
近接では勝てないと先程に証明されたばかりだが、精神が未だ幼く経験もまったくないフランはわかっていない。
ここになってその経験値の差が如実に・・・いや、むしろここまで殺し合えた、その才能。それこそ吸血鬼としての本能なのか。

そして、ここで畳み掛ければ『へし折れる』、と考えて身構えるデ

ィアボロ。

月の光も届かぬ土の下、人間（じんがい）と吸血鬼（じんがい）は戦う。

片や狂気の飢え、・・・渇望から。

片や人間としての矜持から――――。

帝王、鬼、その邂逅　その？（後書き）

阿求も設定としてはディアボロと酷似してる気がしてきた。

帝王、鬼、その邂逅　その？（前書き）

種族（きゅうけつき）としての暴力（チカラ）と、種族（にんげん）としての能力（チカラ）と。
意志なく振るわれる力などなく、そこに王も鬼も関係ない。
ただ力の意味を知るものが『先』に続く。

帝王、鬼、その邂逅　その？

「遅いわね、彼・・・」

紅魔館の一室で、レミリアは何だかんだ言って心配だった。

「紫が大丈夫って言ったし、あの子もここ最近はどんどん落ち着いてきたし・・・。
二人でお喋りが弾んでいるとかだったらいいのだけど・・・いえ、それはそれで別の意味でまずいけど・・・。
見に行く・・・それはできないし・・・・・・」

吸血鬼としての誇りが・・・、などとぶつぶつ呟きながら部屋を歩き回る彼女。

「やっぱり人間に、あの子と『私』、ふたつの能力は荷が重かったのかしら・・・？」

悪いことしちゃったかしらね、と言いながら扉の方へ歩き出す。

「そうよ、図書館のパチェにでも会いに行きましょう。
でも・・・もしかしたら、どこかに寄り道でもするかもしれないけど！」

人間の領域を超えた力である、スタンド。

その人外の力は、ただ人間にのみ許されて。

三人のフランが飛び掛かる、その対象のディアボロは平然と待ち構える。

（下手に組み合う理由などはない、確実に一人潰す）

背後から首を一刀せんと迫るレーヴァテインを、ぎりぎりまで引きつけてキング・クリムゾンを発動する。

（あらかじめエピタフでもって攻撃のタイミングがわかるのならば、それにカウンターを合わせればいい話だ）

全ての時間が消し飛ぶその『時間』、彼は軽くバックステップしフランの背後をとり、そして能力を解除する。
そして、くり出すスタンドの剛腕が目の前のフランを貫く。
はずだった。

「なッ！！」

目の前のフランはただしゃがんで攻撃を回避し、そのまま闇雲に背後へ魔剣を振るう。
それがキング・クリムゾンを切り裂き、本体のディアボロへとダメージが跳ね返った。

「やった！　見えなくなったら後ろにいるもん！！！」

・・・・・・。

・・・えっ？と呟いたのは、残った二人のフランのどちらだったか。射程距離が短い・・・つまりパワーが高いスタンドは、本体がある程度傷付いていても活動に支障はない。
よって、ディアボロはただ戦闘を続行しただけだ。

キング・クリムゾンが、振り向き笑顔を見せる彼女の頭を掴んで膝を叩き込み、幼い顔貌が半壊した。
上げた足を戻す合間に頭に添えられた手で、首をねじ切る。
ありえない方向を向いているフランに、駄目押しとばかりに体勢を整えたキング・クリムゾンが拳をねじ込む。
がッ、と込み上げる血に咳き込む本体と連動したかのように、スタンドはその腕を抜いて。
死体は先程と同じように燃え上がり、すぐさま消滅した。

「・・・キング・クリムゾン」

また時を消し飛ばす。G・E・Rのエネルギーで身体を『戻す』には、自身の能力も共に発動させた方が使い勝手がいいようだ。

（あの魔剣・・・。精神エネルギーに過ぎないスタンドをも切り裂くとはな。あの子の『破壊』の能力が付加されているのか、なんなのか）

「・・・・・・・・・これで、二人」

残ったのも、二人。

ディアボロが一歩近づくと、ひっ！　っと声をあげ後ずさる。
ここまでくると、一方的な蹂躙でしかなかった。
能力を使うまでもなくただ近づいてスタンドで頭部を掴み、桃でも潰すかのようにグチャッっと握り潰す。

「あ、あ・・・・・・」

喉から、声を絞り出すかのような音を漏らす最後のフランの全身にも、その返り血は降りかかる。
その身体も燃え尽き、部屋には最初と同じ・・・、ディアボロとフランドールのみ。

「よくわからないが・・・。潰していって最後に本体が残った、ではなく最後に残った者が『本体』、そんな感じだな。『結果』から『過程』を決め付ける・・・、因果律に喧嘩でも売っているのか？」

まあ、私が言えることじゃないんだが、と呟くディアボロ。

「っ、お姉さま・・・！」

因果律・・・『運命』という言葉に何か思うところでもあったのか・・・。

―――理由は関係ない。振るう意志があればいい―――
フランは再び目に力を取り戻す。

QED「495年の波紋」

掲げる『瞬間』、宣言する『時』、発動する『時間』。
墓碑銘(エピタフ)はそのどれをも予知していたが、ディアボロは何もしなかった。

よもや彼女が発した「お姉さま」、と肉親を呼ぶ声に感じ入ったわけでもあるまい。
ただ。

「打とう・・・。お前の過去に、これまでの４９５年間に、けりをつけよう」

ただ、彼女の為に、帝王たらんとしたまでだった。

――未来なぞ、視えなくてもいい。
この子の全てを受け止められれば、それが『墓碑銘』になろうとも構わない。
それでフランが何も得られないとしても、私はそんなやり方しか知らないのだ――。

フランから波紋状に広がる弾幕を、容易く避ける。

「まだよっ！」

更に二つ、この部屋という水盆に水滴を垂らしたように波紋が走る。
そして最初の弾幕が壁に行き着き――反射する。

「っ、そういうことかッ！」

ディアボロのキング・クリムゾンが、周囲から襲う三列の弾幕を次々と叩き落していく。
当然落とせない光弾もあり、それが反射し再び彼を目指す。一度反射した光弾は再び反射はしないが、フランが次々と放つ量が多すぎる・・・！！！

「キング・クリムゾン！！」

ディアボロが、能力を発動せずに突っ込んでいく・・・！

（受け止めなければ、それは逃亡と同じなのだ・・・。
彼女の４９５年間に相応しくあろうと、帝王として振舞うならば――突き進むのみ！！）

多くの弾を防ぎ、弾き飛ばすキング・クリムゾン。さりとて全てに対処するには密度が高すぎていて、本体の彼にも決して無視できない痛みが蓄積していく。
見るものがいれば（そして、スタンドをも視ることができれば）、どこまでも赤い部屋の中で、紅いスタンドと赤く染まる人間を正視できただろう。

どこまでも、赤い。・・・紅魔館。
・・・この寸劇は、きっとその舞台におあつらえ向きだろう。

そして、スタンドと共に振るう腕が――――

フランの頬を、思い切り殴打した。

「な、何で？！　痛くないの？？！！！」

苦し紛れの詰問、抵抗。殴られたダメージより、何発も被弾していた彼がまったく怯まないことに驚愕し、振るう能力での『破壊』が、少し違った結果を残した。

「・・・！」

「まさか、スタンドすらも『破壊』するか――――」

げに恐ろしきは、その才能か。

彼女が恐怖に駆られたことで感じた彼の『能力』。それを壊しても、彼は歩みを止めない。壊れない。

彼女は無理やり笑顔（きょうふ）を浮かべ、幽（かす）かな光明に一縷の望みをかける・・・。

「きゅっとして――――」

ドカーン。

手に『目』を作り、ただめちゃくちゃに能力を発動させることが・・・、この幼い吸血鬼にできる精一杯の抵抗だった。

そして、足首を『破壊』され肩を『破壊』され肘から先を『破壊』され膝から下を『破壊』され頭部を丸ごと『破壊』され内臓を丸々『破壊』され。

仰け反り膝を折り足元が揺らぎ口元が苦痛に歪み、骨が砕け目が破裂し腰がへしゃげ喉を粉砕され心臓が潰れても、彼は立っていた。

――ゆっくりと、口を開いて。

「・・・・・・・・・フラン。先程は、すまなかったな」
「・・っ、え・・・？」
「君が、まるで誰にも愛されていないような事を言って・・・すまない。ゆるしてほしい」
「――、ディアボロ・・・？」

彼はこの子に、やり直してほしい・・・。『今』を生きているなら、それは当然のこと、だ。そう強く思った。

「レミリアも、咲夜も、美鈴も。他には知らないが、皆フランのことを愛している」
「・・・そんなことないよ、だって私・・・・・・・・・気がふれているって言われてるもん――」

手を、ただ手を強く『握って』・・・まるで何かに耐えるかのように立ち尽くすフランの言葉。
それを彼は、否定する。

「それは、フランが能力の使い方を知らなかっただけじゃないのか？
それに、きっともうすぐ出られただろう――私がいなくても」

――だったらなぜ。
私が入ったとき、何で扉は開いていたんだ・・・？――

「『ごっこ』ではない、本当の戦闘を経験して君はきちんと扱い方

を学んだ。
もう闇雲に傷つけたりは、しないだろう？
・・・・・・なら、もう大丈夫だ」
目の前の、涙を堪えきれなくなったフランに・・・。優しく否定し、肯定する。
「でっ、でも！　わだっわたし、皆に、！　気が・・・言われて、愛されて！　なんか！！」
「だったら、私が愛そう」
フランと温もりを共有するかのように、抱擁する腕に愛情を込めて。万感の想いを伝える。
「私のかわいいフランよ・・・」

「そこまでよ！！！」

…運命が、その端を少しだけ引き伸ばす。

「私の妹から離れなさい！！」
「お姉さま・・・？」
まさか、と振り向いて、普段は決して見せない姉の憤怒の表情を認識するフラン。

……ぐしゃぐしゃ、と不快な音と感触を歩くものに伝える敷物を踏み越え、レミリアが二人に近づいていった。

「私の妹に何かしようとしてみなさい！　貴様を百の肉塊にし溢れる血を啜(すす)り魂までをも喰らってみせよう！！」

全身から激情という雰囲気を垂れ流し、彼女は牙を剥いて紅い瞳をきらめかせた。

「お姉さまァ！！！！」

「っえ？　って、フラン？！」

――だがそんな彼女も、涙の跡が光る顔で喜びを形作る妹が抱きついてきたのなら、どうすることもできないのだ。

最早言葉になっていないほど叫んで、姉を抱きしめるフランドール。

「ど、どういうこと？」

「・・・さて、な。――全てがあるべき所に、戻っただけだろう？」

帝王、鬼、その邂逅　その？（後書き）

今回短いです。戦闘描写ってかなんかもういろいろ難しい、でも逃げては駄目なんだ！
なんて意気込んだ結果がこれだよ！！

次話でフランドール編が終わり、次の舞台へ。ディアボロは当分八雲亭に帰れないかも知れない。

帝王、鬼、その邂逅　その？（前書き）

笑い語らいあう星達。
紅い月はいいものだ。
欠けぬ月ならなおのこと良し。

帝王、鬼、その邂逅　その？

「・・・ん？ここは・・・」
「あら、やっと気がついたのね」

紅魔館の一室、なんてことはない赤い寝室にディアボロは寝かされていた。
独り言のような疑問に答えたのは、現在寝台の傍のイスに座って本を読んでいるレミリア。その傍らの咲夜が紅茶を準備し始める。
部屋を見回していた彼の目が、一箇所に止まる。

「・・・なあレミリア。いろいろ聞きたいことはあるが、順番に片付けていくのが建設的だと思うわけだ」
「まあ基本ね」
「答えづらいと思うが・・・」
「喉が渇いたのでは？どうぞ」

話している途中で咲夜に差し出された紅茶を受けとり、口を潤す。

「ああ、すまない。
・・・で、アレはなんなんだ？」
「簡潔に言ってしまえば、フランと美鈴が寝ている風景かしら」

ただ、美人だとか美少女という要素を考慮してもなおひどい風景だが。

「順番に話しましょうか。
あの後アナタは気絶したのよ。それもいきなりバタッ、っと」

「いや、フランの様子を見たら安心して、意識が遠のいてしまってな。・・・人間は吸血鬼よりもひどく脆いんだ、その辺は勘弁してくれ」
「人間は普通吸血鬼と生身で戦って勝ちは拾えないのだけれどね。・・・まあいいわ。
で、そうしたらフランがもう泣き叫んじゃってね、引き剥がして咲夜に運ばせるのにも苦労したのよ？感謝なさい」

レミリアが胸をはって、やれやれだったわまったく、という顔をする。

「お嬢様、私がフラン様を引き剥がしている間に美鈴が運んだと記憶していますが？」
「・・・」
「・・・・・・・・・。で、でね！結局丸一日寝ていたのよ、ディアボロは。
そしてシーツの端に顔を埋めてベソベソしていたフランに、事情を聞いた美鈴が怒っちゃって・・・。愛されてるわね、何をしたの？」

この辺まだ湿ってるわ、とベッドを叩いてみせ、ニヤっと笑って尋ねる。

「言っておくが何もしていないぞ。―――彼女が人間好きの妖怪で、私が人間だった。それだけだろう」
「・・・ふーん。まあ美鈴ならありえそう、ね」

納得したような、おもしろくなさそうな、そんな顔を浮かべる。

「ディアボロ様、服のほうは勝手ながら着替えさせていただきましたよ？

着替えの方は妖精メイドにやらせましたからご安心ください」

「・・・ああ、ありがとう」

咲夜の気遣いに、内心妖精メイドかよと思うところがないでもないディアボロ。あの無能っぷりを見れば大概の人はそう思う。

現在彼はゆったりしたガウンを着ている。包帯なんかがないところ、怪我のあとも残っていないらしい。

「それで、喧嘩になっちゃってね。フランも心配だったのよ、自分が殺したんじゃないのかって。ある意味美鈴は八つ当たりに付き合っていたようなものね。

・・・見た目よりもひどくないから大丈夫よ。フランが手加減をしたことに美鈴が感動してますます怪我をさせないように頑張ったから、遊びつかれて寝ているようなモノ。

・・・あの辺の血の大部分は咲夜の鼻血だったっけ？」

「なんでまた。そのころ私は地下室の後始末に孤軍奮闘していたのですよ？」

「・・・レミリア、こんなことは言いたくはないんだが・・・」

「いえ、よろしいのですよ、ディアボロ様。主人は指示を出すのが仕事、と思ってらっしゃるのですから」

「ちょ、ちょっと！」

言い合う事ができるのもまた、友好の証だったりするのだ。

「それにしても、フランの戦闘欲求があそこまで強いとはね。私はそうでもないから思いもよらなかったわ。

・・・心なしかあの子、前よりツヤツヤしているし」

「欲求不満だったのでしょう」
「その言い方はやめなさい咲夜！」
不毛な言い争いのさなか、うーん・・・と寝ぼけたような声がした。
「あら、起きたようですね」
では私は果物でも持ってまいりますわ、と咲夜。
「ああ、別に急がなくていいわよ。おそらくフランを行かせるから」
「かしこまりました」
そう言って扉まで普通に歩いて行く咲夜。
起きてきた美鈴がそれを見て、
「咲夜さんが歩いて出て行くなんて、あんまり見ない光景ですねー」
と感想をこぼす。そしてかみ殺しきれずに小さく欠伸をした。
「失礼しました・・・。
それで、ディアボロさん。・・・お怪我もなさそうで、よかったです」
門番として、通したからには出て行くまでを見送りたいじゃないですかーと明るく笑いかける。
「ああ、心配をかけてすまなかったな美鈴。お詫びにいつか食事にでも行かないか？」
「ああ、それもいいですね」

あははは、と二人が笑うが・・・・・・・・・・当然、笑えない者もいるわけで。

「えっ？美鈴、ディアボロ・・・・え？」

「どうしたんだ、レミリア。

・・・ああ、ここの全員で行くんだぞ？」

「そうですよ、二人で行くほどお休みは貰ってませんよ？お嬢様」

「・・・ああ！そういうこと！そうね、ならいいわ」

驚愕したり、ふふんとすましたりと一人で忙しいレミリアを尻目に、美鈴がフランを揺り起こしにかかる。

「妹様、起きて下さい。ディアボロさんが起きましたよ？」

「う・・ん・・・・・、ってディアボロ？！」

跳ね起きたフランはそのまま彼の寝台へひた走った。途中のレミリアは跳ね飛ばす程度しか見えていない。

「―――ディアボロ・・・・・・・」

・・・駆け寄るものの、そこから先が一歩踏み出せないフランドール。

―――そんな彼女に、ディアボロは笑いかけて。

「・・・、大丈夫だ、私はフランを嫌いになったりしないから。言っただろう、愛そうと。

皆も今のフランを、きちんと受け止めてくれる。

躊躇する理由はどこにもないんだ。

・・・それに、フランは笑顔の方がずっと可愛いぞ」

「・・・っ！うん！！」

上半身だけ起こしているディアボロに、全身で抱きつくフラン。

「姉として妬ける光景ね・・・」

「お嬢様、せめて立ったらどうですか・・・？というか見えてます？」

床に跳ね飛ばされたままピクリとも動かないで呟くレミリアを気にかける美鈴。感じた疑問もぶつける。

「そんなことはどうでもいいのよ・・・。

・・・・・・・・・ねえディアボロ。――――アナタフランを幸せにできるの？」

「？お姉さまの声だけ聞こえるわ」

「私にはもう、フランどころか咲夜ぐらいの娘がいるんだが・・・？」

彼は、「父親らしいことなど何一つしてこなかったが・・・」と自嘲気味に付け足した。

「えっ？嘘でしょう？じゃあ何？その抱擁は父性的なものだとでもいいたいの？！」

「お嬢様、そこで立つのもどうかと思いますが・・・」

・・・こうして、夜が更けていく――――

「ねえフラン？私、ディアボロと話があるから少し席を外してくれない？」
「やだもん！」
「や、やだもんって・・・・」
「・・・、フラン」
「んっ？なーに？」
「フランの剥いてくれたリンゴが食べたい。頼んでいいか？」
「いいよ！待っててね、すぐだから！」

この態度の差、あの時の涙は嘘だったのフラン・・・？と、レミリアがショックを受けたように後ずさる。

「・・・・・・・・・。
でも、伝言も頼んでおくわ、フラン。
咲夜に、『さきほど言った事、よろしくね』と言っておいて頂戴」
「んー、わかった」

パタパタと羽をはためかせながら、名残惜しげにフランが部屋を小走りで出て行く。
美鈴はすでに職務に戻っている。レミリアがそろそろ休憩はいいんじゃない？と急かしたためだ。
・・・ちなみに彼女も、出て行くときにはかなり名残惜しげだったりした。

「・・・姉として悲しくなくもないわ」
「・・・で、だ。話があるんだろう？」

はぁ・・・、とため息をついてみせるレミリアにディアボロは先を促す。

「ええ、ちょっと。あなたが別の世界から来たということを、ね」
「紫から聞いていたんだな？」
「ええそうよ。というか、私もアナタを助け出したのよ。
アナタに取り付いていた、『永遠に死を繰り返す』運命を断ち切ったのは、私よ」
「・・・・。・・・・・・・・・・そうか」

実際には断ち切れていないのだが、それで助かった手前ディアボロは何も言わなかった。

「で、その後が気になってね。紫に頼んでよこしてもらったの。
・・・・・・でもまさか、あの子の狂気の運命を『潰して』くれるなんて、ね」
「・・・いいや、俺は『消し飛ばし』たんだが？」

互いに能力になぞらえて言葉を交わし、視線を交差させる。

「最初に会ったときね。私の能力を使ってみたの。『運命を操る程度の能力』をね。
私は貴方の運命を『視た』だけ。
でも、視たことによってあなたの運命は「死」に決定してしまった」
「・・・何？」
「いえね、運命は可変だし。吸血鬼を相手になんら気負った風もないその姿勢にちょっと感動して、ね。
・・・でもまさか、その吸血鬼としての能力が人間に『消し飛ばされる』とは思わなかったわ。
それでこそ、引っ張ってきた甲斐があるというものよ。潰そうとしても、潰しきれるものではない、なんてね・・・。
あなたはここで、素晴らしい体験をするわ」

レミリアが、彼を指差す。

「聞き流していいよ、どうせ知った振りをしてるだけなんだから」

指すが、それも妹によってすっかり目的を見失う。

「ちょ、フラン！それは言っちゃダメって約束したじゃない！！

というか、いつから？！」

「んー、お姉さまが『素晴らしい体験をする』って言ったあたりから。

それよりほらっ！綺麗に切れてるでしょ？」

「ほう、これはすごいな。まさかリンゴがレミリアの形になるなんて」

「・・・えっ？何それ？！」

「咲夜が教えてくれたのー。早く食べて食べて！」

「じゃあ遠慮なく・・・」

「咲夜は何を教えてる、というか知ってるの？！

てかああ、食べないで！遠慮して！本当に似ているし！」

今夜の紅魔館からは、笑い声が絶えることはなかった。

そして、フランがトコトコとイスを取りに部屋の端まで歩きだした、

そのときに。

「そんな見える振りをしている私から、一つ予言しようかしら。

・・・あなたの運命は、伸びただけに過ぎない・・・。

いつか自分の意志で、『終わる』わ」

レミリアが、僅かに顔を歪ませてそう告げた。
「・・・そんなこと、あるわけないだろう」
あら。
彼女は小さく、小さく呟く。
――――――――――――？
「そんな事はどうでもよろしいのですお嬢様」
「咲夜、ここはシリアスな場面なんだか・・ら・・・・・」
振り向いたレミリアの真ん前。
ありていに言えば修羅がいた。
「妹様に伝言を頼みましたね？
『フランはまだ成長する可能性に満ち溢れてるわ！どことは言わないけど、上半身の母性あふれる所！咲夜とは違うのよ！！』、と・・・・」
「・・・えっ？？い、いやそんなこと言ってな・・だいたい私もまだまだ・・・・」
結局、それがレミリアの最後に言い残した言葉になった。
「ディアボロ！見てないで助け――――ちょ、ちょっと待っ・・・アッー！」

帝王、鬼、その邂逅　その？（後書き）

レミリアの最後のセリフ、最初は「ギャー」でしたがあまりにもアレなので、濁音がイメージとして悪いんだ！と「キャー」になりましたがまだ何か違う、そうだそんな生温いセリフを言うわけがない、よって「アッー！」。完璧な構成だな・・・。

そんなこんなでフランのお話、完！といった感じです。次回はいよいよあのヒト・・・？心当たりが多すぎて作者も迷っちまってるんだぜ！

裂ける紅魔館　その？（前書き）

『すきです。だいすきです』
どれくらい、だ？
『えー、言わせるかなぁ・・・・。
んーと。
殺しているぐらい、かな』

裂ける紅魔館　その？

「キング・クリムゾン」

忠誠心はきちんと行動から出る従者、十六夜咲夜。
彼女は現在、実質館全体で歓迎をしている客人の「スタンド」なるものを見ていた。

そもそもの発端は、客人であるディアボロをも含めて昨晩から誰もが一睡もしないで遊んでいたこと。

「フォールドします」
「うーん・・・私もおりるね」
「・・・よし。ならレミリア、オールインだ」
「オールインですって？私はこの紅魔館の主人、ここで退く訳にはいかないわね！」
「ではお互いに手札を。・・・お嬢様はポケットエースですね」
「ディアボロ、あなたは？」
「私はキングスだな」
「・・・あら？あらあら？まあ、いい手札だから勝負に出たくなる気持ちもわかるけど」
「お姉さま・・・。やっと勝てそうだからって・・・」
「ではオープンします。―――ＫＫＡですね」
「嘘？！」
「！ディアボロ、フォーオブアカインドだね！」
「フランのあれはどうやって四人になっているんだ？」
「そんなことはどうでもいいのよ！
エース！来なさいエース！！」

「ではターン・・・８です」
「・・・まだよ！私はこんなところで終われないわ！」
「お嬢様、滅多にできないからモンスターハンドと言われるのですよ。
リバー・・・、９。よって場はＫＫＡ８９なのでディアボロ様の勝ちですね」
「ま、また飛んだ・・・」
「運命を操れるんじゃなかったのか？」
「お嬢様は勝負事に弱くて・・・」
「・・・ねえ咲夜。あなた時間を止めて細工してるんじゃないの？！」
「そんなことありませんよ」
「いや、実はなレミリア。今の勝負は私の方が能力をつかっていたんだ」
「あら、じゃあしょうがないか・・・え？」
ディアボロ、咲夜、レミリア、フランの四人がポーカーに興じていたことから始まった。

「・・・て、どんな能力なの？何も見えないけど」
困惑したように尋ねるのはレミリア・スカーレット。
彼女は齢数百年を生きる吸血鬼だ。その紅い瞳と、それこそ聖書に描かれていそうな異形な翼が幼い外見を吸血鬼（ソレ）と言わしめている。
「お姉さま知らないのー？私も見えないけど、能力は知ってるもん。ねー、ディアボロ？」

フランがちょっと得意げに言う。
その不安定な情緒と、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を持っていたがため生まれてから今まで地下牢に半ば幽閉されていたが、先日のディアボロとの邂逅により彼女は見違えるほど落ち着いてきた。今の会話からもうかがい知れるように、少々懐き過ぎだが。

ただ、咲夜自身もレミリアと同感だった。
先の二人に使えるメイド長である彼女は人間だが、『時間を操る程度の能力』を有し荒事にも長けている。
彼は何をしたのだろう、と問いかけるが、返ってきたのは意外な言葉だった。

「何？じゃあスタンドが見えるのは美鈴だけなのか？」
「いやあ、そうみたいですね」

三人の視線が、彼と親しげに二人にのみわかる内容で言葉を交わす、美鈴と呼ばれる女性に刺さる。
ちなみに彼女、この場の中で一人だけ随分と顔色がいい。明け方まで門の番という名の居眠りをしていたためだ。よって、突き刺さる視線にも随分と力が篭っている。

「・・・え？い、いや、ディアボロさんをお屋敷まで案内する際に教えてもらったんですよ」

ほらほら、と美鈴が指差した空中にスプーンが浮いている。

「わわ、すごい！」

フランが嘆声の声を上げると、わしゃわしゃと見えない何かに頭を

なでられた。

「・・・だとしたら、何で見えるの？ディアボロ」

レミリアが少々焦れたように訊く。

「いや、本来スタンドは同じスタンド使いにしか見えないんだ。最初美鈴が見えたから、妖怪は全員見えると思っていたんだが・・・」

「・・・あっ、ディアボロさん。スタンドって、生命エネルギーの具現化と言ってませんでした？」

「ああ、そうだぞ」

「私は『気を使う程度の能力』を持っています。スタンドが生命エネルギーの塊だというのなら、気と指向性が似ていますし、私には見えますね」

それはつまり私以外には見えません、と言っているようなものだ。

「じゃあメーリン、私には見えないの・・・？」

案の定、悲しそうにフランが訊く。その背の羽も心なしか垂れ下がっている。

「そんなことはありませんよ、妹様。今からでも修行をすれば気は扱えます。

とりあえず外に行って基礎から始めましょう。お日様の下で行うのが一番ですよ！」

「い、いや日の光を浴びたら死んじゃうよ！吸血鬼だもん！！」

慌ててフランが拒否をする。・・・スタンドを見るという目的は閉ざされたらしい。

元気を出してくださいと美鈴が優しくフランを抱え上げる横で、咲夜が質問を重ねる。

「ではディアボロ様、スタンドというのは理解しましたが・・・。先程も言っていた、能力とは何なのですか？」

「ふむ、じゃあ咲夜。このスプーンを受け取ってくれないか？」

改めて尋ねる咲夜に、妙なことを言い出すディアボロだったが――。咲夜が気づいたときにはもう、自分はスプーンを握っていた。

「これが我がスタンド、キング・クリムゾンの能力。『時間を消し飛ばし、飛び越えさせた』。消し飛ばされた間は誰もその時間を認識できず、この世には時間が消え去ったという『結果』だけが残る。さらに、額のエピタフによって十数秒先の未来を視ることができ、二つによって自分に不都合な未来を『消し飛ばす』ことができる」

「・・・それって――――すごい、ことじゃない」

一言一言噛み砕くように、レミリアが口にする。

「ねえ、それって・・・私の『運命を操る程度の能力』と咲夜の能力、どちらにより近いのかしら？」

「・・・、どちらかと言うのなら、咲夜の方に近いな。レミリアやフランのように、能力が・・・なんと言うかな。『概念』の域まで達してはいない。時間を消し飛ばす以上、『そらの雲はちぎれ飛んだ事に気づかず、消えた炎は消えた瞬間を炎自身さえ認識しない』がそれはあくまで使った『結果』でしかない、な」

示された、新たな見方に当てはめて自身のスタンドについて考慮するディアボロ。

「ねーメーリン、他には？」
「そうですね・・・。花火という夜の見世物がありますが、それはそれは綺麗ですよ」
そんな三人を尻目に、美鈴が膝の上にフランを抱え昔の思い出を語って聴かせている。

「へー！！観たいみたい！」
「その分作るのがとても難しくて、作る人は職人と呼ぶに相応しいです。
フラン様も、挑戦しますか？」
「えっ？い、いや、観られれば十分だって！」

そんなやり取りを見たディアボロは、知らず知らずのうちに微笑を浮かべていた。
そう。どんな存在だって、歳月とともに成長をする。・・・『先』へ進む。
迎えてくれる家族は、とうの昔からいたのだ。フラン自身も少しずつ成長をしていき、後は誰かが背を押すだけだった。
私がその役目を負った、ということに喜びを感じないといえば嘘になるが、それこそ誰でもよかった・・・というのは、少し寂しいがなと彼が思った。

そんな時だ。
ドンッ！！という音と共に屋敷が微弱に揺れ、妖精メイドの声が聞こえてきた。

「あら。また例の侵入者かしら」
「・・・。お嬢様、ここは私が！」

騒ぎにも気づかずに嬉々としてフランと話している門番に、一瞬だけ頬を緩め咲夜が侵入者のもとへ向かった。
ただ・・・時間を操る従者とその侵入者との戦歴を聞いていたディアボロは、少々すまなく思いながらも尋ねた。

「レミリア。・・・その侵入者というやつがここまで来るのに、あとどれくらいだ？」

レミリアは返事をせず、代わりに目を閉じて指を三本立てる。

「これ以上の進入は許されないわ。古風な魔女はここでお終い」

指が二本。

「煩い！恋符「マスタースパーク」！！」

一本。

「ば・・・ばかなッ！・・・・・・・・・・こ・・・この咲夜が・・・・・・・・・この咲夜がァァァァァァ～～～～～ッ」

ぐっと手を握りこみ、扉を指差す。

「私のカンは誤魔化せない！霊夢にゃあ劣るが、今日の紅魔館はこの部屋が怪し・・い・・・。
・・・・・・、何だ？ここの連中で男でも囲ったのか？」

そこには我らが白黒。
箒を片手に握った東洋の西洋魔術師が扉を蹴り開け立っていた。

裂ける紅魔館　その？（後書き）

・・・ほのぼのとギャグの違いがわからなくなってきたんだぜ！

冒頭の遊びはテキサス・ホールデム、ポーカーですね。そういうものなんだ程度で大丈夫。

以下自分の勝手なスタイルイメージ。

ディアボロ・咲夜→タイトアグレッシブ

レミリア→ルーズアグレッシブ

フラン→ルーズパッシブ

美鈴→タイトパッシブ

でもボスは素でも強いはず。だってボスだもん。

裂ける紅魔館　その？（前書き）

穴の中の少女は、頭上の光を仰ぎ見る。
暗い暗い穴の中、光は少女を上から見下ろす。
――――穴の外に、何かがいるとは限らない。

裂ける紅魔館　その？

「ようレミリア。
面白そうなモノ、あるじゃないか」

にかっ、と笑うその顔を金色が縁取る少女がゆっくりと部屋の中へ歩いていく。

部屋の中央のテーブルには現在ディアボロとレミリアが腰掛け、傍らには咲夜。美鈴とフランは窓際のやや大きめなイスに二人で座っている。

「あ、魔理沙だー。遊びに来たの？」

フランが美鈴の膝の上に座りながら声をかける。

「ああいや、今日はいつも通り本を借りに来ただけだ・・・ぜ・・・？」

普通に返そうとした魔理沙だが、本来『ここ』で聞くことのない声を聞いて語尾が砕けた。

「え？何？レミリア、大丈夫なのか？丸くなり過ぎだろ！！」
「あら、家族と一緒に過ごしていて何かおかしいのかしら？」

まったくこれだから人間は、とため息をついてみせるレミリア。

「むしろ美鈴の方が家族っぽいけどな。もう動揺しすぎて何かフラン可愛いし！」

パタパタと羽を動かしてありがとー、とフランが言う。美鈴の上から退く気はないらしい。

「――まあいいか。これが本来の姿だろうしな。

・・・で、そちらさんは誰なんだ？」

そんなフランによかったなぁと微笑んで、彼女はディアボロに向き合った。

「私のことはディアボロと呼んでくれ。縁あって八雲家の家族になった、外来人だ。今ここにいるのは・・・まあいろいろあってな」

「ふーん・・・外来人か。ディアボロだな、よろしく。

私は霧雨魔理沙、普通の人間の魔法使いだぜ」

口調こそ乱暴だが、親しみがこもった声を出している。

「えっ・・・？」

ただ、ディアボロの自己紹介にフランが戸惑いの声を上げた。

「ディ、ディアボロ・・・家族って、私・・・・・・は？」

・・・美鈴からおりて、よたよたと彼の所まで歩いて。

「フラン様・・・」

震える声で尋ねる彼女に、

「――フランだって私の大切な家族だ。

見捨てることなんて、決してない――――」

彼は優しく抱擁でもって答える。

そんな光景に、魔理沙が。

「・・・歪んでるな」

そして場所を移し、応接室のような赤い部屋にフランを除く全員が集まった。

「お嬢様はもうぐっすりお休みです。もうお昼ですし、徹夜の疲れもあるのでしょう」

あの後泣いてそのまま寝てしまったフランを部屋に運んできた咲夜がそう告げる。

「レミリアも無理はしないでいいんだぞ？吸血鬼に日中は辛いだろう」

「大丈夫よディアボロ。

――――それより人の妹を泣かせるなんて、やってくれるわね」

「ああ、あんなフランは初めてだった私から見ていたら、理屈抜きにディアボロが悪かったなー」

「お二人とも、そう責めることはないじゃないですか・・・」

ニヤニヤと楽しそうなレミリアと魔理沙に、真面目な美鈴はとりなす。

結局、皆で今後について考えることとなったのだ。
主にディアボロとフランの関係について。

「私は別にディアボロを責めるつもりはないわ。フランの狂気を『消す』には、やはり貴方でないといけなかったのでしょうしね」
「ああ、私はよくわからんがやっぱりディアボロを責めるのはお門違いってもんだろう。皆、それについて異論はないな？」

レミリアの言葉を受け、魔理沙が場に確認をとる。

「あるわけないです、けど・・・」

煮え切らない様子の美鈴の態度から、魔理沙は言葉をつなげる。

「まあ、な。
はっきり言って、このままだとフランはディアボロに依存していくような気がしてならないし」

それらを聞き、ディアボロはしばらく黙考していたが、

「結局のところ、私がこのままここにいること事体があまり状況を好転させない。
紫の所に帰られればそれが一番なんだが・・・」

もちろんフランにはきちんと話した上でな、と言った。

「それが一番なんだろうが、アイツよく考えればこちらから連絡をとる手段がほぼないぜ？
霊夢んとこ・・・も不確かか」

魔理沙が頭を抱える。

「いっそのこと人里に置いてもらって、フラン様には夜間にだけ会ってもらうというのは？」

「うーん・・・。

そんな吸血鬼がちょろちょろする様な事、あの人里の守護者が許すかしらね。

案外頭が固いところ、あるし。ディアボロの今後の人里との関係性を大事にする意味合いでもあんまりいい案じゃないわね。

―――まったくあのスキマは！呼んでなくても勝手に現れるのが性分なんじゃないの！？」

美鈴の意見に反論を述べて、そして一向に姿を見せる気配のない紫にレミリアが声を張る。

そして、

「・・・・・・・・・・・・。

あー、めんどくさくなった」

トン、と。

「恋色の魔法使いは、欲しい物は全力で手に入れるんだぜ？」

ディアボロを引っつかんだ魔理沙は、床を軽く蹴り箒に飛び乗った。

「おい魔理沙！どうしてだ！」

「あー？ここは住人が住人だから窓が少ないんだ。故に逃亡は廊下を通り階段を降り玄関をくぐることになる。もう逃亡とは言えないかもな！」

魔理沙は、引っつかまれたまま叫んだディアボロの声も笑い飛ばして紅魔館を飛ぶ、飛ぶ。

「まだ決着はついていない！このままではフランは、心に取り返しのつかない傷を負う事になるかも知れないんだぞ！？」

いざとなれば全力で抵抗する、そのためにスタンドを傍らに出現させる。

だが魔理沙は、前に向けていた双眸で彼を見つめた。

・・・赤く、全てが赤いこの紅魔館に、彼は少しだけ慣れてしまっていたのだろう。

彼女のその揺るぎない眼差しに、かつてのジョルノ・ジョバーナ（黄金の精神）を見ることなんて、ありえないだろうから。

「私もフランのことは心配なんだ。もしかするとディアボロよりも、な」

「・・・」

「このままじゃ―――フランはお前に依存するぜ？」

それに、と視線を前へと戻す。

「アイツは、その程度で壊れるほどやわなやつじゃあないのは、お前だってわかっているだろう？」

信じろ、と言う。言い切る。

太陽のような彼女は、夜の世界にはやはり眩し過ぎるのかも知れない。

「・・・・・・」

返事を返せないまま、ディアボロは魔理沙の手を払い自力(スタンド)で箒を掴む。

「そういえば彼女が、魔理沙は何回か遊んでくれた、と言っていたな。

・・・私も今度遊びに来るとしよう。

まあ、今日のところは引き上げるとして、だ」

「そうそう、その意気だぜ」

そんな二人の視界に、玄関と一人の門番が映る。

「どうやって先まわりしたんだか・・・。

勤勉な職務態度だな、いつもそのぐらいだったら私も困るぐらいだ」

「今回だけは、通すわけにはいきませんね。咲夜さんに頑張ってもらいました。

・・・重いのでは？私が持ちましょう」

「何、借りていくだけだ。人一人ぐらいが私のいつもの荷物のスタンダードな重量だぜ」

「まあ、あなたはそれでいいのでしょうね。

―――でも、ディアボロさん。・・・せめてフラン様に一言話してから行かれないのですか？」

広々とした玄関ホールの天井近くにふわふわと停止したディアボロ達を、美鈴は睨みつける。

「・・・たしかにそうするべきだろう」

彼は左手にスタンドを纏わせて箒を掴んでいて。
右手で美鈴を指差し、告げる。

「だから美鈴、『家族』が傍にいるのだろう？」

私は今回いないほうがいい、と私自身が思ったまでだ・・・と言い放ち、頭上の魔理沙に託す。

「突っ込んでくれ。弾幕は、私の能力で対処しよう」
「・・・・・・いいな？」

唇の端を吊り上げ、眼下のディアボロに託される。

「・・・・・・華人小娘、紅美鈴。
フラン様・・・家族のために、押して参る！！」

そして。

「キング・クリムゾン！！」

この世の時間がきっかり五秒間・・・『消し飛んだ』。

今にも落ちてきそうな空の下で（前書き）

空の上で、地下の下で、重い思いを想う。
愛しているだけでは足りない。力があっても満たされない。
立ち止まる事と歩き出す事と。是非なぞ彼岸に投げ捨ててしまえ。

今にも落ちてきそうな空の下で

十六夜咲夜は考える。

お嬢様方を見ていると、最近よく湧き上がるこの気持ち・・・。

「！これが忠誠心？！」

「何鼻血出しながら言ってるのよ」

「失礼しました。お嬢様のことを考えていたら突然」

「意外と怖い事言ってるってわかってる？」

血の処理をする従者と、それをやや呆れながら眺める主人と。

「・・・・・・・・・・。

それにしても、ディアボロもせめてフランを説き伏せてから行ってくれればよかったのに」

「人に『止めるな、見ていろ』と命じておいて一体何を今更、という感じですね。

・・・美鈴も突破された際には『気がついたら遠くに飛んでいた』と言っておりました。

その事実――――能力をも使用したのですから、生半可な決意ではなかったのでしょう」

今現在美鈴はその足で妹様の所へ向かっており、半日ほど有給を認めていただきたいとのことでした。

――――そう、淡々と事後報告を告げる咲夜。

だが、その瀟洒なメイドの目は今主人に注がれていた。・・・・・・・

どうなさるのですか、と。

ディアボロの事、フランの事。引き止めるのか、思いはかるのか。

「とりあえず・・・。

美鈴の方は、有給なんて認めないと言っておいて頂戴。幻想郷にそんな気の利いたものなんてないわ」

レミリアは、従者の視線なぞ意に介さず自分自身の言葉を紡ぐ。

「・・・・・家族の心配をするなんて当たり前でしょう。そんな事にわざわざ使わせるほど、私は器量が狭いつもりはないわ。守るべき門もない門番なんて、滑稽で見てられない。

――とりあえず、フランの方は一任する形になるわね」

「・・・よろしいのですか？」

言外に、傍にいてあげないですか？と尋ねる。

「・・・・・彼に会って、フランだけじゃなく、私たちも変わっていかなければ、と。そう感じたわ。

あの子に今必要なのは、より広い世界。私（姉）とあなた（従者）だけが、今までのあの子の全てだった・・・そうさせていた。

でもこれからは、あの子にもっと世界というものは広いのだと教えてあげたい。――だから彼女には、その最初の架け橋となってもらいたい――」

門番。それすなわち門と外とを繋ぐ者であり、それを見守る存在。

「たしかに姉として、不安を感じていないと言えば嘘になるわ。

・・・でも不思議な人。彼に出会った今なら、座して待つことがで

きる。信じることができる・・・・・・・・・・・」

そう。

彼女は確かに、彼から『黄金の風』を感じたのだった。

「とりあえず、どうするんだ？」

「もちろん当初の目的を完遂するだけだ。

アリスに珍しい物拾ったって見せてやるんだぜ。その前に人里によるがな」

古来より魔女の伝統たる飛行手段・・・箒に乗って空を飛ぶ魔理沙と、その箒にぶら下がるという誰も実行したくもないような方法で同行するディアボロ。

さすがはボス、といったところなのかそんな姿勢でも動じる様子が全くない。

「まったく・・・。私としては早く今日の寝場所でも確保したいんだが、そのアリスが宿でもやってるのか？」

「いいや、別に私と同じで森の魔法使いやってるんだが。

まあいろいろと恩を感じている部分もあるのさ、大人しく土産になってくれ。

それに、別に私のところに泊まったっていい。無理矢理つれてきたんだからな」

「そんなことはないぞ」

「そうか？
・・・でも、飛び出て来たはいいが実際心配だぜ」
「・・・とりあえず一週間後ぐらいに遊びに行こうじゃないか。
そのときに、フランはきちんと前へ歩めているさ・・・家族がいるんだから」

「あ！・・・メーリン・・・・・・」

ここは紅魔館の地下室。
永年をこの場所で過ごしてきたフランは、扉を開けて入ってきた人影に、一瞬心を沸き立たせ―――そして意気消沈する。
意気込んで立ち上がったイスに、膝が砕けたかのようにもう一度腰を下ろした。

「フラン様・・・」

入ってきたのは美鈴。
ディアボロ達の説得と阻止に失敗し、その足でここにやってきたのだ。

「どうしてここに来たの？お姉さまに言われて？」

扉に・・・彼女に背を向けるように、後ろを向く。

・・・なんだかとても悲しい。
既に事情は咲夜に話してもらって知っているから、彼女がここにい

るということで・・・彼が行ってしまったのだとわかる。

正直なところ、フランは彼女に来てほしくなどなかった。

なんだか、目を逸らしたくなる事実を目の前に突きつけられているようで・・・・・・それが逃避だとしても、行ってしまったことなど・・・理解したくはないのに。

今のこの状況も、そんなことを考える自分も、全部全部嫌で・・・悲しくて。

「いえ、レミリア様にお休みを頂きまして・・・。

――――申し訳ありません、ディアボロさんを止めることができませんでした。・・・私の、力量不足です・・・・・・」

だから、横に座った美鈴に答えるため絞り出した声は、不自然に明るい。

「いいの、別に。

何も変わらないの。・・・・・・・そう。今までと、何も――――」

フランの横に座る美鈴は、何も言わない。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・」

不自然に明るいまま、フランは――――聞きたかった事を尋ねる。

「ねえ・・・だったら、なんで来たの？」

・・・それを聞くのは、怖かった。

何で怖いのかがわからないのが、一番怖かった。
隣の美鈴が、そんな不安なんて汲み取ってくれるはずもなく。
「家族に会うのに、いちいち理由が必要ですか？」

そう言われて、抱きしめられた。

「ディアボロさんよりも、私のほうがフラン様の家族をやっている時間は、ずっとずっと長いんですからね？」
あんまり忘れられると、拗ねちゃいますよ・・・？
そうのたまう美鈴に抱きしめられたまま、フランは。

「メー・・リン・・・・・・。
メーリン・・メーリン。・・・・・・美鈴！！」
抱擁してくれる彼女の名前を、ただただ叫び続けた。

美鈴はフランの慟哭を受け止め、語りかける。
「ディアボロさんは、また遊びに来てくれます。
そのときにいつまでもメソメソしていたら、怒られますよ？」

上に参りましょう、咲夜さんがおやつを用意してくれていますし・・・と明るく門番を守る彼女は続けた。

（とりあえず、あの階段の長さを縮めてもらわないことには始まりませんね・・・）

今後のことを考え始める美鈴だが、ああそっか・・・と気づいた。

――――これで最後ならば、あの長い階段にも少し寂しさを覚える。この地下室も、もう用済みだろうから。

今にも落ちてきそうな空の下で（後書き）

荒木飛呂彦　ジョジョの奇妙な冒険　５９巻より

タイトルについては上の通りですが・・・。信じられるか？フラン編終わりって書いたの、三話も前なんだぜ・・・？

基本構想なんて考えないで前話の続きを書くってスタンス。しかも結構先の話の方が順調に書けるから４～５分は溜ってたり。

そんな自分ですが、今後も頑張っていきます。

人里とオカンと歴史喰いと。（前書き）

現の裏側に理想を描く。
綴られた円環は、ただただ道理通りに一巡する。
裏側を覗くと侮るなかれ。しかし誰にも触れることもできず。

人里とオカンと歴史喰いと。

人里の少し手前で二人は地面に降り立った。

「人里は、人を襲わなければ妖怪だって出入りが許されている代わりに、必ず歩いて入らなければいけないんだ。

紫曰く人妖の均衡は適度な距離感が云々らしいが、まあそれだけ覚えていれば大丈夫」

「いや、私は飛べないからどっちにしろ関係ないぞ」

まず最初にディアボロが軽く飛び降り、その前方に魔理沙もふわりと着地する。

「まずは茶屋に行くか。

感じのいい行きつけがあるんだ。とりあえずそこで待っていてくれ」

懐をごそごそと探って、割と中身の入ってそうな巾着を差し出す魔理沙。

「こん中に一通りの貨幣は入っているから、店主のおばちゃんに名前とか教えてもらうといいぜ、話しとくからな」

中身も自由に使ってくれ。いつか利し付きでしっかり返してもらうから、と付け加えるのも忘れない。

「そこまで言い切られると受け取らない理由もないな、すまない」

ディアボロは笑いながら巾着を受け取り、ひとつ疑問を口にする。

「ところで魔理沙はどうするんだ？荷物持ちぐらいなら私がやるが？」
「いや、大丈夫だ。女性の買い物をわざわざ尋ねるものじゃあないぜ？」
「ああ、それもそうだな」
そうして、人里へと歩き出した。

「おかーさーん！」
「毎度あり。はいおつりね」
「あの髪の色・・・噂の外来人？！すみません、取材」
「天狗さん！お金はきっちり払ってもらいたいね」
「あやや、すみませんー！」
「よっちゃん！こっちこっちー！！」
「それでね、最近うちのお隣の息子さんが結婚したのよ」

ここは人里。不死人と半人に守護される、幻想郷の人間の大半が住まう場所だ。
様々な人（そして時には妖怪）の喧騒の飛び交う通りを、私とディアボロとで歩いている。

「ん？今誰かに呼ばれていなかったか、ディアボロ？」
「そうか？私には聞こえなかったが・・・」
なんだか聞いたことのあるような・・ないような・・・・・・どうでもいいか。
そんなことよりそもそも私は、ディアボロがあの館で悪魔の妹を泣かせた事情を知らないのだ。これは由々しきことだと思うわけで・・・。
「なあディアボロ。お前には何か能力があるのか？でなきゃ、正直フランと遊ぶなんて命がいくつあっても足りないぞ？」
そういえば忘れてたけど門番を突破した時もか？と聞き足すと、ディアボロはやや逡巡したような顔を見せた。
「何、言いたくなければ言わなくてもいい。だが、私はこれでも本当に大事なことはきちんと弁えてるつもりだぜ」
「いや、魔理沙に言いたくないとかではないんだが・・・まあ、紅魔館の皆も知っていることだしな」
そこまで言って、彼は一旦口を閉ざした。
「私の能力はスタンドという、『程度の能力』とは少々毛並みの違う能力だ。
生命エネルギーを具現化させたスタンドというものを使え、そのスタンド自体も能力を持っている。紅魔館を突破したのは我がキング・クリムゾンの『時間を消し飛ばす』能力だ」
時間を・・・消し飛ばす？
―――なんてこった。

霊夢や紫並みのひでぇ能力を持っているぜコイツ。

「箒にずっとぶら下がっていられたのもスタンドってやつか」

「普通の人間にそんなことできると思うか？」

なるほどなるほど。いや、見た目華奢なのに随分鍛えてるんだなー

なんて思ってたよ。

でも具体的にどうなるんだ？いや、能力は体験しているが事実わけ

わからん。

「――まあいいや、行こうぜ！」

そんな思考もまどろっこしい。いつもの事とはいえ、この活気の中

じっとしてろって方が難しいぜ。

だからディアボロの手をとって通りを走り出した。私としては箒に

乗るのもいいが、ときに無性に駆け出したくなるときもある。

繋いだ手からでも、苦笑している感じは伝わってくる。これが若さ

からくるってヤツか？いやでも、髪がピンクに緑の斑模様が浮かん

でいる中年を私は知らないぞ。

そんな事を考えていたら、肩越しに声をかけられた。

「それで、目的の場所はまだなのか？」

「そろそろだぜ――とと、ほらここだ」

あいも変わらずみすぼら・・・趣があり過ぎて、うっかり見落とす

ところだったのは秘密だ。

「燻し銀な佇まい、だろ？」

そうディアボロに言うと、丁度客につり銭を渡し終えた店主がこっちに気づいた。

「あら魔理沙。一丁前に言うじゃないか」

「ようおばちゃん。今日は客として来たんだ、口のきき方に気をつけてもらおうか？」

「そう言うのは、もっと売り上げに貢献してからだねぇ。

・・・あら？こちらさん、見ない顔だね」

折角のお得意様をないがしろにして、おばちゃんがディアボロの方に意識を向ける。

あれか？私より売り上げが見込めそうってか？

「ああ、こっちは外来人のディアボロだ。来たばかりらしいから、いろいろ教えてやってくれ」

「よろしく、お願いします」

「ああ、こちらこそよろしくねディアボロさん」

なんだか私と態度が違うんだぜ！・・・これがカリスマってヤツか？

考えるほど不毛になってくる。さっさと話を進めよう。

「じゃあオバチャン、ディアボロの事頼んだ！私はちょっと野暮用があるからな。とりあえず貨幣のこととか教えといてくれ」

そう言って、駆け足で来た道を戻る。

途中何軒かの店の品に食指そそられる物もあったが・・・とりあえずは後回し、だな。

「まったく。まるで落ち着かない子だねぇ・・・いくつになっても」

何か失礼な事を言われている気がするが、優先事項を履き違える私じゃあない――――。

「さっさと潰れちまえ！」

でも悔しかったから捨て台詞は残すがな！

そうして魔理沙が店から退場したのち。
太陽も盛りを過ぎ、地平線に埋没する軌跡が見え始めたころ、ディアボロは本格的に宿の心配をし始めた。

店の軒先の腰掛に座り、店主自慢の茶と茶菓子を堪能していても心は今一つ楽しめないでいる。

「こないな・・・」

魔理沙が戻らない。

戻らないなら戻らないで、そろそろ旅籠なりなんなりの目星をつけに行きたい頃合だ。
女将は泊まっていけ、と言ってくれるが初対面にあまり頼るのも・・・と考えてしまっている。
どうせ時間を持て余しているのだから、と店の手伝いを申し出ても将来のお得意様にはゆっくりしていってほしい、とのこと。

結局、やることがないのに時間には追い立てられつつある状況に彼はいた。

だから彼に降り注ぐ西日が人影に遮られた時、咄嗟に魔理沙？と声をかけたのはしょうがないだろう。

「あなたがディアボロだな？」

涼しげで、しかしその中に一本の『芯』を感じさせる声音。
ディアボロが目を凝らしてよく見ると、魔理沙とは対極にあるかのように透き通った銀髪に、かぶった帽子と胸元を飾る赤いリボン。

「私は上白沢慧音（かみしらさわけいね）。その魔理沙から、あなたに言伝を頼まれてな」

その悠然とした眼差しをした女性に、とりあえず確認をする。

「これはすまなかった。———慧音さん、でよろしいかな？貴方が来たということは、魔理沙は来られないと？」

「ああ、そういうことになるな。
簡潔に話すと、魔理沙は人里に買出しに来る紫の所の式を探していたようだ。
そして、私に君への伝言と面倒を見てくれと頼まれたんだ」

そこまで聞いて、早くもディアボロは断る失礼と素直に好意に甘えることとを天秤にかけ始めた。

「しかし何でまた魔理沙はあなたに？」

「結局は探し当てられなかったわけだからな、きっと恥ずかしかったのだろう」

にべもない言われようだ。

「何、純粋にタダというわけでもないんだ。遅れたが、これでも私は教師でな。魔理沙には今度臨時で教壇に立ってもらう手筈になった。彼女にもいい経験になると思ってはいたんだが、なかなか本人了承しなくて・・・そんな時に今回の話だ。だからまあ、ここは素直に世話になってくれると嬉しい。会わせたいヤツもいることだしな」

「・・・・・・」

まあ、元々見知らぬ異郷の地。ディアボロはこれも何かの縁、と思うことにした。

「ならば、お言葉に甘えさせてもらおうか。よろしく頼む」

そして慧音に一言断り、女将にも声をかけておく。

「おかみさん。お茶と団子、美味しかったですよ」

「あら、もう行くのかい？

達者でね」

何故だかしんみりとした表情で、元気付けるためか――――肩をバシバシと叩く女将。

「こんな場所だ。上白沢先生と一緒だといっても、死なないでおくれよ？」

「・・・ええ、大丈夫です」

本当は。
本当は、女将の表情から彼女がディアボロだけを心配しているのではなく、もっと複雑な思いも垣間見えたのだが。
彼も、同じ人間から心配されるというのは随分なかったことで・・・・・・そう、返事をした。

そうして、こっちだ――――と言って歩き出す慧音の背中を追い、すぐに人の流れに紛れ見えなくなった。

人里とオカンと歴史喰いと。（後書き）

お待たせしてすみませんでした。
まったく筆が進まない時、ＳＢＲの続きを読んだら世界が一巡しました。この感動で２～３話分ほいほい行けそうです。
まあ感動＝出来のよさではないんですけどね！今回は特に！

上白沢慧音の罪障評価　その？（前書き）

悩んで泣いて、泣いて苦悩し、苦悩し吐露する。
終わりは始まりであるけども、この手は何かを取り零す。
星を掬い上げるには、決定的に足りないのであった。

上白沢慧音の罪障評価　その？

胸が痛い。体が重い。

「くそ・・・なんだってんだ・・・」

一瞬泣くのかと思ったが、私は自分で思っていたよりタフだったようだ。

吐く息の熱が煩わしいし、ぜいぜいと喘ぐ音も神経を逆撫でてくるが、右手の箒でもって陽光の下へ飛び出す。

慣れているはずのその衝撃に腰砕けになりそうになるが、箒の速度を緩めたりはしない。

・・・もとい、できない。

「このまま――――このスピードを維持できれば、なんとか・・・なりそう・・・・・・かな？」

普段の私なら「安全運転（セーフティ）か？」なんて言いたくなるスピードだが、それで精一杯だ。

とりあえず、アリスのとこまで辿り着く。

――――左腕は最早痛みしか感じないほどズタズタになっており、脾腹にも違和感を覚えている（おそらく、少々抉れている）。

素人でも、多少の止血でどうこうなる程度ではないということはわかる。

どーしよ。お嫁に行けないんだぜ。

「・・・お嫁、ね」

家を飛び出した後も、霧雨の姓を名乗る私が、か。――ディアボロにでも貰ってもらうか？

「・・・・・・悪くは、ないたたたたた！」

なんか腹の傷が更に悪化してきやがった！
もう痛みは我慢する、死ぬほど痛いけど。
それより止血だ！血を流しすぎて、体が軽く感じる。本格的に処置を施す必要がある、が。

「自慢じゃあ・・・ないが、そういった、ことは、苦手な部類に入るし、な」

大体まず片腕では、本職でも難しいだろう。

――私はここでは死ねない。

・・・本職。

「――本職、かあ」

相手も何も見えず、怪我に気づいた瞬間には逃亡していた。
その判断が間違っているとは露ほども思わない。おそらくそのまま抵抗しようとしていれば死んでいた公算が大きいし、何よりしんどい。
幸い追ってはこない。そうなると、通り魔的な行為に近いが・・・

人里でこんな事件が起こっているなんて聞いていないし、そちらは大丈夫だろう。
おめおめディアボロに会うのも気まずいから、慧音に後を頼んだ・・・・・・のもあるが、事実はこれだ。
寺子屋の窓から一方的に捲くし立てたから気づいてはいないはず。
文字通り、『ディアボロのことを頼んだ』意味合いもある。
・・・いや、別にここで死ぬつもりもないし、「普通の黒魔法使い」としては下手人を逃す気もないが。

「私のカンですまないんだが・・・。
私が下手人なら、まずは、ここ幻想郷における、医者を潰すか・・・叩くかはするんだぜ」

――――慧音んトコのアイツは、よく医者の所へ行くからな。

もし・・・だが。
ディアボロが、この件に巻き込まれるのなら。
私は、どうすればいいのだろうか。

「そういえ、ば・・・あいつの、本職って・・・何だ？」

「ねえ咲夜、フランの姉って誰だったかしら？」
「忘れているのなら申し上げますと、レミリア様ですよ」
ここ紅魔館では、今日も館の主人と従者の語らいが途絶えない。
「いや、そうじゃなくて・・・」
辛辣に突き放すような咲夜の言葉に、やや口を濁し手に持つカップの中身を見つめるレミリア。
その中の、まるで血のように赤い紅茶・・・ってかまんま血、に視線を合わせたまま彼女は愚痴る。
「いや、たしかにフランと実質的に接していたのは美鈴だけど・・・。だからってこの状況はないと思うの」
「美鈴とフラン様、そしてパチュリー様に小悪魔。何やら楽しそうに遊んでおられましたよ？何やら私達だけ取り残されている感が拭えませんね。変に意固地にならずに、参加なさればよろしいじゃないですか」
その後ろに控え、彼女に返答する咲夜。
目を軽く瞑るその顔には、僅かに微笑が浮かんでいる。

―――この方も、随分と丸くなってしまった。

『ふーん。アナタ、時を操るのね』
『・・・気にいったわ、人間』
『この私の従者になりなさい』

初めて出会い、そのまま気紛れで拾われ、ここで暮らすことになったあの時から。

「――お嬢様」
「だから私・・・ん。何かしら？」

一人で虚空にぶつぶつと呟いて、怪しげな雰囲気を周囲に振りまいていたレミリアは、かけられた声に反応して振り向く。

斜に傾いだレミリアの、その背の羽がより目立つ角度。
人外の、証。

（ああ、なんでなんでしょう・・・ね）

永遠に紅い幼き月。
それが何故今更変わろうというのか。
そして何故私はそれを好ましく思うのか。

「・・・・・お嬢様は、あの時を憶えていますか？」

何が聞きたいのか、そんな言葉が出た。

『あなたには私を静めてほしい。
永遠に紅い幼き月に仕える――あなたは今日から「十六夜咲夜（さくや）」。
私の傍の、朔（さく）となりなさい』

具体的に指し示すことなど何一つなかったのに、レミリアは嬉しそうに微笑んだ。

「ええ、もちろん。

———忘れるわけがない、大切な思い出よ」

もしかしたらその時の私は、「吸血鬼」という・・・そういうモノに対する憧れのようなものがあったのかもしれない。

でも、今は。

その吸血鬼と微笑みあうたびに、心が踊るのだ。

かつて、人外の存在に心ときめかせた人間は、人間味あふれるソレに失望を憶えず。

今、徐々に人間へと歩み寄る吸血鬼は、語り合う友を得て。

お互いの視線を交わす。

そこに込められた想い。愛情とも、信頼とも少し毛色の違う感情を抱いて、ただただ時間が流れていった。

上白沢慧音の罪障評価　その？（後書き）

地形？そんなん考えていたらまったく進みません。それだけは言えること。

上白沢慧音の罪障評価　その？（前書き）

『あなた、どっちの方が好き？』
――――同じぐらい。
『じゃあ、どっちの方が嫌い？』
――――こっち。

上白沢慧音の罪障評価　その？

「まあ、そう硬くならずに」

ディアボロが慧音に案内されたここは、彼女の居宅。
勧められた座布団に見様見真似の正座をして、出されたお茶をすすっている。

「あー、しかしなんだな。あれだけ私の申し出を嫌がっていた魔理沙が二つ返事で了承するとは。
それだけ、ディアボロが大切だったのかもな？」

心なしかニヤニヤとして、慧音が尋ねる。

「意地の悪い質問はよしてくれ。
あの子はとても純な子だ。それはあなたもわかっていることだろう？」

手をひらひらと振って、そんな彼女の二の句を絶つディアボロ。

「ただ、素直にそれを表現し辛い気性というか・・・年頃なんだろうさ」
「――――はは っ。
そういっているお前は、まるで父親だな？
――――？」

喜色を浮かばせる慧音だが、会話の相手からの反応がないことに首を傾げる。

「どうしたんだ？ディアボロ。
気分が悪いのなら、少し・・・」
「いや・・・大丈夫、だ」

ディアボロが無理に浮かべた笑顔から、彼女はおおよその見当がついた。

「・・・そうか」

ただ、それについての言及は特にしなかった。

「・・・」
「・・・」

彼女とて、この幻想郷においては人ならざるモノに区別されているものだ。
その短くはない記憶を手繰れば、語る過去の一つや二つはある。

「――――なあ。
少し、昔話をしてもいいか？」

手に持った湯呑みに視線を落としたまま、慧音が言葉を続けた。

「私の古い友人で、現在の同居人がいるんだ。
彼女は、とある禁忌を犯して不老不死となった。生きている者の中でも最大の禁忌に」

そこで言葉を一旦区切り、ディアボロの顔を見る。そして、ひょい

と片手をあげた。

「この湯呑みだって、落とせば壊れて――――それでお終いだ。
だが彼女は不老不死、蓬莱人。その存在が、その生が。生きている
というだけで罪を重ね続ける」

「・・・」

そして慧音はそこで声の調子を変えて、

「私がいいたいのは、どう生きるかということ。
罪を犯すことは仕方がないことだと思うさ。だが、それを後悔して、
その上でどうやって生きていくのかが大事なんだ」

これは閻魔様も認めている、ちゃんとした事実なんだぞ？とおどけ
て片目を瞑ってみせる慧音。

「以上、慧音先生の昔話でした。感想は？」

「・・・ないさ、慧音先生。

――――すまない」

――――おそらく、この罪の意識を一生抱えて過ごしていくのだろう
な・・・。

・・・贖罪、か――――

「なに、答えを見つける手助けをするのが私さ。逆に言えば、辿り
着くのは自分自身で行わなくてはならない『過程』」

せいぜい悩め、と彼女は笑いかける。

「お茶のお代わりはいるか？」

そうした語らいも過ぎ、夜が更けてまるで妖怪でも出そうな時分。

そろそろ行くか、と慧音が呟いた。

「ディアボロ。

さっき話した同居人を迎えに行くから、少し待っていてくれ。妖怪も出るし危ないからな」

「・・・君は何を言っているんだ？それなら私もついていくぞ」

危ないのはそっちの方だ、とディアボロが座布団から腰を浮かせる。

「大体出歩くこと自体あまり勧められた行為じゃあないと思うぞ。女性が一人で出歩くには危ないだろう」

「いや、ディアボロは人間だろ？

話の内容がさっぱり見えて・・・」

慧音の目がん？、と動いた。

「・・・ああ。そういえば、ディアボロは能力が使えるんだったな。じゃあ、お願いしてもいいかな？」

得心したようにそう言う。

「・・・ん？
私が能力を持っていると話したか？」
逆にディアボロは少々気に掛かったように尋ねた。
「！あ、いや・・・魔理沙！魔理沙から、そう。聞いたんだ」
そういって、すたすたと戸口へと進む慧音。
挙動から、嘘をつけない性格だとわかる。
「どうしたんだ、ディアボロ。早く行こう」
「・・・ああ、まあ、行こうか」
何かまずいことでもしてしまったのか？と不審がるディアボロだが、飲み込んで後に続くこととなった。

すっかり日も落ち、一寸先も見えそうにない星空の下の幻想郷。
もちろん街灯なぞなく、眩く光る月明かり・・・とは言っても慧音の手の提灯のみが足元を照らす光源では少々心許ない。
透き通るように虫の音が響く中、手持ち無沙汰なディアボロは己の前を歩く背に声をかけた。
「なあ慧音、もし私がいなかったら一人で出歩いていたのか？」
暗に危ないぞ、と語りかける。
「心配してくれるのか？私は大丈夫だ。

何せワーハクタクだから、な」

くるっと後ろを振り向き、知っているか？と問いかける。

手元の明かりで照らされたその表情には、特になんの感慨も浮かんではいない。

「いや、すまないが知らないな」

「ふむ。

簡単に言ってしまえば妖怪混じりの人間、といったところさ。

びっくりしたか？」

「いや、別に」

なにせ八雲家の家族だからな、と彼女の言葉を反芻して返す。

「簡単に言えば紫が私を救ってくれた、その感謝も含めて家族となったんだ。

———感想、は？」

宵も更け、目蓋を閉じようが閉じまいが変わらずに在る黒。

こんな夜には、ついつい気がせるもの。普段より饒舌になろうものだ。

偽らざる本音は、容易く絆を育む。

「・・・なに、悪くはない、気分だよ。

ディアボロがそんなヤツで、な」

上白沢慧音の罪障評価　その？（後書き）

本気で苦悩したのが、慧音の口調。あと口調とか口調とか口調とか。

『慧』の音色、艶やかに『紅』（前書き）

恐怖の源泉に、蓋をする。
蓋をして蓋をして蓋をして、まわった。
後ろから忍び寄るものを、視界に入れないために。

『慧』の音色、艶やかに『紅』

「死ねぇ！！」

右の拳を振るう、振るった先には輝夜がいる。頬を殴りぬけた感触を右腕全体で感じ、輝夜に脾腹を蹴り抜かれた感覚を腹部で味わった。

顎関節が砕ける殴打も、胃の一部と肝臓を丸ごと抉り出す足蹴も、蓬莱人である私たちには何の支障も来たさない。

「貴方こそ！！」

絢爛で華麗な弾幕に隠れるように、樹枝を思わせる光芒が迫ってくる。それを片端から焼き尽しながら、負けじと弾幕を返す。

お互いに被弾した傍から再生していく。竹林に、肉が焦げる臭いと血肉の臭いが充満していった。

・・・最初に禁断の秘薬を臓腑に溜めた時、別に何も感じなかった。口から咽頭から喉頭から食道から胃から小腸から大腸から抜け、目で鼻で口で舌で受け止めた、それだけだった。

一度目、死んだとき。――――驚嘆した、感涙した。
二度目、死んだとき。――――爽快だった、愉快だった。
三度目、死んだとき、絶望した。

・・・実は、今言っていたのは全部嘘。虚言であり、狂言でしかな

かったのだった。

だって死なないのだから。

頭を砕かれようが四肢をもがれようが全身を焼かれようが死に誘われようが血液を奪い尽くされようが萃められようが脳髄を破壊されようが心の臓を貫かれようが毛髪ごと凍てつかされようが迷いを断ち斬られようが狂わされようが毒に犯されようが奇跡を起こされようが。

歴史を喰われても、永遠と須臾を操られようとも。

死には、しない。

目の前の、こいつも。

・・・こんなに、輝くような月明かりの夜だ。

いつかの月でもないが――――。

どこまでも、紅く染まれ。

「輝夜ァァァ！！！！！！！！！！！」

「妹紅ッッッ！！！！！！！！！！！」

私”も”、紅く染まれ。

「えー、この種は口内で咀嚼と第一消化までを同時に行うことまではわかっており――――」

部屋の中に朗々と清音がこだまする。

子供達の頭の上に響いていく声の主である、上白沢慧音。銀というよりは無色透明感のある白色に近い頭髪に、縁を赤くあしらった博士帽のような物を乗せた女性だ。

彼女は教本を読み上げながらもしっかりと、こっくりこっくり舟をこぐ一人の生徒を見ていた。

「耶七！」

突然の一喝に少年はビクッと身を強張らせ、周囲の「やっちまったなー」感溢れる視線の中、恐る恐る顔を上げる。注意だけで済めばいいが、生憎と彼は常習犯故そんな温情は期待できない。

「またか、お前は。覚悟は出来ているんだろうな？」

気抜けした顔（かんばせ）を隠し切れぬ慧音がそう告げると、少年の表情に絶望が走った。

ここ幻想郷に、体罰だ何だと騒ぐような輩や罰則とかこつけて虐める教師もいない。悪いことをすれば他人の子供だろうと拳骨の一つでも落とし「もうするなよ」で済むし、彼らぐらいの腕白盛りな身の上ではしょっちゅうな話ではあるが・・・『彼女のは』話が違う。

今朝も親父に手痛い鉄拳を頂戴したばかり、せめてそこを狙わないでくれと心中で祈るのが精一杯。

慧音が肩をがしっと掴んで言う。

「舌噛むから口は閉じておけ」

彼女の愛の鞭は、なんといっても頭突きなのだった。

ボグッ、という鈍い音と皮肉のように鋭い痛みが、耶七の額から後頭部まで突き抜けた。

「あ、ありがとうございました・・・・・」

「ん。これから気をつけなさい」

その愛の一端を受けた者は、なぜか皆謝辞ではなく感謝の意を述べるという。彼女ももうそれでいいかと思っている。

案外その頭突き、本当に心に響いているのかもしれない。

「けいねせんせー、またねー！」

「ああ、寄り道せずに帰るんだぞ」

その後は月並みに授業が進み、放課後になった。そうして最後の一

人が家路につく。

今だ暖かみを感じさせるものの、そろそろかしいで来た太陽の光が、彼女しかいない教室を照らす。

床に長く伸びる影法師。その輪郭が、憂いのこもる吐息を吐く。

・・・彼女が教壇に立つようになって、人換算で随分たつ。

教えた子供は大人になり。その子等がまた先生と慕う。

先生より背が伸びたと、　今度婚約するのと笑う。それにつられて彼女まで嬉しくなる、そうか！と喜色ばむ。

そして辛くなる。彼らは呆気なく現世を去る。残される者は、辛い。残されるものが、辛い。

仕方がないと割り切っている。しょうがないと諦めている。だって、どうしようもないことだから。

そんな彼女を強い、と誰かが言った。そんな彼女を逃避している、と誰かが評した。

いずれにせよ、いなくなった。

そして。思い出を、抱えきれなくなるんじゃないかと不安になる。彼らを、忘れてしまうのではないかと臆病になる。

―――一番怖いのは。抱えきれなくなって、取り零して、それらに何も感じなくなるんじゃないか、と思うこと。そう思う自分が、切なくて。

「・・・・・・」

歴史喰い。知識と歴史の半獣は、自らの歴史を重いと感じた。

なんで重いのか、永いからで。なんで永いのか、半獣だからで。

でも、なんで耐えられるのか。それこそ、半獣だから。

周りの同属ほど、鈍感になれない。半分だけの同族ほど、無関心になれない。――そんな自分は、少しだけ好き。

「・・・ん」

指の腹で、机の一角をなぞる。僅かに感じる表面の傷跡は、彼らとの歴史の一つ。これは確か、燐が誤ってつけたもの。その隣は、萩。

「よかった。まだ、忘れていなかった、ぞ」

慰める言葉は、別に安らぎも嫌悪も感じなかった。

「――」

・・・実は、今言った事、ちょっとだけ嘘が混じってた。虚言であり、狂言でしかなかったのだった。

本当の安らぎは、別に在る。本当の嫌悪は、別に居る。

傍に居ると、少し安らぐのかもしれない。その在り様は、少し嫌悪を感じるのかもしれない。よく、わからない。よくわからないけど、一緒に居る。よくわからないけど、共に在る。

・。・・。・・・。・・・・。・・・・・。・・・・・・。・・・・・・・・。・・・・・・・・・・・・・。・・・・・・・・。・・・・・・・・。

確実に、私よりは歴史を重ねている―――なのに。
時折見せる、、弱々しい横顔。そんな彼女は。

―――見たく、ないのかも・・・知れない。

けど。

けれど、それ以上に。

・・・怖い、とは違うけど・・・・・・恐れている、のは。

「私」が「アイツ」を置いていくこと。
「私」が、置いて行く側になること。

「私」、が。「私」が私私私わたしわたしわたしわたしわたし私私わたし私わたしわたしわたしわたし私わたし。

そこに、いきなりガタッと音がした。
振り向くと、誰かが忘れたのであろう・・・紅いビー玉。
拾うと、摘んだ指の先で鈍く光った。

「――帰る、か」

そして、この日。

「――慧音！」

彼女は魔理沙から、ディアボロを任される。

「時間」が、動き出す――

『慧』の音色、艶やかに『紅』（後書き）

大分更新が遅れてしまい、すみませんでした。
ストーリーが何も決まっていない、手探り状態なので次も・・・うん。頑張ります。
冒頭の輝夜と妹紅の描写にあたって東方永夜抄のプレイ動画を拝見させて頂いたので、なんだか紅魔郷クリアできる気がしてきて困る・・・。頑張ります。

モブの三人の名前決めるのが今回一番悩んだ気がしなくもないです。
折角なので今後どこかに登場させたい。

拳で語る、言葉で語らない　その？（前書き）

見つめてよ、勘付いてよ。
探さないで、いなくならないで。
―――鏡の中の私は、黙って微笑んだ。

拳で語る、言葉で語らない　その？

スタンドとは、何なのか。

私の傍らに、常に控え立つキング・クリムゾン。

この世の運命は、我が『キング・クリムゾン』を無敵の頂点に選んだ。それは明白だ。

・・・いや、選んだという言い方には語弊があるな。

私は、ジョルノ・ジョバーナの踏み台に過ぎなかったのだ。キング・クリムゾンの「この世の時間を消し飛ばす」能力も、『矢の先にあるもの』を体現した、ヤツのゴールド・エクスペリエンス・レクイエムの前に敗れ去った。

G・E・R（ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム）は、本体及び自身の存在を「今」という概念に対しての「未来」へと引き上げる。ヤツの周囲には「時間の坂」とでも表現するべき「今」と「未来」との狭間が生じることになる。常に「今」に対しての「未来」に在り続けるため、「今」の存在は「時間の坂」を越えてヤツまで『到達できない』のだ。一方あちらからの攻撃はその始点が「未来」であるため、私の墓碑銘（エピタフ）のような予知能力でもない限りは回避どころか知覚することすら不可能だ。

何よりも、その攻撃手段が飛び道具等ではなくスタンド自身による殴打の場合、攻撃対象は「未来」にいるG・E・Rの接近によって強制的に「時間の坂」の上方へと引き上げられ、「未来」で攻撃を食らい「今」へ落ちることになる（もちろんその拳も「未来」からの攻撃のため、加速される）。その「未来」に「因果」の「原因」が存在する攻撃ダメージは、「今」で「結果」として「完結」することが決してない。特にそのエネルギーで殺されると、無限に死に

続ける。
まさに、アレこそ頂点に立つスタンド、と言えなくもない。「今を超え進化した精神」である「未来の意識」（・・・そう、まさに未来の意識と言える）は、「今」の世界のいかなる生物の「精神力」及びその「スタンド能力」も超えた「精神の高み」にある、と私は考えたのだ。

いくつものスタンドの種類こそあれど、その実、能力は似通っていなくもない。
ミスタというヤツの「セックス・ピストルズ」は弾丸の軌道を操作するが、それに似た、かつて「エンペラー」と呼ばれた拳銃のスタンドがあったそうだ。その「エンペラー」のスタンド使いの相方は「ハングドマン」という鏡の反射を利用するスタンドを扱っていたらしいが、私を裏切った暗殺チームの一人が「マン・イン・ザ・ミラー」という鏡の中に世界を作り出すスタンド使いだった。

スタンドは、自身の精神エネルギーに過ぎず、あくまで各個人特有の能力が発現する。そのスタンド能力に似通った部分が見受けられるというのなら。それこそ、王には王の、料理人には料理人のスタンドが発現するのでは、ないか。

時を操る能力は、この世の頂点に君臨するスタンドの特異性だ。
キング・クリムゾンは、間違いなくそこに名を連ねる資格がある。

――最近、よく考えるようになった。
最近、よく考えていた。
最近、という表現が正しくない状況で。
・・・どこからどこまでが、人間の境界なのか――

ディアボロは現在、少々の驚きを感じつつ慧音の後を歩いている。
・・・ここ、幻想郷では夜道を歩けば妖精が飛んでくるのも、そう珍しいことではない。
「・・・」
慧音が腕を振るう、その度に近づいてきた妖精が弾かれ地面に落ちる。
――片方の手の中指を内側に丸め、それを親指で抑える。中指に指を伸ばそうとする力を入れ、親指を離す。張り詰めた中指は親指を離れ、外側に向かって勢いよく飛び出す――

俗に言うデコピン。妖精とはいえ子供ほどはあるが、ものともせずに蹴散らしていく。それでいて歩調は常に一定である。

妖精無双をかましつつ、そんな彼女がディアボロに声をかけた。

「そろそろ目的地だ。怪我は・・・なさそうだな」

「ああ、おかげさまでな。感謝するよ」

彼女の話では「異変」とやらの時にはもう少し活発になる妖精も、特になにもない今宵には人差し指一本で事足りる。

スタンドを出す必要もなく、ディアボロは悠揚と歩を勧めることができていた。

「それで、その妹紅と輝夜の二人はこんな時間にいったい何をやっているんだ？」

木に結構な勢いでぶつかって動かなくなった、通算二十六人目の妖精を尻目に、彼が声をかけた。

「ん？いや、まあ・・・な」

若干、その妖精を気にしていた風な慧音が言葉尻を濁す。

「私には、正直宇宙人の思考というヤツが理解し切れていないし・・・妹紅も妹紅で、ああ見えて優に千は歳を重ねているからな・・・」

伸びた腕が中途な位置で止まっている。新たな妖精（エモノ）に飢えている、というわけではないようだ。

「常人には理解しきれないのかもしれないが・・・。
アイツらはこの先の竹林で―――お互いに、殺し合いをしているんだ」

幻想郷において、竹林の言葉が指すのは一箇所しかない。
ただ、その竹林。原理は知れ渡っていないが、入ったものを迷わせるという結果のみは幻想郷の常識となっている。
名は体を表すと言うか、安直な方が分かりやすいということなのか、付いた名も迷いの竹林。ただ、ここによく出入りする蓬莱人なんかは地形を覚えているようだし、案外迷うのも人間だけなのかもしれない。

その竹林の入り口で慧音にここで待っていてくれ、万が一があったらお前も困る、私も困る、皆困る、と言われディアボロは立っていた。
あえてその心情を吐露するならば、暇だった。・・・もちろん彼は人間である以上迷うのだが。

「・・・。迷っちゃったわねー・・・って、あら？」
そんな彼のところに、ガサガサと竹を掻き分けて永遠と須臾の罪人が・・・一人、現れた。

拳で語る、言葉で語らない　その？（後書き）

今回（特に冒頭）原作を読んでいないと理解できないですね、ハハッ・・・。一応内容はキャラ紹介で説明されている部分ですので、それを読み飛ばしていて「今回意味わかんねーぜ！」となっている人がいるならそこ読めば大丈夫。きっと。

更新が遅れに遅れ。月をまたぐと大して開いてないように思える不思議！

・・・ごめんなさい、たぶん人里編が終わるまでこんな調子です。

そして短けー！・・・み、短けーね！・・・ごめんなさい。

拳で語る、言葉で語らない　その？（前書き）

負けない。曲げない。訊かない。舞えない。吹かない。見えない。泣けない。飽かない。紅かない。生きない。死なない。逝かない。

———語る。

拳で語る、言葉で語らない　その？

「妹紅ー？」

きょろきょろ、と首を振って辺りを見渡す。

その周囲の竹は、根元から吹き飛んでいると思えば完全に炭化しているような物まで無秩序にひしめいており、何が起こったかは容易にはわからないが何かが起きたことだけはわかる、そんな有様だった。

クレーター状に穿たれ、ところどころからは今だ白煙が立ち上る地べたを歩く慧音にとっては、ことさら騒ぎ立てるほどでもないぐらいには見慣れた光景だったが。

「・・・と、そこか。

ほら、妹紅。起きろー服着ろー」

この惨状の原因の片割れが気を失って倒れているのを見つけ、頬を軽くはたいて声をかけ手にした服を差し出す。

蓬莱人は、禁断の秘薬によって存在が魂に依存しているのだ。肉体が消し飛んだりした場合、魂が肉体を再生する。ただ、着用している服なんかは諦めなければならないのだが。

「・・・ん・・・・・・。慧音か」

「相変わらずだな、お互いに」

ゆらっと立ち上がって土くれを払う妹紅に、辺りの竹を眺めながら慧音が苦笑を投げかける。既に何度も行われたやり取りらしい。

「あー・・・まあ、な。あはは・・・」
微妙に反論し辛そうに髪に手をやりながら、着替えた妹紅が二、三歩その場を動く。
ふらふらと定まらない足取りは、いまさらこの話題に触れられるのは・・・という意図が見え隠れするが、しかし慧音はあくまで静態して言う。

「妹紅。
・・・いつまで、こんなことを」
「ん？・・・あちゃあ。
慧音、私アイツちょっと苦手なんだよなぁ・・・。相手しててくれるか？」

妹紅は何者かの接近を知覚したらしく、慧音の言葉をさえぎって帰路へ足を向けた。お願いは決定事項らしい。

「て、おい・・・」
「食事の用意はしとくからさ、頼んだ！」

二の句を言われる前に、と妹紅が駆け出す。
追おうとする慧音だったが、彼女も近づいてくる気配を感じ、無下にするのも・・・と葛藤しているうちに件の人物が登場した。

「あら、貴方は」

八意永琳（やごころえいりん）。
元々月面に生きる月の民と呼ばれる種族だった彼女は、今は訳あって輝夜と共に地上に住んでいる。

赤い十字の入った黒いナースキャップのような帽子と、星座を模した様な刺繍の赤と青で半面ずつ分けられた装い。その手に持った包みから察するにまだ輝夜を見つけてはいないようだ。

「こんばんわだな、八意」
「ええ、こんばんわ慧音先生。
――今見えたのは妹紅かしら？」
「ああ、そうだ」
「だとしたら姫もこの辺りのはずなんだけど・・・。その顔は見なかったようね」
「私が見たのは、ここに倒れていた妹紅だけだったな。輝夜はいなかった」

あらあら困ったわ・・・と永琳が頬に手を添える。言葉と裏腹に、その言動は軽い。

「いくら邪魔されたくないと言われても、見当たらなくなるのなら最初から永遠亭の庭ででもやってほしいものだけど」
「・・・私は、こんな不毛な事は止めて欲しいんだがな」

どこか愚痴るように、慧音が言う。
喧嘩する当人達に、お互い近しい立場だから――という思いもあったのだろうか。

歴史喰いの彼女にすらわからない――永い永い時を生きる永琳は、深く微笑む。

「心配なの？」
「いや、心配というよりは・・・」
「・・・不安、かしらね？」

さらっ、と言ってのける永琳。
彼女の笑みとは対照的に、慧音の唇はどんどんへの字に曲がっていく。

「・・・・・・」
「まあ、あんまりお説教臭くなるのもあれだしね。
姫も未だ裸でいる可能性も否定できないし、私はこれで」
それじゃあね、と言い掛けて、
「そうそう。次に人里に薬を売りに行くときには弟子と一緒に私も顔を出すから、その旨を伝えておいてくれないかしら？」
と伝言を託した。
そして、妹紅の向かった方向とは微妙に違う・・・慧音が来た道へと歩き出す。

「・・・ああ」
気の抜けた声で、慧音がその背に返した。
何気に二人から厄介事を押し付けられていなくも無い。

（・・・そう、私は姫が薬を飲むのを止められなかった。
永遠という罪を重ねることとなる、蓬莱の禁薬。・・・生成を手がけたのは私だけど、彼女の能力なくしては完成は難しかったでしょ

う）

いかな永琳が『あらゆる薬を作る程度の能力』を保持していても、輝夜の『永遠と須臾を操る程度の能力』での協力がなければ完成には漕ぎ着けなかったであろう秘薬。それが「蓬莱の薬」。

史実では、かぐや姫が天へと帰郷する際地上に忘れ形見として遺した物の一つであるが、時の帝は「彼女のいないこの世で不老不死を得たところで何になろう」とその薬を一番高い山のその頂上で焼くように命じた。・・・その煙は、あたかも月まで届くかのようだったという。

後の富士山（不死山）で失われたはずの薬。ただ、それが「在った」というのならまた、作成も可能のはずではある。

（そう思うと、姫がそれを服用するのはある種必然と呼べるのかもしれないけれど）

後世に伝わる人々の心を慰める物語としてはそれで終い・・・だが、この姫様はやって来た月の使者を永琳と共に皆殺しにしそのまま逃亡を続けていたのだった。

・・・幻想郷に辿り着くまでは。

（・・・別にどうでもいいことかしらね。

私は、仕えていればそれでいい）

そして、かぐや姫の五人の求婚者の一人を父に持つ藤原妹紅は、辱しめられた父の復讐の為帝に贈られた薬を自身が服用し、輝夜を殺そうとしているわけだ。

理由は、それだけ――――。

もっとも、今でもそうであるかは本人以外知る由もないことだが。

（それに比べると、彼女の葛藤はとても好ましく感じられる――――。別れるのが、死ぬのが怖い。それは生物として、とても当たり前のことだもの。半獣として、少しは妖怪に近くても・・・いえ、一歩はみ出ているからこそ、より意識してしまうのでしょう。意識が理解を拒んでいる様でもあったけど・・・ふふ）

彼女の足が向かう先、慧音が来た方向という事は当然彼がいる。

（その悩みが、苦悩が、『生きる』ということ――――。まあ、ゆっくり見守りましょう）

ちょっとお節介かしらね、と一人ごちる。

（まあ、彼女達は一旦おいておくとして。

・・・まだ早い、わね）

呟いて、それでも変わらぬ足取りは、もちろん姫を迎えに行く為だ。

――――だが、まだ早い。

今行っても、大した結果にはなるまい。

（――――せっかく、八雲紫の所の人間が近くに来たのだもの。これが、姫にとってどうなるかまではわからないけれど・・・。

『変わる』。蓬莱人には、似合わない言葉かしらね・・・？）

八意永琳。
かつて「月の頭脳」とまで謳われたその魂胆は、人間如きには理解できない――――。

「にゃー」
「みぃ・・・」
「だーかーらー！あの子を探してみて欲しいの！」

辺りから少し開けた、とある山腹。
臙脂色の中国服に身を隠した、一人の少女がいた。

「ぎぎぃ」
「びぁぁ」

そして、彼女を囲むような大量の猫、猫、猫。
どうも、何かを伝えようとしてはいるようだが結果があまり芳しくないようだ。

猫と意思疎通を図る少女がごく自然にいるのもまた、幻想郷。

「もぅううう！わかってよー！」

拳で語る、言葉で語らない　その？（後書き）

蓬莱人の服は再生の際に一緒に直るのか。直らないと不便だろうとは思いますが直らないということで、今回は書き上げました。

拳で語る、言葉で語らない　その？（前書き）

一人では怖くても。あなたと一緒なら、今一歩飛び出せる。
飛び出せる・・・飛び越える。運命を、過去を。
例え足元に深淵が広がっていたとしても―――『生きる』事には、
大差ない。

拳で語る、言葉で語らない　その？

ここで、慧音が竹林に足を踏み入れた時まで話は遡る。

・・・痩躯な人影とやや小柄な人影が、各々一つずつ。

「服を殺し合いの前に近くに隠しておいてね、永琳が来る前にちょっとだけ散歩でも洒落込もうと思ったのよ」

目下話しているのが、蓬莱山輝夜（ほうらいさんかぐや）。禁忌の秘薬の服用により月を追われ、地上で逃亡生活を送る永遠のお姫様。

「本当にやっていたのか・・・そんな物騒な事を」

合いの手を入れるのは、目線の高さゆえどうしてもやや見下してしまうディアボロ。

竹やぶの中から現れた彼女が、慧音の探し人と殺しあっていた人物と分かり少々構えてしまう。

「いやぁ・・・まあ、一から十まで説明しちゃうとあれなんだけど」

あははー、と微妙に反論し辛そうに髪に手をやりながら輝夜が苦笑いをこぼす。

「ええと・・・。

妹紅をねじふせて、心臓を抉ったところまでは覚えてるんだけどそ

のまま焼き殺されて相打ちになったんじゃないかしら。いくら蓬莱人とはいえ無限の体力を持っているわけでもないしね」
「それは・・・・・・」
「ええそうよ、ディアボロ」
輝夜はなんてこと無いように言った。
「私達はアナタと同じ。
・・・いえ、むしろアナタが私達蓬莱人と同じ、死なない人間なのよ」
「・・・ふむ」
合点がいった、というようにディアボロが相槌を打つ。
「なら、何故私の事までわかったんだ？」
「あら、慧音から聞いてなかったの？
私の能力は『永遠と須臾を操る程度の能力』。・・・共鳴？そんな感じ。感覚でわかるわ」
「・・・・・・なら、『相手を永遠に殺し続ける』・・・なんて事は、できるのか？」
唐突といえばあまりにも唐突な、ディアボロの質問。
やや眉をひそめながらも、輝夜はそれに応じた。
「・・・んん？蓬莱の薬なら作った事はあるけど、そんな事はさすがにないし・・・」
それこそ「須臾」に考え、彼女は答えた。
「・・・そうね、”できるけどやらない”。そんなところかしら。

・・・でもどうして？」
「いやなに。・・・ちょっとした、好奇心というやつだ」
幾ばくかの、好奇心。
・・・少しだけの。
「ふーん・・・。
ねえ、それよりディアボロの方はどうなの？能力は別にあるんでしょう？」
「ああ。・・・そうだな」
言って彼は後ろに後ずさる。
一歩。右足を下げる。
「後ろの竹まで、後何歩といったところだ？七歩か？」
二歩。左足が動く。
「・・・・・・」
輝夜が静かに見守る中、三歩目・・・彼は右足を出した。
……
その背に竹を背負って。
「これが我がキング・クリムゾンの能力・・・。
時間を『消し飛ばし』、『飛び越えさせた』」

・・・しかし。

時間を飛び越えさせる――――そう、まさに飛び越え『させる』能力。
爆破させるのでもなく。
加速させるのでもなく。
戻すのでもなく。
止めるのでもなく――――飛び越えさせる能力。

世界から時間を切り離す、消滅させる。その「時間」に限界はあるけれど。
自分から干渉ができず。むしろ不干渉こそを下地とするようで。

――――下地。
素質、天性。・・・・・・生まれついてのもの。

「・・・やはり素晴らしいわね、人間って」
目を伏せ、短く嘆息した輝夜はそうもらした。
「・・・・・・・」
ディアボロは彼女と対照的に月を見上げる。

その光を隠す雲。彼の能力は、雲自身が千切れ飛んだ瞬間を認識する事すら許さない。

「――――妹紅は止めないと思うわ。少なくても今のままでは」
「・・・殺し合いを、か」
「ええそうよ。
・・・私に分かるのはアナタが死なないという『結果』であって、どうしてそうなったかなんて知らないし、知るべきでもない」

彼女が語る、頭が揺れる。
揺れる動きに合わせ、その髪も揺れる揺れる動く。

「その人が今ここにいる、それには必ず”下地”というものがある。以前女性に痛い目に合わされたから警戒心を抱いてしまうだとか、幼少期に周囲の大人が反面教師となって常に人には優しくしようと心がけているだとかすべては過去の下地、経験から人は形作られている。だから人を語るということは、難しいことなんだと私は思っているわ。
殺し合いをしています――――なんて一口にそう言うのは簡単だし、”それはいけない！”と否定することだって容易いわ。でも、”じゃあどうして殺し合いを日常的に繰り返しているのか”を考えて欲しいのよ」

すっ、とディアボロが顔を戻した。輝夜も、面をあげる。

「妹紅の、私にぶつける感情は強い憎しみ。・・・個人的にはお門違いもいいところだとは思っているのだけどね。
アナタも経験はあるんじゃないかしら？なんにせよ一つの感情を強く持ち続けるというのは、とても疲れる事。・・・とても、とても」

想像以上に根深い憎悪の歴史。千の年月で積み重ねた、両者の血生臭い関係。

「・・・・・・そう、か」

「ええ。まあ、そういうこと」

交差する二人の視線。

ディアボロは、彼女の眼差しの奥の色を少しだけ理解した。そして輝夜の瞳は好奇に彩られる。

「ねえ、自己紹介って大切なのよ？」

「――まあ、今更だがな」

（ここ数日間で、随分とスタンド能力を説明している気がするな――）

「・・・以前には、知った者は例外なく殺してきたのにな」

・・・己の手を見つめる。自分のスタンドが浮かんだ。

その紅（あか）を、握り締めた。

「え？」

「ふむ・・・そこから説明しようか。

私はかつてあるギャング組織のボスだった。その立場を守る為に、私の能力どころか正体を知った者は皆殺してきたんだ。

そして、新入りとその仲間達に殺されその能力で永遠に死に続けていたところを、先程言ったように紫に救われたんだ」

「成程ね。

・・・どう？今度二人で、そのときの反省を生かして新しいギャングでも作ってみる？」
「・・・いくら頂点が清い意志を掲げていたところで組織自体が”悪”なんだ。
私自身そのころは”悪”でしかなかった。そんなこと、冗談でも言わないでくれ」
「ふーん・・・。あ、でもアンタを倒したのは組織の新入りだったんでしょ？
そいつ自身は潰すために入ったのだとしても、協力した他のやつもいい人間だったんじゃない？」
「輝夜、私は人格がどうこうという話をしているんじゃない。ギャングとは、突き詰めるとただの”暴力”なんだ。
組織的な力を持っている”暴力”は、最初から存在してはいけないと私は思うのだよ。
・・・私がかつて暗殺者として使っていた男は１４の時、いとこの子供が酒に酔ったやつの過失で・・・死んだらしい。
人間の世界の法はたいした罰を与えず、結局４年後そいつ自身が暗殺し、その後そのまま暗殺者として我が組織の下、生きていったのだ。暴力は、容易く悲劇を生んでしまう」
「・・・ちょっと軽率な言葉だったわね、ディアボロ。謝るわ」
「わかってくれれば、それでいいんだ」

黒いことは、黒いことに関わってきた者に。
なればこそ、彼は輝夜たちに殺し合いなんて止めて欲しかった。

――――いいか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・恐怖というものは打ち砕かなくてはならないのだ！
それは今なのだ・・・今！絶対に乗り越えなくてはならない！
それが『生きる』という事なのだッ！――――

（・・・？オレは、そんなことを以前誰かに・・・話した、ことが・・・・・・・・・）

ふと彼の内側に湧き出た一小節。だがすぐに注意を輝夜に向けなおす。
どうせなら、聞いておきたいこともある。

「話は少しずれるが・・・。
輝夜、人間の精神活動には限界があるな？」

・・・これは例えば、の話だが。

食事などの生存の条件の心配が一切ない空間に人間を閉じ込めたらどうなるか。
まあ、最後には発狂するだろう。では、観察者がその直前に開放したらどうなるか。
まずその経験を経て人格が変わる。糧となる。
そんなことを体験して、まず以前と同じでいられる者などいないだろう。
それこそ、人間からはみ出している。

「・・・ええ、まあ死だとか物理的な側面を抜きにしたって、人間の精神活動には自ずと限界が定められるわね」
「そう。様々な理由によって人間の思考は自ずと限界に立ち塞がられる。
・・・だが、決め付けてはいけないんだ。限界へと辿り着けない理由があるがゆえに、それがゆえに人間の思考自体に限界はない」

数え切れない時間の体験、その上に積み重なる思考。
人間から、はみ出す。

「では、その思考の果て。この私はなんなんだと思う？」
思う、と疑問を投げかける。

「・・・どっちだって、同じ事でしょう？」

永遠と須臾の罪人は、そういって小首を傾げた。

「私には、アナタも妹紅もどうしてそう悩むのか理解に苦しむわ」
「・・・そうか」
「それよりも、念の為能力を使ってはみたんだけど・・・。
その新入りさんの能力、その影響の残滓。・・・・・少なくとも私に解除はできないわね」
「いや、それに関しては追々考えるさ。まだ、やるべきことが・・・山積みなものでね」

――――このジョルノ・ジョバーナの能力・・・。以前にはブチャラティをこの世に留め、今度はオレをも縛り付けるというわけか。

ディアボロは、異世界においても意識させられる彼らとの奇妙な因縁・・・。

それを、何故だか少しだけ・・・嬉しく思った。

拳で語る、言葉で語らない　その？（後書き）

当初の予定では、永遠に死に続けた経験がキング・クリムゾンを新たな高みへ押し上げる――――みたいなことも考えてはいました。原作でＤＩＯが海底で１００年眠ってアレなら、ディアボロはもっといけるだろ！と。

結局は不死化に落ち着いていますが、Ｇ・Ｅ・Ｒのエネルギーとキング・クリムゾンとで「キング・クリムゾン・レクイエム！！」なんて事も予定になくはなかったです。裂けるその？でのレミリアのセリフはその名残。

手を翳し、透かして覗いた背負う者（前書き）

「持てないから捨てようとしました」
「捨てようとして捨てられませんでした」
「捨てられなくて捨てられました」

手を翳し、透かして覗いた背負う者

あの場を離れたはいいが、慧音の家に行くわけでもなく、妹紅は何となく足の向くままに歩いている。

「永琳は、なぁ・・・。なんか底が知れないっていうか・・・・・・なんなんだろうなぁ・・・」

がががと頭を掻いてひとしきり唸り、竹林を当て所なく彷徨いながら先程の自身の行動を省みていた。永遠亭の妖怪兎はよく竹林に出没するが、今このとき彼女に視線を送る者はいない。

微妙に青臭い竹独特の匂いの中、ざっざっと地を踏みしめる音だけが響いていく。

ゆるゆるとぬるい微風が吹き抜ける。どこかで鳴禽の鳴き声が聞こえた。

―――足どりが、止まる。

揺れる竹の影が重なってより月明かりが際立つ、ただそれだけのなんてことのない場所。止まった彼女の足元の一輪、それすらもなんてこともなく咲き誇るだけ。

彼女はそこで歩みを已(や)め、代わりのように上を見上げた。

蓬莱(へんい)薬の結果であるその赤い眼球にも、月は無条件に偽りの光を与える。温もりのないそれは、誰かが捨てた故郷(げんきょう)。

「――――」

呆けたように空を覗き込む彼女の顔を、その光はただただ柔らかく

照らすだけ。

冷たく照らす、だけ。

「結局、何を話していたんだっけ？」

「私も目的を見失った気がするな」

永遠の民だった蓬莱山輝夜と、永遠に死に続けた帝王であるディアボロは、さっきまでを互いに益体も無い話だったと振り返った。

そこで突然、

「まあとりあえず、うち（永遠亭）に来なさい」

くいっ、と自分の背後を親指で指し妙に挑発的に、語り継がれる傾国の美女はそう言い放った。

「そして私の暇つぶしの相手をなさいな」

続けて己の私情（わがまま）を要求し、言いたい事はそれだけだと言わんばかり

に顔をしかめてみせる。
その頬が微妙に赤いのは、時勢を反映したからか。

「・・・。
すまないが、それはできない」

多くを語る必要もない、とディアボロはそれだけを言って口を閉じた。

かつては求婚してきた五人の男共に、難題という名の遠回しな拒否を叩きつけた彼女もこうなるのは仕方ない、というか、生まれ育ったイタリアというお国柄とかつての経済性、社会的地位と三拍子揃ってしまっている彼には、ほいほいと安請け合いさせることは困難だった。

「なんでよー。自分で言うのもなんだけれど、たまのお客様は大切に扱うわよ？」

「――――？　咲夜、呼んだかしら？」
「いいえ？　気のせいではないですか、レミリアお嬢様」

「心惹かれる提案だな。特にこんな美しい女性に誘われると」
「あら、お上手ね？
・・・うちの従者がねえ。心配してくれるのは嬉しいんだけど、さすがに気が滅入っちゃうわ」

ほほえむディアボロに愚痴るようにこぼす彼女は、その容姿相応に咲き誇る沈丁花。

男を狂わせる魔性、というよりも「城、傾いちゃっていいかな」と思わせる類のものだ。

なあ、と彼は続けた。

「後ろの貴方もそう思うだろう？」

どう永琳に紹介するのがベストか、という問題を処理していた私の脳内は、だからディアボロの言葉に「へっ？」と呆けた返事しか返せなかった。

そして後ろの木々の奥から本当に永琳が出てきて、獲らぬ狸の・・・と呟く。

まずい。

このままでは二人が大人なやり取りを経て無難にまとまってしまう。ここで彼を泣き落としてでも連れて帰ることに成功していれば、いまだに追っ手を警戒している永琳でも無下にはできないだろう、という私の計画がご破算になる。実にまずい。

「おや、よくわかりましたね」

「私の能力、とでも思ってくれ」

そもそも私がなんでこんなに暇を潰す為に腐心しているかといえば自由に出してもらえないからで深窓の令嬢といえば聞こえはいいけ

どそんなの姫と呼べるのというかそれこそ御伽噺だとそこから助けだす王子様がいるけどここにそんな都合のいい幻想がないから私から行動を起こしているんじゃないのとかイナバたちは人里まで行っているって月の追っ手からしてみれば私だろうと玉兎だろうと変わりないんじゃないのとかそりゃたしかに永琳からしてみれば私は年端もいかないのかもしれないけどこんな扱いはないんじゃないのとかせめて妹紅との関係に口出しはしないで欲しいわとか――――

「失礼をいたしましたね。私は八意永琳、姫の従者を務めております。どうぞお見知りおきください」

「これは丁重な挨拶痛み入る。

私はディアボロ。現在八雲のところに厄介になっている者だ」

その輝夜の胸から、黒い「闇」が飛び出た。

「えっ・・・？」

笑顔の欠片のようなものを浮かべたまま、ゆっくりと前のめりに倒れる輝夜。

「輝夜ッ！！」

ディアボロと永琳の声が重なり、竹林の視界を支配している闇の中へ消えていった。叫んだ声の反響も消えぬうちに、永琳が彼女の肩を押さえ地面につくのを防いだ。そして胸空の闇をディアボロがスタンドと共に殴り、霧散させる。

「八意、彼女は・・・」
「蓬莱人なのだから大丈夫、気絶しているだけよ！」
輝夜を抱きかかえて、彼女は周囲に視線をめぐらせた。その言葉を受けディアボロはスタンド像の全体をあらわにする。
「――――墓碑銘（エピタフ）ッ！！」
彼の能力は、数秒後の未来を正確に映し出した。
輝夜を襲った闇が、今度は彼の背後から大量に飛んでくる未来を知覚したディアボロは、八意ッ！　と叫んだ。
「私の能力を発動する！　できるだけこの場から離れるように意識しながら走れ！！」
聞くが早いかワンモーションで輝夜を抱えた永琳が彼に背を向けて走る、それを見て発動させる真の能力。
「キング・クリムゾン！！」
世界から時間が消し飛ぶ。存在しない時間の中で、彼と永琳を闇が貫通していく。
彼女らが離れたのを確認して、ディアボロは襲撃者を確認する為に振り向いた。
何も見えなかった。
「なッ・・・これは・・・・・・？」

正確に表現するなら、視界一杯にある黒で夜と闇の区別がつかないのだ。

生物だとか黒いプラスチックのような質感もない、とらえどころない輪郭はまさしく闇としか言えず。ただ、常に流動するそれの奥に、金髪の少女が垣間見えた。

黒いベストとスカート、白いフランネレットの襟の間には鬼灯(ほおずき)のような赤を飾り、同じく赤い靴を踏み出し歩いている・・・ようだ。

不愉快そうにしかめた眉と、その下にある無感動そうな赤い瞳。最近まで何かをつけていたのか、髪の一部が癖になっている。

目的などなさそうな足取りはどんどん竹林を進むが、物理的にそれが止められはしない。彼女の障害はとにかく片端から闇に蹴散らされていくからだ。

さきほど攻撃した者の行方すら気にしていない。それとも仕掛けたことにすら気がついていないのか。

（・・・・・・。

能力の大体のところの見当はついた。その上、本体の姿も確認できたしな）

観察時間そのものは数秒、発動から３３秒まで時間を消し飛ばした段階で、彼は一旦永琳たちに合流することにした。

まだまだ時間を消せるスタンドパワーを感じ、慌てず歩き出す。

「・・・・・・」

一度だけ、振り返った。

名も知らぬそいつの、その表情の理由だけが・・・少々気に掛かっ

て。

なぜだろう。月の光というやつは、太陽よりもよほど揺るぎ無く感じられる。
なぜだろう。

――ゆらゆら、と揺れていた。敷居を越えた私が、
――腰砕けて膝をついた。すぐにでもその場を離れたかったけど、
――それがぐしゃ、と感触を伝えた。父の下腹部からはみ出た臓腑、血が足元の畳をぬらしていて、

月明かりに目が眩んだ。

――所詮人ならぬこの身。
人並みな幸せ、なんてそれこそ掴める筈ないって覚悟を決めていた。
と思っていた。
深呼吸のつもりで留まった村では、大体五年で追われた。人は人外に敏感だった。

去った地のいくつかは火にまかれた。私はしらない。大方山火事か何かだろう――

目を曇らせる月を見上げた。

・・・夜でも昼でも、私には大した違いじゃない。
だけど、なぜか足は闇の中を進んだ。
夜では人に会う機会もなかった。否、作らなかった。
だけど一人行く道の暗さは、父の末期の顔を呼び起こした。だから月を見上げるのかも、しれない。

塵が入った。涙が零れた。

今はいる。あいつがいる。
お互いの存在に立脚するかのように在る、私たち。
私の右腕はあいつの左腕で、あいつの左腕は私の右腕。流す血の一滴、叫ぶ悲鳴の残滓まで全てが二人のものだ。
端のない盤で碁を行うようなものだ。途中離脱のできない遊戯で、赤か赤かを決める遊び。もちろん勝つのは私たちで、負けるのがあいつたち。

――ああ、生とはなんて素晴らしいのだろう――

手を翳し、透かして覗いた背負う者（後書き）

二次作品の影響で妹紅の口調が男っぽいです。原作のあの喋り方も結構好きなんですがね、精々自称が「私」ぐらいしかその片鱗がないというね。

誰かのために　その？（前書き）

怪奇の独奏。
怪奇怪奇の二重奏。怪奇怪奇怪奇の三重奏。怪奇怪奇怪奇怪奇の四重奏。
誰にも、聞こえない。

誰かのために　その？

幻想郷には、その名が示すとおり人間以外にも妖怪、妖精、あげく神などの『非常識』な者たちが住む場所である。

創立の際に幻想郷には結界が張られ、陸続きながらも外の世界とはまったく異なって存在している、と言われている。どこからどこまでが厳密に幻想郷だ、という区分はなく、わかるとしても創立の立役者、我らが妖怪の賢者ぐらいにしかわからないだろう。

しかし、いくら幻想に生きる地とはいえ、人間はそう簡単には種族の限界を超越できない。一部では他人と離れて暮らす人間もいるが、大多数の人間は人里と呼ばれる場所で日々生活をしており、幻想郷で「里」と言えば普通この人間の里の事を指す。

――――翼を持つ者、または持たない者が空から俯瞰すると、人里は丁度迷いの竹林と魔法の森とに挟まれた場所に広がっているように見える。最近では昼夜を問わず人妖を問わず、活気に満ち満ちており、茶屋の珈琲豆を狙う妖精がいたり豆腐屋で油揚げを所望する妖怪がいたりする。カフェーで人気の新聞は天狗が発行したものであり、酒場で酒を求めるのも人間ばかりではない。主に妖怪に客層を絞った店もあるし、逆に妖怪が人間相手に商売をしている時もある。

妖怪の存在は、ここではまったくの常識。

その人里の東側には魔法の森と呼ばれる樹海がある。人の手などまったく入っていない原生林――そのさらに東の方向、幻想郷の端。周囲から一段と高く生える鎮守の森の中の、さらに幻想郷を一望する事ができる博麗神社は、幻想郷において最も重要と言っても過言ではない。

妖怪の怖さを知らない幼子でも「博麗」の名は知っている。そもそもの神社が妖怪の入り浸る人外の巣窟となってしまっていても、

母は子に「博麗は妖怪から人間を守護する者」と耳に中耳炎ができるほど言い聞かせるからだ。人と妖怪、その両者の拮抗を保つ存在。それが博麗の役割とされる。

現在幻想郷では「スペルカード」と言う名の、形骸化した人間と妖怪の争う関係を模した決闘ルールが決まっており、それを制定したのも博麗。

そして、例えば『箱の中身』が存在するには仕切るものが必要だが、この幻想郷という箱庭を仕切る大結界の管理も博麗。

また、博麗がそういった直接的な危機の抑止力ならばその対……とまではいかずとも、『知』の集積として「稗田家」という名家が人里にある。

初代稗田阿礼（ひえだのあれい）より代を重ねて早千年もの間、稗田家の当主が転生を繰り返し書き綴ってきた「幻想郷縁起」。それによると大結界は幻想郷存続のために張られたものであるとか。

その記述の張本人である九代目当主は、「容易に行けないからこそ、現在の状況が伝わらなくて済んでいるとも言えます」とも答えている。信仰低下の要因である交通の便の悪さが、妖怪だらけの現状を覆い隠している、というのだ。――この場合、何が最善なのだろうか。

ともあれ。

その九代目阿礼乙女、現当主である稗田阿求（あきゅう）は、今の幻想郷自体はそう悲観すべきでないとも言う。

人と妖怪。

今では妖怪が実際に人を襲った話など滅多に聞かない。それだけ、お互いが分を弁えている結果である。

妖怪が人を食らわないならば、当然交友を結ぶ例だってあるだろう。

普通、転生などしたら、周囲の人間は皆死んでしまっている。あまり例のない話なので断言は避けるべきだが、少なくとも稗田の転生には百数年の間隔があり、その間地獄の元で働く事で転生を許さ

れている。
しかし妖怪は違う。
妖怪なら何百年と生き続けるのはざらだ。転生しても、同じ顔ぶれに出会うことができる。
今の幻想郷は、転生への恐怖と孤独も和らげるのだ。
「友人とはいえ、団欒なんかはあちらから訪ねて貰わないと話す事すらままならない。ちょっと待て、と愚痴の一つでもこぼれてしまうというものです」
――との事だが。

「……失礼します」
その、稗田のお屋敷に今、妖怪の八雲紫が訪れていた。
珍しくもない畳敷きの一間で、使用人が突然の来訪者に戸惑うような仕草で卓子に紅茶を置く。
「どうもありがとうございます、ね」
とある半人から「人間ではない者特有の鋭い目をしている」とされた茶色い瞳が、その使用人ににっこりと微笑んでみせる。萎縮した様に「はぁ……」と使用人が生返事をして、阿求に下がっていてください、と言われると、そそくさと退去してしまった。
「やあねぇ。自分の事ながら、随分な事ね」
明らかに恐れ慄いているような阿求の使用人の態度に、しかし紫は気を悪くした様子もなくくすくすと笑って言った。申し訳ありません、と阿求が言うと、「いいのいいの。妖怪は怖がられてこそ、よ」と返す。
お互いに机を挟んで向き合っているが、着物の阿求に対し紫色の洋服を纏う紫は正座する姿に違和感を覚える。二人が口に運ぶ紅茶でいえば、今度は阿求の方に目がいくのだが。
「……それでですね」

世間話もそこそこに、一旦紅茶のカップを卓に置いて、阿求がそう切り出した。その詰め寄る様な気迫に紫が、何かしらとでも言うかのように片眉をひょい、と上げる。
「件の紅茶館ですが……」
「“紅魔館”、ね」
彼女の言葉を、紫が静かに訂正する。
「失礼、そうでした。紅魔館」
いい間違えて、律儀に紅魔館、と言い直す。
「何でしたっけ、それ。彼がそう言っていたのかしら」
「ええ、そうですね。……まあその影響だと、はっきり認めたくはないですが」
求聞持の能力でありながら……と、阿求が口惜しげに紅茶を嚥下する、そんな彼女を、紫は微笑みながら見つめていた。
「……で、です。紅魔館。まあそれ自体に直接関係があるわけではないのですが」
そこで阿求が言葉を切って、重々しげに言った。
「――――『悪魔』があなたの所に居る、とか」
「あら。耳が早い事。まったく、どこから聞いてくるのかしらね」
「ほら、あれです、“文々。新聞”の文さんに聞きまして。仕事柄、割と結構お話しする機会があるものですから」
「ああ、あの……そうか、『悪魔』の姉の方と仲がよかったわね、そういえば」
頬に指を当てて考え込む仕草をしていた紫が、合点がいったように頷いた。
「……そうね」
何から話せばよいのか。
そんな風に考えていた紫が、どこから取り出したものか扇子を閉じたまま唇に当てる。
「今から話す事全て、明日になったら忘れてしまうというのは？」
「無理な相談ですね。特に私にとって」

「まあそうでしょうね。――長い、長い永い話になるけど」
少なくともこれのお茶請けになるような内容ではない、と紫が手元のカップに目をやる。
「ええ、構いませんよ」
そんな紫に阿求が真面目ぶった顔で返すが、けれどもその声にどこか期待を込め。
紫を、正面から見る。
「……まあ、いいでしょう。これはもう、終わってしまった話なのだし」

それは世界に排除される宿命と、世界を排除する力を持つ者。
それは邪悪に染まる宿命と、世界を邪悪に染める力を持つ者。
これより彼女が語るのはそんな、終わってしまった物語。

「無事か、八意。それに輝夜は……」
ディアボロが話しかけたのは、竹薮の中で膝立ちになる八意永琳と、その膝の上に抱えられている蓬莱山輝夜。そして、頭から長い耳を伸ばしている数人の少女たちだった。
突然の襲撃者から一旦逃走し彼女らを逃がしたディアボロは、合流のためにここまで駆けつけてきたのだ。
「――ディアボロね。輝夜は大丈夫よ、気を失っているだけ」
今だ目を閉じている輝夜に触診を行っていた永琳は、一瞬警戒して顔を上げる。それに呼応するように、周囲のウサミミ少女らがさっと二人を囲んで立った。しかし獣の性(サガ)は完全に拭えないようで、それぞれがその耳を怯えたように震わしている。
恐怖しながらもけなげに主を守らんとする彼女らに、永琳は安心するよう言った。彼は、味方だとも。
「――それで、ディアボロ。これからどうするの？」
壊れ物でも扱うかのように輝夜を抱き上げながら、永琳がそう訊ねた。
「私たちは、ひとまず逃げるけれど」
ウサギたちが慌てて彼女を支え、輝夜はさながら姫のように担がれる。そこで永琳が輝夜を手放して彼女らに任せ、先に永遠亭に戻ってて頂戴、と言った。
輝夜を担いだウサギたちは一様に統率の取れた足並みで去っていく。それを見届けた永琳は無造作に膝の土を払い、よいしょ、と折っていた膝を真っ直ぐに伸ばす。
永琳が立ち上がって、顔がディアボロを射るように見た。
「……『落とし穴』……と言えば、理解してもらえるかな？

例えで悪いんだが……」
　上着を靡かせて軽く膝を屈伸させ、ディアボロが奇妙なまでに腰を左に振りこむ。左手は腰に添え、王が愚者から差し出された貢ぎ物を無造作に受けるように、虚空へ右手を差し伸べる。
「未来という目の前に……ポッカリ開いた『落とし穴』があれば、塞がねばなるまい……？　私自身、輝夜とは先程が初対面だが……誰であろうと、他人をおびやかす『落とし穴』……それを、見過ごす事はできなくなったものでね。……貴方は先程のアレについて、何か……知らないか？」
「いいえ、残念ながら……」
　そのディアボロの問いに、至極残念そうな表情で永琳が答えた。
「そうか……まあ、もとより、輝夜の安否を確かめに来ただけだ――――慧音の事も気になるしな。私は、戻るよ」
「そう。――気をつける事、ね」
　何だか姫様が悲しむようだから、と永琳が呟く。
　それはこの会合で唯一彼女の口から出た、ディアボロを気遣うようにも聞こえる言葉だった。
　……それだけの、なんて事はない言葉。

「……ほう」
　彼女のような者が組織にいたら、なるほど便利だっただろう。そう思わせるほど迅速で、大切なものがわかっている女性だった、とディアボロは永琳の事を無意識にそう評価していた。
　先程の妖怪ウサギたちが走って行った方向へ、永琳が数歩歩くと突然掻き消えた。それを見ていたディアボロは、途中で途絶えている足跡や微弱ながらも途切れない足音、周囲の状況や植生、などと思考を巡らすが無用な詮索だとすぐさま打ち切る。
「……さて」

行くか、というように振り返り、踏み出したディアボロのその足に纏わりついてきた、何か。
「にゃーお」
「ん？」
訝ったディアボロが見下ろすと、足元から同じく見上げる青い瞳と視線が合った。三毛の子猫が、彼に甘えるようにもう一度「にゃーぉ……」と鳴いた。
しかし次の瞬間にはふいっ、と顔を背け歩き出してしまった。
「……」
その態度を見習うかのように、ディアボロもまた、無言のままに踵を返して歩き出す。
後に残ったのは、満月になりきれていない月明かりだけだった。

「ねえ藍」
湯気の立つ湯飲みを両手で包み込んだ少女が、どこか手持ち無沙汰といった表情をしている女性に声をかけた。
現代の感覚からすると少し懐かしく思える卓袱台を挟んで、二人がそれぞれ座している。電球が真上から部屋を照らしている以外には、何もない部屋だった。
「何ですか、紫様」
己の主人からのその声に、八雲藍が居住まいを正して返す。しか

し、紫と呼ばれた少女は、気味が悪いほど精巧でいてどこかが壊れた美しい人形であるかのように身動ぎしない。視線を手の中に落としたまま、声を失った。
静寂が数瞬続き、藍の尾が焦れた様にふさりと揺れる。「――紫様？」
「――ねえ藍」
式からの問いかけに八雲紫は、先程とまったく同じ言葉で答える。そして言った。
「希望って、何かしらね」
尚も湯飲みに目を注いだまま、まるで独り言のようにそう呟く。いつの間にか湯飲みは湯気を立てるのをやめていた。
「はあ、希望――ですか」
とりあえず、といった感じに彼女の言葉を反芻した藍は、やや戸惑った様に「仰る意味が、よく――」
「希望っていうのはね、藍」
それを、少女の声が遮る。
「私が言ってる希望っていうのはね、藍。――人が誰しも心に一つ抱えていて、飢えた狼の様に求めていて、そしてそのためならば命を捨てても惜しくはない――人間が生きるために必要な何かよ」
藍が唯一窺えるのは、彼女と比べれば例えマネキンでも人間らしく見えてしまう……異質さを孕んだ横顔だった。
「狂信とは違う――だって、その本人すらも時々、どうしようもなく疑ってしまうほどなんですもの。憎悪とも違う――似てはいるようなんだけれど、でも決定的に違う、そこまで不愉快ではない。黄金に輝く、ソレ」
電球が湯飲みに光を投げかける。奇妙なのは、その水面に映り込むはずの少女が見当たらない事。
「……」
手を袖の中に突っ込んで、訝しげな顔をする藍へと「私は彼の思いを聞き届け、手を差し伸べた。ここ――幻想郷に」と紫が言葉を

投げつけた。
「彼は『傍に立つ』ものと共に、敵を消し世界を消し果ては過去すら消してしまった――らしい、けれど」
答えはなく、ただ九つの尾が、ふさり。
「人が欲しい物を手に入れようとする時、必ず他人と戦わなくてはならない。希望とは、あるいは戦いに破れ殺された負け犬の夢の残骸に過ぎないのかしら」
「そうでない場合だって、あるでしょう」
「希望を胸に死んでいく者も数多見てきたわ。愛する者の名、自身の野望、死を賭す何か。希望とは、あるいは人を狂わせ残酷な真実に気づかせる媚薬なのかしら」
「穿った見方をしているから、そう見えるのでは」
「嘆き苦しみ、絶望に抱擁される。愛を失うのが悲しいのなら、最初から愛など捨てていればいい。希望とは、あるいはただ人が直視したくない物から目を逸らす為の、体のいい言い訳なのかしら」
「言ってる事が破綻してますよ、紫様……。結局、何が言いたいので？」
やれやれ、というように藍が首を振った。
心ここに有らず、という雰囲気にも見える紫は、藍を気にかける素振りもなくゆっくりと湯飲みを回して、その余韻を楽しむように言った。
「彼は一体何を胸に秘めているのでしょう……そう思ったのよ」
「ああ」
得心が行ったという風に藍が声を上げる。「ディアボロの事ですか」
「彼の思い……欲望は……ロードローラーかしらね？」
自身の横に小さくスキマを開いてどこかを覗きながら、紫が茶化す。しかし藍が、首を横に振って紫様、と言った。
「指示待ちで待機中、暇つぶしの言葉遊びの御戯れだからといって、意味を一緒くたにするのは感心しませんよ」

その藍に、「あら、言うじゃない」と紫がようやく顔を向ける。茶、金、そして紫色に目まぐるしく変わっていく瞳が藍を見据えると、そんな事より、そろそろだそうですよ、と藍が窘めた。
「ほら、もう準備していただかないと」
「あら、私が忘れ物をするとでも言いたいの？」
「迅速に行動できるようやる気を出してください。今までが全部バアになります。私の苦労を無駄にしないでください」
「ホント、苦労人ね、藍は。お疲れ様」
「誰のせいですか」
「お疲れ。藍乙」
「紫様」
「乙女（おつおんな）」
「誰がおつおんなだ」
「乙女（おとめ）と言ったのよ」
「誰だルビ振ったの」
「作者」
と、そこで、藍が何かに気づいたようにむっ、と唸ってみせる。具体的に言うと橙から式の繋がり的な連絡が入った。これを藍は愛の力と言い張っている。
「どうやらお時間のようです」
そう言って藍が立ち上がると、紫も「つれない子ねぇ……」と言いながらも腰を上げた。
「では、しゅっつじーん」
紫が、どこからか取り出した扇子を空に躍らせる。その線をなぞる様に縦に空間が裂け、次元の狭間を露出させる。
「――紫様。一つ……いいですか」
意気揚々……とまではいかないものの、それなりに勢いよく踏み出された紫の足が止まる。
「どうしたのよ。尾が一本足りないとか？」
「今丁度、二本ほどお使いに行かせてますよ」

「あらそう。じゃあ私、今後はもう少し長く眠っていてもいいのね？」
「そのうちカビますよ」
おほん、と藍が場をとりなす。
「付かぬ事ですが――紫様の希望は、何ですか？」
「……」
呆れた、というように紫が顔を動かした。スキマに入ろうとしていた体を反転させ、藍と向き合って立った。
「藍の方こそ、少し寝ぼけているんじゃなくて？」
「いや、まあ、何て言うか……なんとなーく、聞きたいなーって」
普段ではあまり見られない、妙に慌てたような顔をする藍。それを紫が、にやにやと笑いながら見つめる。
「私がさっき言ったアレ？　でもあれは、あくまで人間だったら、という話なのよ？」
「いえ、それは判ってますよ。……そうですね、『スタローンとジャン・クロード・バンダムはどっちが強い？』と、そんな感じで結構ですので……」
「……そおねぇ……」
そう言って、開いた扇子でもって口元を隠す紫。しばし目線を泳がせて、あまり深く考える様子もなく言った。
「もちろん藍と、橙と……」
それは期望なのか、　あるいは祈望であるのか。
「そして、この幻想郷が、私の……希望ね」
彼女の口元が緩んでいようが、少なくともそれが彼女の真意だった。
「……やっぱり真っ向から言われると照れますね。早く行ってください」
「あら、なによぅ。赤くなっちゃってば」
「いいですから、そういうの……。ああもうまったく、これだから紫様はキライです」

「そう――キライ」
紫の唇が、動く。
「キライ、ね――」

煌々と月が煌めく。ここ、迷いの竹林からは、月の光に照らされた西方にそびえる妖怪の山がよく見える。その場所で今、土を踏む音がした。
巳の刻。閉鎖された幻想郷といえど、夜道を照らす街灯のような物は設置されていない。妖怪からの猛反発を食らう事は目に見えているうえ、そもそも発想が非常識的だ。
さわさわと竹が風に揺れ、その道筋を示していく。――風が吹き、それに葉がざわついてゆく風景を前にして、そこに時の流れを見るのは……飛躍しすぎなのだろうか。
力強い竹の下には、さらに力強い竹の根が張り巡らされていると言う。その上に、今――全ての頂点に佇む者が、立ち現れた……ッ。
「……重要なのは……」
ゆらり、と擬音がつきそうな具合にまでゆったりと、首を傾げるようにして声を発する。
その背から、真紅に彩られた彼の生命エネルギーが……パワーある像(ヴィジョン)が、立ち上がった……！
「本来は慧音を守りに行かねばならない、が……今重要なのはだ…

……ン？」
その輪郭を紅い線とダブらせながら、内に秘めた激昂とは裏腹に、ディアボロが静かに問いかける。ともすると、どこへも届く事はなく立ち消えてしまいそうなほど……淡々と、幽寂的に。
段々と……彼岸花の鱗茎を一枚ずつ剥がしていく様に徐々に徐々に……彼の目の前に「在る」暗闇が、薄れていった。
月夜とはいえ、夜夜中（よるよなか）にそれとわかる……周囲が暗闇にもかかわらず「薄れた」とわかる、純正の闇。
「八意の本拠地らしき場所から離れた瞬間待ち構えていたかのようにお前が出てきた事やッ……！！　オレに何の用があるのかは正直どうでもいい…！！」
今や、人の耳を楽しませる、夜半の主役であるはずの虫の音色の類は露とも響かない。声無きものはすぐさまその場を離れ、例え吼える獣であろうともその本能が無音での退却を命じた。
その世界の全てが、理解していた。
「――重要なのはッ！　貴様が輝夜を殺（や）ったのかという事だけだッ！！」
帝王が、己の感情をただ吼える。
それだけで、世界の全てがひれ伏した。

「――――目の前のアナタは取って食べれる人類？」

誰かのために　その？（前書き）

「ねえ。その力を振るう理由を考えた事ってある？　……どうしてアナタだけが他人を殺していいの？　どうしてアナタだけが特別扱いなの？」

――さあ。

「“そういうものだ”って？　――他、の……弱くて、意固地で、惨めに生まれついてしまった者はたまたまハズレくじを引いただけで、運が悪かったとでも？　だったらアナタは、運が悪ければ殺されてもいいのかしら？」

――さあ。

「機会すら平等には回ってこないのなら、せめてアナタのような人は考えるべきじゃなくて？　所詮アナタも私も、帝王になんてなれないんだから。全てが終わる前にでも、一度」

――さあ。

「なにそれ。そういうのを、馬鹿は死ななきゃ治らないって言うのよね。……あっ。じゃあ、一生無理か」

――お前もな。

誰かのために　その？

貌の無い夜だった。

――貴方の声は届いてる？

――私の声は涸れ果てて。

「澄み切った青空とか、晴れ渡る青空だとか何とか言って。昼間の空は主役なのに、どうして夜は星がしゃしゃり出てくるの？」

何の為に生きているのかが微妙で不透明な、紅（あか）い瞳が揺れ動く。唇からは、見た目に違わないやや高く澄んだ声色が零れていった。

ディアボロが放つ壮絶な圧力に顔色の一つも変えず、少女はただ淡々と自身の疑問を吐露していく。

「ひどい話じゃない？　割った果物の中身を見て“何か周りと違うから”って種を主役と言うような暴論だと思うのよね～」

薄い暗闇と濃い暗闇。彼女の周囲では、それが明確だった。

思うのよね～と、自分の言葉に自分が納得するかのように、腕を組んでうんうんと頷く。上下に動く頭に合わせ、癖になったように跳ねた髪が揺れた。

――貴方の腕は届いてる？

――私の腕は断ち切れてて。

「……何が、言いたい……？」

自身の血の滾りを感じつつ、何気ない声でディアボロが言った。

相手の出方を窺うだとか、何とか隙を見出そうとかそういう事ではない。それは、帝王には相応しくない。

相手に対し自分では勝ち得ないと思い、このままでは生き残れないと自分のどこかが冷静に計算を下す。弱い弱い自分を正当化する

ためにそれらは行われるのだ。価値のある行いが精神を成長させるとするならば、矜持とはその逆、そこまで堕落してはならない最底辺だと言える。帝王で在るには、相応の所作が必要なのだ。

その彼の視界の端では、闇が蠢いている。

例えば、昼日向では何でもないものが夜になると急に不気味に見えて仕方がなくなるような。

あるいは、恐怖のあまりに見えもしないものを、自分で勝手に形作って勝手に恐怖するように。

本当は、何があるという訳でもないのだろう。

だが、現に目の前では「闇が動いている」……彼女のそれは能力によるものだろう、それは別にいい。

しかし人間の想像力はそれで止まってはくれない。風になびく竹が落とす影に、時折月を覆う雲の動きに、その『後ろ』に何かの息吹を想像せずにはいられない。それが、「他人の能力とはいえ一部現実の物となっている」のだ。

もしかしたら、それだけじゃないかもしれない。もしかしたら、他に存在しているのかもしれない……考えを掻き立てる様に、竹の根元で何かが動いたように見える。

怖い。何かがいる。怖い。見えないものがいる。怖い。知らないものが在る。怖い、怖い……ただ、怖い。

思わずラクガキにでも書いて茶化したくなるそれは、禁じられた事を犯す快感にも似ている。「振り向いてはいけない」などと言われた人間は、そこでもう袋小路に入り込んでしまっているのだ。

それこそが、人間と妖怪との血生臭い歴史が積み重ねられてきた理由。太陽の下でも妖怪は普通に活動できるのに、人間は暗闇の中で疑心に駆られてしまう。一寸先の闇を、創造してしまう事。

人間は、暗闇の中ではあまりに無力で、小さい。自分の力だけでは立ち誇れない。誰かに立脚しなければ立ち上がれない。

――傍に立つものがいれば、話は別なのだが。

「ただのごっこ遊びよ？　負けたらちゃんと引き下がるわよ――そ

りゃあまあ、当然にね」
にっと、その鋭い犬歯を誇るように唇を釣り上げて、少女が嗤(わら)った。
「――私が勝ったら、大人しく食べられてね」
愚者を見る様な目がディアボロを品定めする。先日のレミリアのような、興味や欲望を直隠した冷徹な視線とはかけ離れた、純粋な食欲。舐め回すような視線――というよりも、相手に齧りつくような、そんな視線は含意も比喩もなく一つの事を求めていた。
ルーミアが血のように赤い瞳を炯々と光らせて、前に突き出した指を高々と打ち鳴らした。
――――パチンッ！

「……あれ？」
そんな風な素っ頓狂な声が、少女から発せられる。
目の前の男を確実に貫くつもりで放った弾幕が突然消え、狐にでもつままれたような顔で首をかしげる。
「おかしいわねー……。お兄さん、何かした？」
言いながら、突き出した手をそのままぐっと握りこむ。首筋に二本、心臓に一本と黒い線を走らせたつもりで、今度は確実に仕留めているだろうと、そんな予感予知予兆予覚予見予想めいた事を思う。
「……」
しかし、目の前の人間は倒れていなかった。
どころか、自分の方に歩いてくるのだ。一見するとただの何でもない人間にしか見えないのに、まるでどこぞの巫女のように気負いなく。
恐怖もなく。
「……迷う事……」
「えっ？」
ディアボロがぼそりと、何かを呟いた。少女には口元がかすかに動いたのが見えただけで、妖怪の聴力でもその内容は聞き取れなか

った。つられるように聞き返すと、男が三極の文目を瞳の中に沈めて、観察するような眼差しを向けてきた。
「――自分の行動に迷いや不安を抱えたままでは、そいつは弱くなってしまう……わかるかな？　ええと……」
「うん？　ルーミアよ」
「――ルーミア」
ディアボロがその名前を舌に乗せて、その言葉の響きを確かめるようにもう一度、……ルーミア、と囁いた。
「ではルーミア。……君は、輝夜を知っているのか？」
「カグヤ？　誰、それ」
「先程、いきなり『闇』に襲われた――蓬莱人、というらしい女性（ひと）だ」
「そーなのかー」
「……わたしは、君がやったのではないかと、疑っているんだが」
「そう言われても……うーん、覚えてないわね……」
ディアボロに仕掛け出端を挫かれた……という風でもなく、ごく自然な動作で腕を組んだ。その幼い物腰を見て、誰が思うだろう。
彼女の中では一旦脇に除けられただけで、ディアボロを食おうという欲望が変わらず渦巻いていると。
「――――あっ、でも」
そして。
「さっき、まるで腐ったようなもの食べた気がするわ。――まるで生きてないみたいな」
「――――ッッ！！！」
ディアボロが声にならない声を上げて吶喊する。
「たった今、このわたしから『迷い』は消えたッ！！」
「――わはー！」
肉薄してくるディアボロを見たルーミアは、どこか満足げに目を

細める。そうこなくっちゃ、とでも言いたげに瞳に光が宿る。
　大事に大事に大事に大事に大事に大事に大事に大事に大事に大事に大事に大事に大事に大事に大事に、本当に美味しいものを大事に味わう。目で愛でて自分を焦らすように。口に運んだものを舌根の上で転がすように。
　片手を上げ、二人だけの“ごっこ遊び”を宣言する――。

大事「一歩踏み出しゃ釘だらけ」

　ドスッ！
　ルーミアに突進するディアボロの体が、急激な減速で前のめりに倒れる。十字架に添えられる杭のような闇が彼の足に刺さっていた。その右足を地面に縫い付けるだけでは飽き足らず、闇が残る左足にも飛来する。
「ぐっ……」
　両足ともが強制的に動きを止められて、彼のスタンドが拳を振るう標的を見失った。
　ブチブチブチィッ！　と、足の甲が引き千切れるのも構わずにディアボロが身を翻す。直後、その場所にディアボロの背丈をも優に越える針……「釘」が飛び出した。
　足を庇う素振りすら見せずに再び駆け出した。真っ直ぐには走らず一歩踏み出すごとに左右に大きく足取りをずらし、彼が避けた傍(そば)から次々と性質の悪い足止め釘が打ち出る。墓碑銘が告げる予告に従い、ディアボロがまずは、と受けに回った。回避だけに専念していれば、彼が致命打を食らう事など皆無に等しいだろう。
　進路を塞ぐ釘をディアボロが拳を振るって消し飛ばす。走る勢いのまま大きく跳ぶと、彼の影をなぞるように釘が「ドドドドド」と突き出た。そして、着地した瞬間足元の石ころをスタンドに蹴り飛ばさせた。
　弾丸のような速度で石が飛来した。

それは、ルーミアへと届く前に幾重もの闇に抱擁された。
「むっ……」
まるで先読みされているようにまったく被弾しない状況を見て、ルーミアが唸る。三枚におろそうと包丁を走らせたまな板の上の鯉が思わぬ活きのよさを見せたように、やや複雑な顔をする。
これ以上は同じだと悟ったのであろう。横に広げた片手の中に次なるスペルカードを取り出した。
「いいわね。そんな酷い事してもまだ、前に進もうと思えるなんて」
「――なに？」
真っ直ぐに、ディアボロを見つめた。

無明「夜道に日は暮れぬ」

「おっと」
闇夜を切り裂いて、白い光線が音もなくディアボロの目の前を横切った。それは一歩身を引いたディアボロの頬を薄く削ぐに留まり、あさっての方向に伸びる。
竹の中を白く突っ切って、あっという間に見えなくなったそれに一瞥をくれ、ディアボロが手の甲でゆっくりと――傷口を拭う。そして、今の彼女の攻撃の意味を考えていた。
――どこからか、猫の鳴き声がする。
それを見た、ルーミアの紅い眼は何も映さない。
溜め息に似た吐息が少女の口から吐き出され、それに従い二本の光が暗闇に浮かぶ。まさに閃光。その美しさに見惚れようものならば、黒と白いキャンバスに赤の原色が混じる事になる。
ディアボロは、避けるどころか能力すら使わない。
二条の光線が彼の髪を翻す。淡い赤がなびき、そして、ディアボロは推量を確信に変える。
「お前は……スタンドが見えているな？」
見えもせず、触れることも出来ず、ただ一方的に干渉されるだけ

であるはずの、己の精神が形。物言わぬ人形（ヒトカタ）は彼の傍に立ち、先の弾幕のことごとくに撃ち抜かれていた。
もちろん、ルーミアに悪魔の如き能力があるわけではない。歪みきった悪夢の異能は、今は正しく紅い檻の中だ。
なれば、何故――と、ディアボロが少女に言った。
「んー……」
対するルーミアは、迷うような声を上げながら、人差し指を軽く振りかぶった。瞬間、四の白がキング・クリムゾンに走る。
無論、ざるで湖の水を掻い出すような、不毛な行動だった。
突然ルーミアが地を蹴りつけ、空に浮かび上がった。強く当たる風が彼女の金糸を乱した。そよ風ほどにも感じられない上空に吹く強風にスカートの裾をはためかせたルーミアは、ディアボロからの距離を計りながら、右腕を振るう。
八本の白い光線が走る。
五指の先まで伸ばして、横になぐ。
十と六の線が踊る。
「――見えているのか……と、聞くまでもない事だったな……」
上を睨め付けたディアボロが、首筋を揉みながら言った。
今の妖気での攻撃――一般的なスペルカードルールに一応則ってはいる。その威力を除けば――で、下級妖怪程度なら塵と滅しているだろう。さらには妖怪（ルーミア）と違う人間の躰。脆い血と肉と骨とで、彼は無傷のまま立ちはだかっている。
彼の横では、時の破壊者が憤怒の表情で拳を握り締める。本体の一面であって裏側と示すかのように、ディアボロが淡々と言葉を紡いでいく度目に見えてその憎悪が増していく。
消し飛ばす前の世界と消し飛ばした後の世界が、同じものだと誰が断言できよう。世界はその都度打ち砕かれそしてその模倣品が新たに据えられているだけなのかもしれない。
――確実に言えるのは。

帝王に隔絶された時の流れを、彼女の弾幕（おもい）は越えられなかった。
ルーミアの周囲で走馬灯のように白が踊り始める。その残光が、彼女に纏わりつく深淵の表皮、薄皮を鋭く鋭く鋭利に切り裂いて、紅い妖気の弾丸が形成されていった。
闇色の球体を白い光が廻り、巡っていくにつれ紅の比率が増していく。
眼球にも見える紅いそれは、あるいは闇の向こう側に人間が抱く、イメージ。いつでもこちらを見ているという、見られているという。
殺せるモノの、視線。
輪郭のない闇の忌み子（おとしご）達を引き連れて、ルーミアがディアボロの頭ほどまで高度を下げた。
それを見つめるディアボロには、人間としての矜持か。それともただただ憤りを抱えているのか。
少なくとも、恐怖は見えない。
日が落ちると闇が訪れるのは自然の摂理なのに、闇を怖がる事は人間の本能なのに、ディアボロは言葉なく彼女を見据え……。

――さあん。

幼気な唇が時を告げる。ディアボロは動かない。

――にぃい。

ルーミアの周りで微妙に胎動していた弾幕が、ぴたりと動きを止めた。その狙いはただ一つ。
ディアボロのスタンドが、忌々しそうに彼女を見上げた。一秒でも生存を許している事に苛立ちを感じたように、射るような視線を向けた。

――いいち。

発狂スペルの本番を告げ知らせるルーミアは、どこか詰まらなさそうな口ぶりだった――。

紅い弾幕が怒涛の奔流となってディアボロに押し寄せた。それに対し真正面からぶつかろうと走りだすディアボロが今、世界の区切りを叫ぶ――ッ！

「――キング・クリムゾンッ！！」

彼が一歩踏み出した場所が虚空へ消え去った。この世の全てに亀裂が走り、世界から時間が引っぺがされたその空間を、ディアボロが走り抜ける。無意味な弾丸が彼の体を貫きさらに後方へと飛び去っていく中、ルーミアが浮かべるその表情もまた、未来への軌跡と成り果てる。

子供の握り拳程の大きさの弾が、ポッ――ポッ――と、奇怪な音を立ててディアボロの額に埋まり、何の影響も無く後頭部から突き出ていった。

大小様々な弾幕の、ことごとくが無意味な『過程』に成り下がる。いよいよ拳が届く範囲までディアボロが近寄った事を認識できないルーミアは、薄く微笑んだ。

時が再始動させつつ、ディアボロがスタンドの貫き手を伸ばした。

そして……。

「どうしてそんなに痛い事するの？」

心底理解に苦しむ、といった表情を浮かべ、少女が己の腹部を一瞥する。

二人の交差の瞬間、ディアボロのスタンドが抉り、がっぽり開いた大穴がしだいにしだいに埋まる、治る。周囲の闇が集まり同化し、服すらも再び再生してみせた。

「どうしてこんなに痛い事するの？」

月光の様な、白く光る一条の光線が彼の右肩を根こそぎ持ってい

っていた。同じく瞬時に傷は治るが、顔には苦悶が張り付いている。
死ぬ思いをして死に抗うディアボロを、少女は磔(たく)された聖人の様に、ただ無表情に見据える。
「今の能力のせいなの？　お腹がすいて仕方がなかったりする？」
このカス能力が……！！
キング・クリムゾンが激情に身をよじらせて、スペルの残弾を消し飛ばした。
本来ならば、ここで反撃のスペルカードなり弾幕なりがありそうなものだが、それらのすべを持たないディアボロからは、身に凍みる緋色の風が吹き抜けていった。
「……どうして、といったのか？　――ルーミア」
他者を省みずに、ただ自分のしたいようにやる。
ディアボロは、目の前に佇む少女に、既視感にも似たものを覚える。
――まるでオレじゃないか。
「アナタのそれ……綺麗ね」
場違いにもほどがある言葉をルーミアは「わはー」と言ってのける。
「――ディアボロは今、求めてる？」
求めてる？
――何を求めてる？
「ええと、赤い人の隣の……」
「――ディアボロ」
吐き出すように言った。
禁句であったはずのそれを。
「アナタ自身の積極的な理由はないの？　そのカグヤって人みたいな」
ルーミアが言葉尻を探すようにそこで区切り、それから言った。

「『どうでもいい理由』。――簡単なのよね、言葉で自分を誤魔化すのって。自分の中の欲望をずらして誤魔化して目を逸らして零れる涎を拭っていればいいんだもんでも違うの違うの違うのっ！」
一拍置いて、
「どうしてディアボロは撃たないの？　自分から気持ちを伝えないで控え目だとかって言葉で言い訳してるような奴は一生独りで生きてろ臆病者ぉ！　なんだよ？　ずっと同じ場所で同じ事してられるわけなんてないし、大事にしたいと思うものほど憎くなるし壊したくなる――」
泣いているように体を震わせながら、ルーミアが叫んだ。
「結局、『自分のため』でしかなくて、他人なんて踏み躙って自分の衝動を叶えられればどうでもいい――！　身に覚えが無いなんて言わせないんだからねっ？　きっとアナタは、『黒い衝動』に身を焦がした時がある――愛してくれる相手が、近づいたその距離が、怖かったから……！」
「――黙れ」
「ずっと、中途半端に、曖昧なままにしておきたくても！　それがっ、それは許されない事だから！」
「黙れッ」
短い自身の腕を伸ばしても届く距離で、ルーミアは彼を見上げていた。喉を焦がすような叫びをもって、ディアボロを……己を糾弾する。
「どうして――――『どうして』っ」
「黙れと言っているッ！！」
キング・クリムゾンが彼女にその剛腕を捻じ込む。引き攣った顔に指先が眼球を抉り出すかのように埋まったが、ぐぼぼぼっと奇妙な音がして少女の輪郭（シルエット）が矢庭に煤けた。スタンドが腕を振り切りそのまま闇を千切り飛ばす。ルーミアを模った闇がぐずぐずとその場に崩れ落ちた。
その下でキング・クリムゾンの腕の影がありえない程伸び、離れ

る。ルーミアの分の影がそこから伸ばされると、スタンドの影の方からはぷつっと途切れてそのまま渦巻き膨れ上がった。
地面の影を湖面の月と見なすなら、さしずめ星空の中の一点の輝き。
ぬるり、と音の出そうな具合にルーミアが這い出る。
ディアボロが彼女に駆け寄るよりも、その宣戦布告の方が数瞬も数秒も「速かった」。
「私の想い、受け止めてねっ」
想起「千年前のと変わらない夜空」
ルーミアが叫ぶ。
右腕が上がり、その手を中心に妖気が集まる。
発動した。
発動して――――――。

「――キング・クリムゾン」

かちり、かちりと時止まる。
止まらない。
がたり、がたりと時生まれ。
消え去った。
継ぎ接ぎのパッチワーク、コマ飛ばしした映画。
まさに、そんな風に、見えた。

コンティニューしても？
――駄目。
「……それがアナタの想いなの？」
急激に、ルーミアの声音から力が失せていた。掲げていた腕を、下ろす。
弾幕ごっこに本気になるのは、いつだって人間。公平で正大なルールに従って則ってルーミアの負けが決定した。
例え時間を丸ごと吹っ飛ばされようとも。
「壊れた時計は――壊しようがないのに」
「……黙れ」
「少し、疲れちゃった」
――がじ、がじ、がじ。なのかー。
叫んだディアボロの腕が、スタンドが、彼女の華奢な喉を掴んだ。
異形の眼（まなこ）が痙攣する。
自身の生死にすら無頓着な声でルーミアが言う。蔑む目が、不躾な腕を見た。
「そうね――不公平だし。……今なら。そして……アナタなら」
簡単に、殺してしまえるよ？
スタンドの指が、ルーミアの白くか細い喉にくっきりと爪痕を刻み始める。
――そうだ、あの頃もそうだったじゃないか。
自分の正体を知った者は殺す。過去とは決別せねばならないのだ。染み付いた油汚れのようにしつこく、潰しても潰してもまたわらわらと湧いてくるそれは、本当に不愉快だ。だが自ら手を下さねば、

悪魔の注ぐ美酒や甘く酔いしれるような夢よりも心地よい絶頂ではいられない。
この世の理では彼は生まれるはずのない存在であったがため、必死に手を伸ばした。両手を伸ばして、求めた。
得る事と、それを保つ事はまるで違う。
今までが追いかけてくる。これからが立ち塞がる。固く閉ざされてしまった未来を強引に捩じ開ければ、そこには全てがあって。
勝利するはずだった。君臨した黄金を『否定』して、真実を掴んだはずだったのに。
今のこのオレの手には、何もない。
数多の犠牲は、ただオレの絶頂のために。
……本当にそうだったか。本心では、心のどこかではどうでもよいと。
ただ、殺したいと。
「勝者とならなくては……何の意味も持たない――――」

突然、横合いの竹藪が鳴った。中途半端な月の光の下に、紅色の人形が躍り出る。
男が一人、輪郭の曖昧な少女の首を締め付けている。その光景の

ところどころが奇妙に“薄暗い”のは、男の能力なのだろうか、と妹紅が咄嗟に判断し、
「お前、何をっ！！」
空に響き渡る声が赤くなった。炎が、藤原妹紅と共に進み出でて魔の暗闇に抗する。

走った。

急に妹紅は、自身が立ち止まっている事、そして、背後でドサッと音がした事を知覚した。
「かっ……はあああ……はっ、はっ、は……」
「――どうい……おいっ！」
即座に背後を振り返った妹紅は見た。目の前で喉を締め付けるように押さえる少女の気管が、べっこりと圧し折れているのを。
不得手ではあるが長年で培った妖術の中から瞬時に使えそうな治療用のものを思い返すが、その試みは無駄になった。
なぜなら、呻きながら地面に這い蹲る少女が自身の妖気を使い闇に閉じこもったから。ゾッと悪寒が走り、反射的に背中をさすっていた手を跳ね除けた。
妖怪か。
なら、そこまでの心配はいらない。
「……むしろ……」
立ち上がった妹紅が呟く。今の少女の力量は決して低いものではなかった。
そもそも妖怪は存在の比重が精神的なそれに傾いているにも関わらず、ああも追い詰めていた、あの男。妖怪をこんな“物理的重傷”にさせるには、少なくとも数百年級の力を持った道具が必要だろうに。
しかも、いきなりの事で顔も碌に見えなかったが――私がいきなり『飛んだ』、あの能力。

油断無く周囲を睥睨していたが、妹紅が振り返ると既に、少女の影も形もない。
どころか、辺りにはこの手の戦闘にありがちな物理的な痕跡がまったくといっていい程残っていなかった。僅かに血の匂いはするが、この分では流された量は微々たるものであろう。ファンタジーの世界にでも迷い込んだ気分だ――『あたし何しに来たんだっけ？』というような。
「……クッソ！　――何なんだ、一体」
叫んで、八つ当たり気味にバラまかれた炎と弾幕が月光を押し返した。
燻された竹が爆ぜるが、その中心の彼女は平然と立ち竦んでいた。

誰かのために　その？（後書き）

紫はクリームってよりもディー・フォー・シーだと思う。

どうでもいいけど、予約投稿するならすぐ上げるべきなんじゃないかな、と思う今日この頃。

別にポンポン書ける人に嫉妬してるとかそういうんじゃないからね！　勘違いしないでよね！

・注……『発狂スペル』

東方シリーズにおいて、時間経過などによって攻撃が激しくなる類のスペルカード。お嬢様そろそろ手加減してください。

“オオゴト”「一歩踏み出しゃ釘だらけ」

人間は目が命。暗闇は致“命”的。

停電なんかしたら慌てずにその場を動かないでください。釘でも踏んだら一大事ですから。

“ヒッシ”「夜道に日は暮れぬ」

昼間と夜じゃ時間の早さが違うような気がします。夜型のモノだとまた違う見方もあるんでしょうけど。

単に寝ているからってだけな気もします。

・未使用スペル……“ハジマリ”「千年前のと変わらない夜空」
よくわからないんですけど、人間がネズミと話が出来ないように生きる時間の永さが違う妖怪と根本的に会話って成立してるんでしょうか。
よくわからないんですけど。

独りきりのＲｅｓｉｓｔａｎｃｅ（前書き）

弱音を吐く事と、逃避って違うよね。
そんな感じで前回と第十九話、「独りきりで足掻く者」です。番外編みたい。

ぶっちゃけ「死刑執行中脱獄進行中」を読んでないと理解しづらい……かも。ネタバレはない。多分。

独りきりのＲｅｓｉｓｔａｎｃｅ

――彼は檻の中にいた。

『ヤツはもうどこへも向かうことはない』

――檻という表現が適切かそうでないかという議論に大した意味はない。例えほんの少しだけ、悪意ある比喩であろうともだ。

『特にヤツが「真実」に到達することは決して……』

――彼が真実という終末からさえも見放されたというのならば。ならばどこへいくというのだろうか。永遠に時間の坂を転げ落ち続けるだけなのだろうか。

『「死ぬ」という真実にさえ到達することは決して……“無限に”』

真実とは何なのか。何が無限なのか。

運命の日、時。永き因縁のその全てが、世界が断ち切れた。

――『時が加速』する。

「ここは……」
次に彼が気がついたのは、洒落た雰囲気が漂う、窓のない部屋だった。
軽く首を振って、周囲を見渡す。三十畳ほどのこの部屋からは、ウォッシュレットトイレとシャワーのある洗面所と、薄暗い通路への出入り口が一つずつ。彼は部屋の、丁度中心に立っていた。
部屋にはクローゼットからソファー、寝台、テーブル、観葉植物までが一通り揃っており、天井のありふれた造形の照明がそれぞれに光を落としていた。
他には誰もいないようだった。
ざっと見回すと彼は、襲い来る死を今か今かと待ちわびて、目を閉じる。頭を垂れ、両腕を組んで佇立するその姿には、引き締まった体つきもあいまって一種退廃的なまでの美しさがあった。
抵抗をしないわけではないし、自分の恵まれた異能を忘れたわけ

でもない。諦めるつもりだけは、毛頭なかった。
――しかし、何も起こらない。彼の今までの経験からすると、次に死ぬまでの間隔が長過ぎる。
仕方なしに目を開け、もう一度、何もないかと辺りを見回す。彼にとってはこんな圧迫感のある場所などは、とっとと退散したかったのだが。
まず目に付くのはすぐ目の前にある木製のテーブルだ。二脚の椅子も置かれているが、子供用なのだろうか、長身の彼には少々窮屈に感じられるサイズのそれの上に、刑務所なんかで使われていそうな食器トレーがあった。やや乾涸びていそうや具合のパンに、コーンとポテトのサラダ。スプーンの突っ込まれたカップにはコンソメスープが注がれ、付け合せのボイルされたニンジンの横には薄っぺらいステーキがある。
彼はそれらに一瞥くれたが、すぐに顔を背けた。
二十回ほど前に、手を替え品を替え連続で溺死したばかりだった。今でもまだ肺の中に水が残っているような感覚がある。
部屋の中に興味をなくし、次に彼は通路の方へ足を伸ばす事にした。
けれどその歩みもすぐに止まる。暗くて部屋からはわからなかったが、そこはただの小部屋だった。そこからさらに通路が左右へと伸びてはいたが。
鉄格子で、その通路とは遮られていたのだった。
それを知るや否や、彼はスタンドで鉄格子に殴りかかった。
ガッツ――――ンンン……と、割と小さな反響音と共にスタンドの剛腕が弾き返される。
「……」
次に彼はスタンドに格子を掴ませると、全力でそれを捩じ開けようとした。だが、ビクともしない。
不審に思った彼が、黒光りするそれを自らの手で掴むと、

――オレは何もやってねーーーッーーー！

――なにかの間違いなんだーーッ！

通路に反響して、どこからか声が聞こえてきた。声からするに、どうやら本格的に監獄染みてきたが……と思考を整理しつつ、彼が鉄格子を上下になで上げる。手の平から伝わるひんやりとした触感からして、どう考えても材質は鉄でしかないのだが……と、再度スタンドに殴らせる。

傷一つ付かなかった。

――やはり、わたしはまだあの奇妙な能力に縛られたままらしい。

なるほど、彼自身の精神力の衰えによるスタンドの弱体化という事も考えられなくはないだろう。

だが彼はそれを由(よし)としない。如何な衰弱していたところで、このオレが鉄如きをどうこうできなくなるのは異常事態だ、と考えている。

今までも自身の抵抗は嘲笑うかのように全てが無駄な足掻きに終わり、その度に何度も何度も無限輪廻の輪の中に叩き返されたのだ。鉄が壊せないというのなら、つまりはそういう事なのだろう、と納得する。

小部屋の広さは彼が腕を広げればそれだけで両の壁に届く程度しかなかった。そして、どうにも薄暗いのは電燈がついていなかったらしい。横手の壁にスイッチがあったが、特にそれには触れず彼は大きい方の部屋に戻った。

再び、部屋の中を見回す。

「……どういう事だ？」

苛立たしげに呟いて、椅子を蹴り飛ばした。壁に叩きつけられたそれは、切れ目でも入っていたかのようにバラバラになる。

何か“スイッチ”のようなものでも必要なのだろうか。このままでは、状況を発展させるために壁を打ち壊しにかかる事も視野に入

れねばならない。
部屋の隅には小型テレビが鎮座する化粧台があった。「ワールド・シリーズ・オブ・ポーカー」と書かれた皿も飾られている。その下の、引き出しの取っ手を無造作に掴み、すっと引き開け中カチッ。
音がした途端、中からナイフが切っ先を光らせて彼の顔面に飛んできた。顔色一つ変えずに彼がスタンドで掴み取る。
「……」
指の間に挟んだナイフ――彼自身の手の平程度の大きさ――を弄びながら、彼は張り詰めた表情を浮かべた。その輪郭の一部を共有し、スタンドが周囲を蔑んだ目で睥睨する。
「こいつはつまりだ……」
バキッ！
握り潰したナイフを、放り捨てる。
見れば、床一面に敷かれたカーペットにはほんの僅か、彼が鉄片を放り捨てた部分にだけ染みがある。その上に捨てられたナイフは見る間にボロボロと錆びていった。
ふんと鼻を鳴らした彼は次に、テーブルの上のスープカップを持ち上げ化粧台目掛けて投げつけた。バシャッと飛沫が振りかかり、みるみる内に木造のそれが悪臭を放ちながら溶解していった。中ほどまで腐食された段階で臭いに変化が生じたところ、さらにいくつかの仕掛けがしてあったようだ。
「悪趣味だな……こいつは。実際にあるのか？　こんな拷問……いや、処刑室が」
矢庭に視線が鋭くなる。
この調子ならば、そこらの観葉植物やら寝台なんかは当たりだろうと、今度は洗面所の方を探る。
日本のような浴槽はなく、使用の際はカーテンで仕切れるようになっている欧米スタイルだった。
壁には等身大の姿見が掛かっている。
映りこむのは、やや憔悴した顔つき。窪んだ眼窩の中には、彼か

ら放たれる生気とは裏腹にぎらぎらとした瞳が収まっていた。かつての栄華の夢の残りカスのような存在だと自嘲する。
地獄を映し出した両眼がひとしきり鏡を見つめると、スタンドが拳を叩き込んだ。最後の光を反射し落ちるガラスの破片が、ほんの一瞬だけ、彼を彩る事を許される。
「……」
他に何か不信なものはないか。
そこでふと蛇口が目に入った彼は、物は試しだ、とそれを捻る。
――捻じ切れた。「これは……ッ！！」と彼が咄嗟に飛び退くよりも速く、シュー……とガスが勢いよく吹き出てたちまち室内に充満した。彼は一瞬それを吸ってしまう。
ごとっ、と鈍い音が室内にした。
握り締められた鉄屑が、彼の右手の傍に転がる――。
１０５２４７７８回目――毒ガスを吸い込んだ事で呼吸不全に陥り、死亡

「ここは……」
次に彼が気がついたのは、一昔前の日本にはそこら辺にありそうな、はっきりとした特徴を記するのが少々難しい玄関だった。
外に通じる扉を背にした彼の右側には、「壺」だとか「電気スタ

ンド」が置かれた靴箱がある。揃えられた靴やゲタも当然並んでいたが、彼は気にする風もなく廊下を歩き出した。
（段々とわかってきたぞ……わたしはここでまた、“決断”を迫られている……）
入ってすぐのところには小さい文机があり、その上には旧式の鉛筆削りと鉛筆が三本、そして燃え尽きたマッチが一本。続く廊下の先には扉があり、その向こうに上階への階段も見受けられたが、彼はまず一階の扉を開けた。
部屋の壁にはこの家の主を撮影したと思われる写真や絵画が飾られ、本棚もある。「二銭銅貨」「銀河鉄道ノ夜」などがその背表紙を見せているが、全体的に本の並べ方がやや雑で、よく見れば床にも何冊か落ちている。
五畳ほどの狭い部屋の中央には椅子のないテーブルが置かれ、その一面と接した食器棚があった。戸棚は開け放たれ、引き出しはだらしなく飛び出している。そして強盗にでも遭ったかのようにナイフなどの中の物が荒らされていた。
何より、十数個もの「卵の殻」がそのテーブルの上や床に散乱している。

――ウウウググググ……。

彼の耳にどこからか、地を這うような低い唸り声が聞こえる――。
『チクバアアアアア！』
「……ッ？！　これはッ！！」
食器棚の奥、“未使用”の卵から「孵った」モンスターが突然彼を襲う。彼の視界の右端に襲来する影が映りこんで、部屋中に木霊する咆哮を上げた。
一歩引いた彼の眼前で、スタンドに殴りつけられたそのモンスターが壁に叩き付けられる。半固形物のような「ベチャッ！」という濡れたような音と共にそれが赤い体液を撒き散らして壁に鮮血の線

を描く。
一目見たところ、それらの第一印象は『肉食恐竜』だった。開くべき口を持たずに、顎の先から喉まで鋭利な牙が生え揃い、前足の二本は短く退化している。収まっていた卵より一回り大きい体躯を導く強靭な後ろ足と、二又に分かれた尾。全身に瞳を模したような二重円が浮かんでいる。
『チクヴァアア――』
「これは……こいつは……ッ」
ペキッ、ペキペキ、と戸棚からどんどん卵がひび割れる音がし始め、返り討ちにあった先の一体以外にも、次々にモンスターが孵る。
だが、それを見る余裕もなく、スタンド――そして本体である彼の右拳が、煙を立てて『変わり始めていた』。
『チグァア』『グバァア！』
お構い無しにモンスターが飛びかかってくる――それに彼は舌打ちを一つして、スタンドでそれぞれを床へと叩き落した。血溜まりが三つ生じ、仲間が殺された事に怒りを感じたようにこれから生まれくるモンスター共の声が大きくなった……。
「この……“変えられるという能力”……これはまさに『あの時』の……」
顔を苦痛と怒りで歪ませながら、彼が膝から崩れ落ちる。スタンドが、張り付く四体目を握りつぶした。
彼が押さえている右足の、その太ももはすでに死角から飛びかかったモンスターの浸食を受け、植物の根のようなものに変貌しつつあった……。
今の攻防により、体液が飛沫となって腕まで降りかかっていた――。彼の中に、肉体と共に意識が『別のもの』へと捻じ曲げられていく恥辱が膨れ上がっていき……。
さらに七体のモンスターが、戸棚から降り立った――！
「――くおのッ！　カスがァアア！！」

１０５３００１２回目――“なにか”に変えられた事により、死亡

「ここは……」

次に彼が気がついたのは、雄大な青空の下にあってもなお鮮やかな、どこまでも広がる海（オーシャン）だった。

頭の隅に残響する死を首を振って追い出す。同時に頭痛もするのはきっと、眼前に在る巨大な蒼に目が眩んでしまったからだ。

眩暈がするようで。

舳先に、へたり込むように崩れ落ちた。

彼の足元には、暗礁に激突して横倒れになったヨットがなお押し寄せる波に屹然と抗っていた。メインマストはほぼ海面と水平まで傾ぎ、船室は若干の浸水を許してしまっている。備え付けられた冷蔵庫が抱え込んでいた品々は、大方が水に攫われてしまっていた。

破損が酷いヨットの海面から出ている一部分は座礁した時に甲板がめくれ上がっていて、そこには隙間に隠れるようにナイフがひっそりと置いてあった。なぜか、指三本分の指紋が、赤黒く変色して浮き上がっている。

砕けた船室の窓ガラス、壊れた無線機、ズタズタのハンドバック、「C」とか「Y」と辛うじて読める紙切れ。その他諸々……まあ、特筆するような物はない。

そう。何も、なかった。

彼が自我を喪失して、早半日が過ぎただろうか。ニャアニャアと、遠くで海鳥が鳴いているような音がする。
ゆったりとした波の感覚は、聞き入るほどに騒々しさからかけ離れていき、独特のリズムを心に刻みだす。まるで変わらない穏やかなうねりが、古来より生者を引きずり込むという御伽噺にも確かな信憑性を持たせている。
巨大なものに身を投げ出したくなる欲求。夢に――浸る事。
用済みの貝の中にさえ潮の音を聞くように、ただ耳を傾けているだけで、まるで自分の全てがそこにあるかのような錯覚をしてしまう。これを海の魔物と呼ぶなら、きっと「そういうもの」とは、その一切が己の精神の中に住まわせている「何か」なのだろう。
あるいは、幼い日に捨て去った幻想。
あるいは、求め続けていた想像（イメージ）の中の一欠けら。
何を考えているのかも杳として知れない彼の顔には、ただからっぽが滲み出ていた。

ゆっくりと……沈んでいく。

「……私の故郷も、こんな穏やかな風が吹いていた……」
照り付ける海の陽射しも、焼死した回数だけで軽く三桁を数える彼にとっては物の数ではない。
――進むべき道を思い出せない。
何故こんなにも喪失感が軋むのだろうか。不愉快な音の一因は、おそらく“理由”がない事。
『どうして』。
小さく、叫んだ。
不意に思い出す、懐かしい故郷の匂い。この現状にあてられたのだろうか、記憶の中の故郷の海は、丁度今香る潮の匂いと同じだった。

蝕まれたのは『闇だ』。
殺されたのは『昨日だ』。
思い出せないのは『彼だ』。
……Ｃｏｓｔａ海岸Ｓｍｅｒａｌｄａ（エメラルド）が掻き消える。波浪の中に今、一瞬だけ垣間見えた気もしたが、そんなもの……額縁にでもしない限り、何にもならないのだ。
晩餐会で貴婦人をエスコートするように優しく抱き抱えて静かに下ろし憎悪と愛情が零れ落ちないように口を縫って塞いだ。神を呪うように、何度も何度もその名前を呟いた。それがいつか起き上がって迎えに来るような虚しい墓碑銘と、敬虔な灰が集う、全てを捨てたあの夜。
『貴方の為に』。
希望は置いてきた。愛していたのに。愛している。
本当は、忘れてはいけないはずなのに――この世の頂点から見える景色、王座から見下ろす世界はあまりにも小さ過ぎて誰もわからなかった。手を取り合って共に進んでいたのに、いつの間にかその手はわたし自身のものだった。

既に船上には夜の黒さが忍び寄っている。頭上を探しても、あの月はどこにも見えなかった。機が熟した、と言わんばかりに星々が光り輝き、己が存在を誇らしげに誇示していた。
おもむろに彼が右手を広げる。
かつては全てに打ち勝ったその手は、ひどく小さく見えた。
――だが。
いくら懐かしく、愛おしく想おうが……。
幻想には、抱きしめようと手を伸ばす事すらも、できない。
夜陰に紛れて海賊船が接近する事も、飢えた猛禽の類が飛来する

事も、鮫が甲板に飛び出してくる事も、突如津波が押し寄せる事も、猛烈な土砂降りに遭う事も、ヨットに狂犬が潜んでいる事も、海軍の演習に巻き込まれる事も、暗礁から再び波に攫われる事も、強風で何か巨大な物体が飛んでくる事も、船室のビンの中から超即効性のウイルスがまかれる事も、風に煽られて落ちる事もなければ、もちろん飢えもしない渇きもしない。

ある意味では、今までで一番満たされていたのかも知れない。

――しかし。

ボゴン、とすぐ下にあるボートのなれの果てを殴りつけ、杭程度の破片を抉り出した。

「……“ある意味”では、そう……わたしは『迷子』のようなものだろうな」

何の気負いもなく、刃先が鋭くきらめくそれを、自身の喉にあてがった。

「わからないのならば……探し出す他あるまい」

――諦める事だけは絶対に選ばない……それがわたしに残された、最後の矜持だ……。

海の涼風が吹き抜ける。透き通って尾をたなびかせる死の風は残酷な美しさで彼にしばし絡みつき、それもやがて治まる。

――終わらない、と祭の時には誰もが願うけれど。

どんな楽しい事でも、終わらないものなんてない――。

願わくば彼の行く末が、想い（ピース）の欠けたパズルなどではなく、終焉に鳴り響く鎮魂歌（レクイエム）であるように――。

１０５２４８０９回目――喉を貫いた事からのショックにより、死亡

『猫のあゆみ　鉄の一閃』
『神経外科医が煽る　金切り声』
『妄想狂の毒のドアが開き』
『２１世紀の精神分裂者』

『血の拷問　有刺鉄線』
『政治家があげる　火刑の炎』
『ナパームの業火に無知は汚され』
『２１世紀の精神分裂者』

『死の種子　盲人の貪欲』
『詩人の飢えた子孫は　血まみれ』

『何ら望みは叶いはしない』
『21世紀の精神分裂者』

――終わりのないのが『終わり』　それが『ゴールド・E（エクスペリエンス）・レクイエム』

独りきりのＲｅｓｉｓｔａｎｃｅ（後書き）

つい最近知ったのですが、巨匠三名がジョジョの小説化を行う、という事で、
「何で俺書いてるんだろう」
と思わなくもない今日この頃です。でも頑張ります。
徹夜で書いた部分の文章ちょっと頭おかしくねー？　とかさ。でも投稿。

文章中の死亡回数なんですが、一体どの程度の規模で書けばよいのか作者も迷いましたので、概算で弾き出してみました。

まず、原作の中でレクイエム状態で死んだのは計三回（ここでは、ジョルノに殴られた時点で死んだ、とします）。
ダボにナイフで刺されるシーンは、およそ二分。肝臓をお披露目した時も、大体二分前後でしょうか。犬に飛びかかられて車に轢かれるシーンは、四十秒から五十秒。
その後、襲い来る死の状況にもよりますが、作者は全体的に三十秒程度だと考えます。火事現場の中に放り出される場合なんかもあるでしょうし。
すると、目安として一分間に二回、でしょうか。
一日で２８８０回。一年で１０３６８００……百三万六千八百回。
――五部の年代は２００１年で、六部スタートは２０１１年、プッチ神父による宇宙加速は２０１２年。
……これは……ボス……。

・タイトルだけ本当の次回予告

「そうだ、海へ行こう！」
突拍子もない事を突如力強く宣言しだした紫に引き連れられ、にとりが徹夜して寝ている間に藍が作ったバスに乗った一行が辿り着いた場所は海は海でも樹海だった。
樹海という地名の海だった。
「酒忘れた」「帰れ」
「潮風はヒマワリに悪いの」「帰れ」
「霊夢を呼び忘れてました」「戻るぞ」
スキマでにゅるっと戻った一行は、霊夢が神社にいない事を知る。
すわ蒸発かと焦る面々（紫）だが、それは現代に復活した悪霊「ＭＥＥＭＡ」の巧妙な罠だった。
「無敵のキング・クリムゾンで何とかしてくださいよォーーーーッ！」
「わっわたしのシャンハイがァーーッ」
「咲夜。ご飯はまだかしら？」「もう食べましたでしょう、お嬢様」
「さあ来いパルスィィ！　実は私は一回轢かれただけで死ぬぞォ！！」
八雲家「ざわ……ざわ……（審議中）」
「お前が我が軍門に下るのならば、焼き芋の半分をくれてやろう……」

幻想郷はどうなっているのか！　そしてディアボロは伝説の寄生虫を巡る争いに終止符を打てるのか！
次回、「真紅の少女～　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｄｅａｄ！！」
更新日未定。

真紅の少女～　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｄｅａｄ！！　その？（前書き）

君の先を行き後に引き、君に囁きその鼓動を聞く。
骨を揺らして嘲笑う。爪を研ぎ澄ませて待ち構える。
君の全てが終わるのを。君の肩に手をかける日を。
時間という名の死刑が執行されるその時まで。

真紅の少女〜 Ｃｒｉｍｓｏｎ Ｄｅａｄ！！ その？

妹紅は苛立っていた。もやもやとした遣り様のないわだかまりを感じたまま、彼女は竹林を歩いている。

――慧音。

慧音を捜さねばならない。あんな危険な者がうろついているのだから。

当てずっぽうに進む彼女の周囲には、パチ、パチ、と軽い音がしている。

瞳の中の炎が揺らめく。

彼女を取り巻くようにして小さな火花が弾け飛んでいるのだ。幽玄に流れる髪のきらめきが形を成したかのように、いくつもいくつも火の粉が散っている。

あるいは、摩擦。彼女の感情が、結界を竹林をこの『場』を削り、その拮抗が目に見える火花となって現われていた。

パチ、パチ、パチ。

それは、触れれば焼き尽くすという彼女の一面を浮き彫りにしていた。弾けて僅かに光を放つ、暗闇の中でこそ美しく際立つ炎。次々と燃え尽きていくだけなのに、盲はそれを無視できない。手を伸ばし、羽虫の如くその身を焼かれる。

見境もない。

それこそが彼女の苦悩と葛藤だった。

――吾を怨んでおるのかや？

――もこう。

……関係ない。首を振って、御し難い感情をどこかへ追い遣ろうとする。
いつの間にか、足が止まっていた。
同じ蓬莱人の中でも、元月の民の方はおよそ計りし得ない思考と精神を保持している。が、彼女は、人間として真っ当に生きていた歴史がある。記憶がある。彼女を彼女たらしめている根幹の部分で、あるいは――人と妖怪の狭間での違いが、無意識から体を縛り上げていた。
生きるという事は他者と交わり言葉を交わす事である。様々な事を共有し、想い合う。別に、大した間柄でなかったとしても、『死』というものは途方もなく重い。自分の心が痛くなり、こんなに痛いのなら、こんなに重いのなら――他人なんて、どうでもいいと。
優しい彼女は、そう割り切る事が、できない。

前方から馴染みの気配を感じた。
「慧音」
ぽつり、と安堵の声が思わず零れた。言い知れぬ不安を紛らわすように、慧音、と叫んで駆け出した。
慧音の、淡い銀の髪。こちらには背を向けていて、顔は見えない。
そして、どういうわけか――銀色の向こうに、どこかで見た、桃色の髪が。
――アイツは……！
網掛けのような独特の上着と、その下に彫られた捩れる花のような形状の刺青。
緑がかったピンクの髪。そして、全身に血を被っている。
強さと脆さを抱えた瞳の色。
咄嗟に、妹紅の脳裏に浮かんだのは、あの隆々とした腕が少女の華奢な首を握り潰す先の光景。
血の気が引く、とはまさにこの事なのだろうと妹紅のどこか冷静な部分が判断する。背筋を伝って体中のぬくもりが一挙に“ドッ”

と抜け落ちた。心臓を直接鷲掴みにされるよう、とはよくぞ言ったものだ（実際に何度か覚えがある）。全身に脂汗が吹き出てきた。
焼き払えない。ここからだと、どうやっても慧音を巻き込んでしまうし、その上その僅かな時間だけでも男は慧音を害するだろう。
慧音に身を守る力があるとか、歴史を食らうだとかそんなちゃちな話ではないのだ。
あの、アイツのあれは……。
かえのいらない穢れた体なのだから、慧音の前に立てば盾となれる。
私は、人を守れる。
声が届いたのか、慧音が振り返って、そして驚いたような表情を作った。
――やめろ、やめろ、慧音、やめてくれ！　目を逸らしてはいけない、後ろのそれから目を離してはいけない。過去がどうのではなく先が、未来が食い潰されてしまう――。
胸中で絶叫した妹紅と、慧音が半歩ずれた事で垣間見えたディアボロの視線が、合った。
どこかで見た瞳。
――あの目は“死んでいる”。

「きゅう……」
呻き声。幼い見た目相応に甲高く愛らしい。
しかし、眼前の光景との余りある差異は、違和感を通り越し怖気を催すものとなっていた。
妖怪としての格は外見では計れない。自身も含むその不文律を、八雲藍はまざまざと見せつけられていた。

夜明けというにはまだ早い、一番闇が濃さを増す時間帯。木々に囲まれた中、地べたに直接仰向けに転がり、手足を別次元に吹っ飛ばされている少女が、件の宵闇妖怪である。

その上に腰掛ける、ように見える意地の悪い姿が、主人たる八雲紫その人だ。身を預けるスキマの向こうに広がる空間は、毒々しい紅が覗く平素とは違い、極黒く塗りつぶされていた。

何をか言わんや、紫が身動きを封じている少女が、逆に彼女の領域を侵食しているのだ。

彼女は、あくまで快活に笑ってみせる。

「漁夫の利というのも中々どうして乙ねえ。鴫を撃ち殺す銃やカラス貝を獲る罠がないのなら、知恵を使えばいいのよ。橙にはまだ出せない味ね」

異常に過ぎる。かの妖怪の賢者が策を凝らすほど、言い換えれば力押しが利かぬ相手。そして、捕らえられてなお抗う事が出来る力。

しかし、藍が見下ろす少女からは、どう贔屓目に見ても小妖怪程度の妖気しか感じられなかった。

「納得がいかない、って顔をしているわね」

藍の顔色を読んだように、彼女が言った。

「……ええ、まあ」しぶしぶ、藍が認める。一、二歩近づいた。「これは結局、私が未熟だという事でよろしいのでしょうか？　大妖怪の隠蔽を見破れぬ、と」

「未熟なのは確かね」

紫が、組んでいた足を組み換える。

「でもまあ、あとは大はずれ。貴方が半熟卵（ラン）なら、この子は何十世代も前の、卵を産むニワトリ」

もう少し、自分の立場と力を自覚なさい、と紫が笑む。

「この子はそんなにおっかなくないわ。ただ少し、長く生きているだけ――それこそ、何百何千もの前から」

「それは――」藍が一度口ごもって、

「そうですね、橙には、そうなって欲しくはない、かな」

「その調子よ、多分ね」
紫が曖昧な表情で藍を一瞥し、それから唄うように言った。
「昔から変わらず、変われもせず。ちょっとした立場にいるわけ」
急に、下にいる少女を見下ろし、今度はややからかうような口調で、
「約束ですもの。そうよね？」
「……きゅう」
茨の冠を被るかのように、眠っているのか死んでいるのかわからない、閉じられた瞳と表情。
聖者は、磔刑を免れえぬものだったのだろうか。
「それに、この子自身にはそんな危険な力はないわ。……ほら」
紫が右手を手近に開けたスキマに突っ込み、少女の頭のそばから扇子を握った手が現われる。ほれほれ、と間断なく頭を叩く。
苦痛に耐える聖人のような顔をして、少女が襲い来る暴力を無視していたが、段々とその額に青筋が浮かぶ。
ほどなく限界に達した少女は、扇子に噛み付いた。
「ふうふかふぁふぇいふぁをふぁりふへはのはー（十字架は聖者を磔たのかー）」
今度は口の中で扇子が何度も開かれる。中途半端に開くそれが両の頬を直撃し、目に見えて少女が苛立ってきた。
「あの、紫様……」
「ほらほら、三回周って“毎日三食キツネうどんが食べたいです”と言いなさい」
「喧嘩売ってんのか」
「ふぁふぁいふぁっふふうふぁへ！（聞くに堪えない罵倒の類）」
矢庭に殺気立つ面々に囲まれ、紫が、「どうして妖怪はこうも刹那的な生き方しかできないのかしら……」と物憂げに溜め息を吐いた。少女の唾液まみれの扇子はスキマの中に放り込んだ。そして、ぽつりと、紫が言う。
「残念ね」

外の世界のキャットフードを主人の朝食にしようと画策していた藍は、
「何が……ですか？」
「――いえね」
紫が膝に両腕を乗せ、頬杖をつく。オフホワイトのドレスグローブは、佳麗な造作を品良く彩っている。
「何だか……『彼』の約束も、こんなものだったのかなって」
「は……？　あの、紫さ」
戸惑ったように藍が瞬きをする。
その瞳が再び見開いた瞬間、遥か遠くの竹林が炎に包まれた。爆発などという生易しいものではない。まさに、一瞬で燃え上がった。
言いかけた言葉を引っ込め、藍が息を呑む。夜空が突然炎によって照らし出される。次いで断続的に火柱が天を突き、その熱風をありありと予感させる壮絶な妖気がばら撒かれた。
おそらく、藍は紫に向かって何事かを問おうとした。

睡魔の如く、左に傾く
視界。

「お……」
前のめりに転びかけていた藍が慌てて足を突き出す。
いつの間にか日傘を掴んでいる紫と。
閉じかけたスキマから辛うじて、ちらと見える金髪の数本。黒く染まる次元のせせらぎの中に、赤が垣間見えた。
藍が目を凝らした時には、少女の姿は完全に飲み込まれていた。
紫が少し驚いたような表情で、「あら――」と呟く。腰掛けるスキマからやや勢いをつけて飛び降りた。
しばし虚空を見つめていたが、やがて息を一つ吐いて、視線をよこす藍に向き合った。
「これは――」

藍の言葉に、紫がそうね、と返す。
「飛んでるわね、いろいろと」
藍が振り向いて、立ち上がった業火を瞳に収める。
そこで竹林が不気味に沈黙した。
どうやら、また、時間が飛んだらしい。
「――ディアボロはやり過ぎかしら？　まだ、わからないわね」
思案に暮れるように、口元を隠す指の隙間から、紫の声が漏れ聞こえた。
次の瞬間、その場から二人が忽然と姿を消した。空には二筋のスキマが残っている。
再び、スキマの端が捲れあがって静かに縮んでいき――すぐに、見えなくなった。

真紅の少女～　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｄｅａｄ！！　その？（後書き）

近くのコンビニにおでんが並び始めましたが、まだ九月なんじゃないかなーって思ってます。作者です。
その？を先に書き始めてたので、次はそんなに遅くない、はず。

真紅の少女〜　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｄｅａｄ！！　その？（前書き）

生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死に死んで
死の終わりに冥し。

祕藏寶鑰（ひぞうほうやく）……空海

真紅の少女〜　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｄｅａｄ！！　その？

言ってしまえば人の感情なんて、暗闇の中で灯す焚き木でしかない。爆ぜて、他人を惹きつけて、そして手放す事もできないのだ。

――ぼっ！

前触れもなく音を立てて大きくなり、嫌な臭いを撒き散らして踊り狂い、そして汚い焦げ跡を残す。一度勢いを得てしまったそれはもう自分すらも呑み込み、そして飛び火する。

消せはしない。――消したいのかも、わからない。

自分の中身がゆっくりと燃えていくのに、どうして誰もがあんなに浮かれているのだろう。

人が、焦げ付く臭気。

人が、私が燃えていく様は何だか妙に艶めかしかった。

だけれど、私は。

――××。

父がくれた名前は、あまり愛を向けられなかった私が大事に抱えている、最後の木切れだった。

それを、躊躇なく投げ入れる。

――私”も”、紅く染まれ。

パチパチと爆ぜる篝火が投げかける光に、私の中の薄汚い部分がぼんやりと浮かび上がる。
佳景寂寞とした山中だった。
屈強な男達が思い思いの姿勢で火を取り囲んで腰を下ろす様は、何故だか互いを無言で咎め合っているようにも見えた。
炎が焚き木を平らげる音がやけに空空しく響く。
――私は、何が……したいんだろう。
場つなぎに火へ薪をくべる男の顔が、手元の強烈な光源と纏わりつく闇からくる隔たりが激し過ぎて少しも見えやしない。いくらか離れた場所から傍観者みたく、そんなような事を思っていた。
――だったら、私の方がかえって見え透いているのか。
背を預けた幹の無作法な感触。
「少しは落ち着いたか？」
不意に――低く声がした。
私の隣の空が突如実体を持つ。膝を抱えたまま、碌に櫛も通さぬ髪を揺らし右を向くと、痩躯の男が横顔を見せていた。
顔の造形を彫りだす最中に唇を刻むノミの刃先が狂ったような、不恰好な瑕瑾（かきん）。左頬を痛々しく走るそれ。さらに首へとかけて、いや、皮甲から出た手足、その剥き出しのことごとくに、醜い創傷が見えていた。
――夜気に当てられて咄嗟に声が出ない。
返事をまるで期待していないように無頓着に篝火へ注がれる視線をなぞって、私も再び火を見た。
「……別に」
自分の耳にも届かないような、無愛想で、抑揚のない声がする。

”パチッ”と音がして何かが爆ぜる。火の粉が刹那に舞い、虚空に熔けて消える。
「そうか」
やはり、返ってきたそれも酷くあっさりした、飾り気のないものだった。
そして、「お前さんがどんな理由でここにいようがな、そいつぁ知った事じゃねえしな」
「……ぁ」
「餓鬼(ガキ)がたった一人で着いてくるもんだから、訳ありだとは察するが」
知ったこっちゃねえ……。
――臓腑の奥底から熱を感じるような。
まともな会話なんてどれくらいだろう。
あの忌忌しい、嘲嗤うような満月から幾夜も経ってはいないのに、何故だかそう思う。
「しかし、妙だな」
怪訝そうな、苛立ちを隠せない声で男が言った。
何が、というような言葉を呟いた気がする。
「夜だってのに、妖(バケモノ)の気配すらしねえ。……まあ、出て欲しいっつうわけじゃねーんだが」

化物――妖怪か。
たしかに、人里離れた山奥を行く道のりは、その手の化生に出くわしそうなもの――なのだろうか。俗に怪談と呼ばれる類の話は五万とあるが、私の見聞の中にはあいにく今のこの状況で出るものがいない。そういった”モノ”は大抵、雨、墓場か橋、そして独りっきりと相場が決まっている。夜夜中とはいえ、雲ひとつない澄み切った夜空の下、山中でどこか物々しい集団を脅かす妖怪もいないのではないだろうか。
――そしてもう一つ、美女。

結局、私は……何が、したいのだろうか。
復讐、とでもいうつもりなのか。あの、水ほどの薄さの思い出しか残っていない父のために。
ざらついた風に心が固くなった。居た堪れなくなる寒さは、どこか眠気にも似た身震いとなって背筋を駆け上った。

何かが引き絞られるような音。ふと気がつくと自分の膝を強く抱きかかえていた。
「……寝ろ」
左目をつぶりながら、男が言った。
「お前がついてくる気なら勝手にしたらいいさ。こっちは、頂上で野暮用を済ませなけりゃならないがな」

頭の中に焚き木の炎が焼きついている。腹の底からぞくぞくと、悪寒のような熱が駆け上がって、まるで宙に浮かんでいるかのように酷く頼り無いのっぺりした感じが、私の意識の上から塗りたくられていた。
あの男――岩笠と出発する前に言っていた――たち一行の、誰も私に話しかけようとしない。だが、私には却ってそれがありがたかった。もはや、目的すらも半ば曖昧になって、意地だけで歩いているようなものだったのだから。
――否。
集団のしんがりの、さらに後ろを覚束無い足取りで歩く私へ、時折肩越しに向けられる光。じとっとした、いやに湿度の高いそのまなじり。

どこかで見たような気もする。だが思い出せない。
――地面を踏みしめる足音が、緩慢に私を締め上げていく。
「輝夜……お父様……輝夜……」
私は、夢、末子が、きっとこんな。――でき、そこない。
険し過ぎる道のりは、私を端から削ぎとっていく。
一歩、一歩。
背骨の髄がすかすかになっていくような感覚。死んでしまうよりも先に、“生”というものが薄れてしまっているような気が、した。

見下ろした場所は、この世の光景とは思えなかった。
――唐から伝わった仏教という教えの中に、罪人を滅する地獄というものがあるらしい。ここまで暑い――熱い場所へ、人は死した後行かなければならないのだろうか。
富士山の最頂部。火口よりのぞく、遥か下の眺望から吹きつける灼熱の吐息に、私たちは自然畏怖と恐れを持たざるを得なかった。粘り気のある粘土のような黒い溶岩は絶えず内から裂け、死してその赤を散らし、また黒く冷えて固まるのだった。この山自身の脈動なのだと、立ち昇る熱気は言葉なく示していた。
「岩が――融けてやがる」
呻くように、顔を汗で光らせた岩笠が言った。
「――阿形（あぎょう）、吽形（うんぎょう）」
一行の中から見上げるような大男が二人、のっそりと前に出た。二人とも髪はなく、履いている草履も何もかもが私のものより倍も大きく、そして何より我が目を疑った――それぞれ片腕が、なかった。
「――ここに」
二人が担いでいるものは、一抱えもある『何か』。一分の隙もな

くびっしりと札を貼られた箱に、担ぎ上げるための棒がついていた。
阿形とかいう、箱の前を担ぐ男の方がやや背が低く、左腕がない。肩の辺りから千切れた襤褸から伸びている残った右腕は、見た事もない複雑な字が赤く入れ墨されている。
その後ろを担ぐ吽形は、上半身には何も身につけず、引き締まった肉体を剥き出しにしている。吽形の方は逆に右腕がなく、右肩には割合綺麗な傷跡が残っている。太い左腕は黒、白、青、緑、青などの様々な色を使って球点が彫り込まれていた。
特に前触れもなく、片腕ずつ器用に担いでいた箱を阿吽の呼吸で降ろす。
――これが、あの女の置き土産。
「これが……」
「そうだな。詳しくは知らねえが、わざわざ“天に最も近い”この山で燃やせ、だとよ。――きっと随分なモンが入ってんだろ」
居並ぶ男の目にも明らかな嫌悪感が宿っている。確かに、扱いに困るものではあるのだろう。でなければ、わざわざこんな山まで捨てに来させはしまい。けれど――彼らは、これがあいつの残していったものだと、知らないのだろうか。
岩笠と共に七人ばかりの男達が取り囲んでいる、その箱。
――あれは駄目だ。
なぜだろう。厳重に過ぎる封印を何ら問題にせず、私には箱の中が薄っすらわかりえる。
――この世の物ではないのだから。
――だから、だから棄ててしまわないと。
白。たとえあの世の業火で炙っても穢れえぬ色。それが――あの中に。
――汚らしい。
岩笠が面々を見回して、至極面倒だという声音で言った。
「どうだ、いっそ――蹴り落とすか？」
――それが――。

“それはならぬ！”

不意に、背後の火口から声が。

私たちは一人残らずその気配に圧倒される。頭の中で鳥が囀るような。極めて不愉快な声だった。

“人間よ、私の山にそのようなものを抛るつもりか”

しゃがれた中に艶が同居する、少女と老婆が同時に発生しているような奇妙な音。

一斉に岩笠らが私の方へ振り返った。

より正確には、私を超えたその向こうを。

……ありえない、と胸中で呟きながら、私もそれに倣う。そこには、岩場から優に十歩は踏み越えてしまっている位置にたたずむ、妙齢の女性がいた。自身の背丈よりも遥かに長い黒髪。瞳のない真紅の目を持つ『それ』は、虚空をあたかも岩か何かのように悠然と踏みつけていた。

「お前……いや、貴方様は……」

熱気によるものか、それとも圧力に押されたのか。岩笠が一度飲み込んだ言葉を、絞り出すように言った。

「この山の、主で在らせられるか」

“人とはいつの世も不躾よな。駿河の霊峰が一柱、木花咲耶姫（コノハナノサクヤビメ）前ぞ！”

弾かれたように皆その場に膝をついた。――弾かれた、というより、あの神に強要されたのだ。有無を言わせぬ不可視の力が上から圧し掛かってくる。口調とは裏腹に、声には怯懦の響きがあった。

“人の子よ。それを持ってこの山を降りる事を許す。薬は石長姫の居る八ヶ岳で焼くがよい。我の与り知らぬ所ゆえな”

体の拘束が緩んだ。しかし――後ろから、歯切れのよくない声がした。

「今――薬と仰られたか」

“如何にも”
「木花咲耶姫様はもしや、あの箱に封じられた物が……御分かりになられる、と？」
“……なんと”
僅かずつだが、体は動くようになってきた。首を上げると、『それ』の輪郭が揺らいでいた。
“やはり人は救えぬ。己が罪を知りもせぬとは――”
「我々は帝の密命にてこれを燃やすよう遣わされた者。畏れながら、箱の中は検めるなと厳命されており……」
“よい”
緩められたとはいえ、未だ水の中を掻き泳ぐような抵抗感が体に纏わりついている。なのになぜ、岩笠はそこまでして――。
“言い訳など聞かぬ。聞きとうない”
『それ』が背を向けると、ますます立ち昇る陽炎にその体の輪郭が掻き消されていく。一方で、辺りには匂い立つほどの“気配”が立ち込める――。
“そのような物には姉が相応しいだろうよ。早く――立ち去るがよい”
「これは――」
“そうとも”
赤い瞳が、何故か私を見据えた気がした。
“人に永遠の生を授けるは其が禁薬。愚かで呪わしい――蓬莱の薬よ”
そのまま、声が途切れた。そして、あれほど色濃かった神性も薄れ――気がつけば、そこには何も残っていなかった。
しばらく、誰も動こうとしなかった。熱に犯されたような、気だるく息苦しい感覚に浸る中、誰一人自ら動こうとするものはいなかった。
――――けれど。例え手足を動かさずとも、己を雄弁に語る事は、存外、簡単で。

あるいは内の欲望の炎を灯した瞳。
乾いた表情で箱を睨め付ける男が――三人。
禿頭の二人は、箱よりもむしろその男達を気にしながらも、どうしようかと戸惑った目をしている。
箱の周りに何とはなく立ち竦む二人と、やや火口に近い位置で離れて立っている私と、そして――私の右に蹲った岩笠。頭を押さえ、食いしばった歯の隙間から「おお――」と漏らした。
――不老不死。
その場の誰かがぽつりと言ったその一言に、岩笠を除く全員が身動ぎをし、表情を変えた。
「お前ら――」岩笠が言う。「何を――考えて、やがる」
腕や肩周りの肉が、苦痛からか赤く隆起している――。
「す、てろ……いいか、捨てろ」
強烈な意思で、そして耳を澄まさねば聞き取れないほどかすかに発された、声。よく見ると全身が小刻みに痙攣し、黒い髪からは汗と混じり合った赤い滴りが顎を伝う。
突如、三人の内の一人が動いた。腰から引き抜いた剣を無造作に振るい、懐から何かを取り出しかけていた隣の男の顔に叩きつける。
絶叫が響いた。
手から木簡をばらばらと落としながら、まるで独楽みたく男が回って――。
どさり。
呆気なく、倒れた鮮血の眼差しが、脳漿と踊る。眼球が、私の恐怖を激しく揺さぶった。
――嫌だ。
――死にたくない……！
ひっと、声にならない音が、喉から零れた。
大男が一人、倒れた男の骸をいとも簡単に踏み越え、凶事に走った男に迫る。岩のような左の拳を振りかぶって、空を裂く音と共に殴りつけ――。

およそ生身(かち)の人間が出しえぬような、鉄塊のごとき音がした。相手の剣を弾いたその隻手には、数多の球が光り、黄色い薄雲が纏わりついている。

“ぴょう！”と鋭い風切り音。右腕を携えた方の大男が瞬間、吹き出した炎の中に包まれた。残った最後の男が、ふいごか何かのように口から火を吐き出していた。ちろちろと赤い残滓が口から飛び――しかし、触れた悉くを焼き焦がす息吹を掻き分けて、大男は未だ生きていた。大男の姿が、空以外の何かを一枚隔てているかの如く揺らいで見えた。

血の臭いと、生死を分かつ獣の叫び。

――い。

――……いやだ。

「……おい」胃からせり上がってきた。「おい、ガキッ！」喉が壊れた。

地面に手をついた。一気に嘔吐く……すっぱく、生温かった。

私はまだ――生きているのか。

「――お荷物が！」

急に視界が高くなった。頬を伝ったものが涙だと気づいた時には、喧騒も熱も死も何もかも遠く――睡魔のような感覚が私をどこかへ連れ去った。

――いらない子と、何度言われた事か。

実際にそう、面と向かってなり陰でなり言われる事も確かにあったけど、何より私を見る目の全てが皆一様にそう物語っていた。乳母は表面上荒立たない程度には私に尽くしていたが、二、三日出かけて帰った時などにふと、普段は見せない……隠していたその目の光が顕になる。

おそらく父に呼ばれていたのだろうと思う。

――おう、しばらく見ぬ内に美しくなったのう、……もこう。

母は知らされなかった。生きているのか、それとも死んでいるのかさえもわからない。「お父上の御血縁であられる事こそが大事ですぞ」と乳母は言ったが、その父が滅多に逢おうとしないのではどうしようもない。

――勉学の方も優秀と聞く。それでこそ吾の子じゃ。

私の居場所は、どこにもなかった。

目を覚ましたのは山の中腹だった。木に背中を預けて座り込んだ姿勢のまま、鬱陶しい夢の残り香を払い除ける。見覚えのある、登った時に一度通った森の中だった。

見渡しても、岩笠も男らの姿も、誰一人としていない。

――一瞬だけ湧いた、この世界には私だけという嫌な想像のせいで、『それ』に気づくのが遅れた。

太ももの上の両手が囲う、見た事さえもない精緻な壷。いつの間にこんな物が。手にしたそれをどうしようかと数秒迷ったが、躊躇いがちに蓋を開けてみた。

壷の表を彩る複雑怪奇な装飾とは裏腹に、中には絹にも似た布がぎりぎりまで敷き詰められていて、その上に丹が三粒鎮座していた。黒が二粒、白が一粒。吹けば飛びそうな黒色と、小指の爪よりやや小さいぐらいの白色。それらは、見ようによっては薬にも見え、首を傾げた私の疑問はすぐに解けた。

「ふ……」

不老――不死。輝夜が……これを。

生きる苦悩からも、死という恐怖からも永遠に開放される事。人

生は、人が生きる時間はあまりにも短過ぎるから。

――吾ももう若くない。老いた者には価値がない。

死ぬのは、怖いから。

生きているだけでも先の事なんてまるでわからないのに、死んでしまった後の世界なんて――人間には、わかりえない。

『世界』。

あるいは、無なのか。この国で仏教が台頭し始めてきたのも、あるいはそれが死というものに尤もらしく講釈をくれるから――では、ないのか。阿弥陀如来、問答、輪廻。いずれもにしろ、暗闇を歩くのに、独りでは……歩けない。迷ってしまう。生まれ変わるというのは、その中を歩く当人にしてみれば、酷く魅力的だろう。誰でも、欲しくなる。

――私は。

その灯りの中に身を投じれば、あるいは灰の中から起き上がる事ができるのか。

私の中で鬱々と、今までの事が、過去が、燻ぶる。火はついてしまっているくせして、無様に煙を吐き続けるばかりで喘いでいる。ぜいぜいと、まるで老人のような息を漏らしていたのは、私だった。

手にした壷は、脳裏まで凍りつきそうなほど――冷たい。

そして。

後ろの木立がざわめいた。

「どこ行ったガキ、おい！」

振り向いた先にはあの岩笠が。

――蠢いて、いる。

「おいガキ……クソガキ、“どこ行った！？”」

俄かに騒がしく、がさがさとやぶが音を立てる。一緒に聞こえる金属音は一体なんだろうと思った瞬間に、“それ”が緑の葉の隙間から目に飛び込んできた。刀だ。それも、血で汚れた、赤い……。

凶事によって死んだように眠る私の頭の中を、その感情はたやすく支配した。
――怖い。
手が意思に反して震え……壷の蓋を弾いてしまう。
一度転がり始めたら、もう止まらない。落ちるだけだ。
反射的に顔を上げた私と、こちらを真っ直ぐに見据える岩笠の視線が交わった。心臓が痛いほど胸を叩き、視界の端がにじむ。
「ひっ――」
その手が腰に伸ばされた刹那、私のどこかが叫んだ。
絶叫した。
「おい！」
聞こえない。見えない。見っとも無く泣き喚いて、走り出した先には何もない。何もない場所へ、私は、壷を抱きかかえて逃げ出した。
後ろから死が追ってくる。決して振りほどけない――。
だから。
だからこそ魅力的に思えた。とても簡単な事だ。
そうだ。
そうだ。
私にはわからない。――いっそ、燃え尽きる前に。
指先に薬を三つとも取ると、躊躇いもせずに飲み込んだ。どれかが喉の手前で引っかかるが、唾で無理矢理嚥下する。
すると少しずつ徐々に徐々に、体の奥が感じた、これは――。
“炎”。
「あ、あああああああああああ！」
視界、が、白い。視界が黒い。
眼球を両側から押し潰されている感覚。それも目や足だけではなく、全身が炎にくべられたかのように、熱い。上下の区別も瞬く間にわからなくなった、転んだのだろうか？　体で感じる感覚という感覚が肥大し、鎖され、そして極々自然と――薄れていく。

最早体が、意識できない。
――ああ、そうか。
世界と私を隔てているのは、もう『私』だけなのだ。“みちみち”と音を立てる私と追憶。死ぬのは『私』なのだ。
踏み越えればいい。
死んでいく途中なのだから。
生きている事が間違っていたのだから。
灰に包まれた私は白く、熱く、赤い。
そうとも。泣いていた少女は粉微塵に消えてしまった。『私』は私。そんな夢に、何の意味があるだろうか。
罪は永劫に燃え上がる。私を焼き尽くそうと。
そして、静かに目を開けた。

空が随分遠くに、そして穢れないものに見えた。周囲を見渡して状況を鑑みるに、私は谷底にいる。崖から落ちたのだろうか。胸の真ん中には、彼が腰に差していた短刀が突き刺さっていた。その周辺がきりきりと傷む。柄を握ってた右手は、透き抜けるように青白く、私の手ではないみたいだった。ゆっくりと刃を抜き出した傷口から血が――零れる。溢れ出す。
そこでようやく、鼻が血の臭いを感じた。
岩笠は、私を抱きかかえるように、下になっていた。全身が赤くしとどに濡れていて、右の腕があさっての方向に捻じ曲がっている。
まだ、かすかに息をしていた。まるでそれは『私』を見てるようで、だから、私は。
追ってきた死に、短刀を振り下ろした。金属の刃先が抵抗もなく肉の中に沈み、何か躍動するようなものを貫いた。
小さく呻いて、すぐに動かなくなる。
返り血が顔にかかる。私の髪は、いつの間にか赤くなっていた。
生まれた私を色取るのは血の羊水。
黄泉返る。

――どうだ、と、誰かが囁いた気がした。そうだ、そうだ。
人とはかくあれかし。死はかくあれかし。
ならば人とは何だ。死とは。火とは、生のように。無明の闇の中でこそ、強く燃えるのだ。
私も、赤く、紅く。血が煮え滾る。熱く、紅い。私“も”、紅く染まれ。

焼け爛れて、焦げ付いて。
――私の中の火はまだ、燃えている。

真紅の少女～　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｄｅａｄ！！　その？（後書き）

今回、「東方儚月抄」の設定を流用しております。
作者なりに調べまわったつもりですが、いかんせん未読なので矛盾があるかもしれません。ご注意いただければ。
あえて変えた部分もありますけどね。

相場は妹紅が言ったものだけではなく、人の生活圏と“そういったもの”の境界である山や海、子供のなりかわり、家の中の怪異、分類としてなら妖怪変化なんかも入るのでしょうかね。
また、本文中で妹紅が独楽のように、と言ってますが、日本で独楽が遊ばれ始めたのが大体この時代からみたいです。もこたんインしたお。

そんなわけで第二十話「彼女の紅い慟哭」です。

真紅の少女～　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｄｅａｄ！！　その？（前書き）

私は、お腹が空いた時以外はした事がないからわかんない。
食べるために殺すんじゃないの？
「それでも、殺す事は確かに不都合を解決する場合があるわよね？」
――わかんない。お腹が空く以外の不都合ってあるの？

真紅の少女〜 Ｃｒｉｍｓｏｎ Ｄｅａｄ！！ その？

能力がズバ抜けて優れている者などを特に時代の申し子だとか時代に愛された、と称したりする。時代とは歴史、文化の事であり、例えばレオナルド・ダ・ヴィンチは十五世紀の段階でヘリコプターのようなものの原型を考えていたが当時の技術力が追いついていなかった。つまり、己が最大限に能力を発揮できる土台が完成していて初めて才能が輝くのである。

天才ハッカーが中世に生まれても活躍なんてできないし、資本制度によって成り立った社会の上にギャングはできる。

彼はかつて己の力を「運命によって無敵の頂点に選ばれた」と言った。流転する時間によって運命は形作られ、その中でいう世界とは一つの抗いようもない強大なうねりである。

ならばその“時代”の行く末を決定するものは一体何なのだろうか。もしそれが特定の個によって行えるようであるなら、それは神とも呼べるのではないか。

――神の威光の及ばぬところには、悪魔がいるとされている。

闇を照らし、妖怪を否定する「時代」。人が、安易なごまかしと恐怖を捨て夜を否定する事。

幻想郷はその流れに抗い、未だに人妖が互いを意識し続けたまま存在している。

――そして、神は悪魔（ディアボロ）をも受け入れる。

平素はどちらかといえばとぼけているような、飄々とした言動をする藤原妹紅の、おおよそ冷静とはいえない雰囲気にただならないものを感じた慧音は「……どうしたんだ」と呼びかけた。彼女の声も、真情を隠しきれずにやや固い。

背後に庇うようにディアボロの前に立っているのだが、その両者の間には、幻想郷において酷く馴染みのない、憎しみのような、敵意に近いものがあった。

「慧音――」

必死さがにじむ声で、妹紅に名前を呼ばれる。その目は彼女を捉えずに真っ直ぐすり抜けて彼を睨みつけていた。怒っているようにも、泣いているようにも見えた。

「慧音、“それ”から離れろ」

「……どうしたんだ？　妹紅、私は」

「慧音！」

彼女の言葉を遮って妹紅が叫んだ。明確な理由が見えてこない。どうすれば、と眉根を寄せた慧音の後ろから、ディアボロが声をかけた。

「上白沢、そいつは――」

「違う、大丈夫なんだディアボロ。彼女は藤原妹紅、私の古馴染みで、敵じゃあない」

“敵じゃあない”。どこかで聞いたようなセリフを慧音が言う。

「――お前がそう言うのなら、にべもないが」

ディアボロが顔をしかめて腕を組む。

埒が明かないと、じれたようにつかつかと妹紅が詰め寄ってむんずと慧音の手を掴んだ。「お、おい――」という声を無視してそのまま己の背後に彼女を庇うと、妹紅は、挑みかかるようにディアボロを見上げた。
「どういうつもりだ？」
「……ふじわら、とか言ったか。何の事だ？」
「とぼけるな！」
お前は……と、言葉を捜して少しの間逡巡し、やおらに声を荒らげた。
「あの、子供に、お前は何をしたッ」
「子供？」
慧音が、妹紅とディアボロの顔を交互に見やった。妹紅が怒気を炎に昇華させ文字通り火花を散らし、ぐっとまなじりを吊り上げるのに対し、ディアボロは至って平素と変わらぬ様子で――だが、どこかうっとおしげな表情を浮かべていた。
「あー、子供って、どういう事だ？」
「こいつは……」
「不可抗力だったのだ。仕方あるまい」
「お前はアレを絞め殺そうとしてたろうが！」
「妖怪、とやらだったからな。実際わたしも襲われたのだ」
言い争い、お互いに平行線を辿る他ないとわかってしまった雰囲気だ。慧音は、ディアボロが平然と妖怪を退けたと言ってのけた事にも驚いたが、なにより付き合いの長い友人がいつになく苛立っているように思えた。
（言い分だけ聞いているならディアボロの方が理にかなっているが……）
おそらくだが、彼女が言及しているのはそういった部分ではないのだろう。
既視感のある瞳。黒い、それは、寺子屋の子供達が何かを理不尽だと訴えるときの、あの色をしていた。

（仕方ない、“食う”他なさそうだな）
激しく詰め寄る妹紅の姿に、彼女がそう腹を括ったとき、一際大きな声を上げたかと思うと妹紅が右手をさっと掲げた。集約された妖気は彼女を内側から照らし出し、風もないのに神がふわっ……となびく。妖気はそのまま彼女の腕をかけて、大きく開かれた右手の中心へ。
「パゼスト……ッ」
しかし、次の瞬間、驚愕するような事態が起こった。
炎が竹林を包み込んだと思ったら一瞬で跡形もなく消えたのだ。
巻き起こるであろう炎の勢いすらもなく、当の妹紅も、あっけにとられていた。
「……キング・クリムゾン」
ディアボロは先ほどと変わらぬ位置に立っていた。
彼自身は何もしておらず、まるで炎の方が勝手に消えた、といっても通用しそうなほど、自然体で、気負いなく。
彼のスタンド『キング・クリムゾン』が時間をふっとばして、その間の過程を時間もろとも消し飛ばしたのだった。
「足元に気をつけろよ、妹紅」
抑揚に乏しい声でディアボロが言った。
彼が組んでいた腕を解いて、右腕を軽く広げる。その動作に妹紅はなぜか、先ほどの少女の細い首に食い込んでいたその腕が己に襲い掛かってくるようなイメージを抱いたのだった。思わず反射的に弾幕をぶっぱなして、そして今度は“それ”の一部始終を近くした。
弾幕は、発動すらしなかった。視界が右から左へ傾き、知らず知らず僅かに重心が偏りずれて、たたらを踏む。
今度こそ、徹頭徹尾――時間を『消し飛ばされた』のだった。
「落ち着け、妹紅」
と、彼女の肩にぽん、と手が置かれた。振り返ると、何やら悩ましそうな顔の慧音がおり、
「とにかく――一度、私の家へ行こう」

と言った。

――ああでも、前は紅い巫女に邪魔されて、今度はピンクの髪した人間に邪魔されたから。

「殺しておけばよかった？　そういえば、アナタ達は人間を生きたままで食べないわね」

先に殺しておかないと、不都合なのよ。いろいろと。

「そうなのかもね。――でもそれって、果たして本当に自分の空腹感に根ざしているものなのかしら？」

どういう事？

「アナタ達の“飢え”は、殺した時点で満たされているのではなくて？」

……あくまで、それは手段でしかないわ。

「ならどうして“ごっこ”なのかしら。目的と手段が、意味と意義が転じてはいないと――言える？」

さあ。

「彼のように、自分は誰にも負けないとか考えてる？　辛い事を乗り越えられたら必ず幸福になれると思ってる？　……過程を、『今』を蔑ろにしているのに」

……そーなのかー。

「どこか刹那的よね。他人を穴に蹴落としその上に君臨して、それ

で本当に終わりだとでも思っているのかしら。生きている途中で“第三部完！”なんて事があるはずもないし、不都合は尽きる事無く湧いてくるのに」

――でもそれって、別に私たちに限った話じゃあないわよね。

真紅の少女～　Ｃｒｉｍｓｏｎ　Ｄｅａｄ！！　その？（後書き）

ポルポルと偉大なる死の短編をそれぞれ書いてたらこっち忘れるというね。
メモ長から打ち直す作業に三日かかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6605l/

東方鎮魂歌

2011年11月6日02時04分発行